

---

# 遊戯王GX 十代にもし双子の弟がいたら...

天空 翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX 十代にもし双子の弟がいたら…

### 【Nコード】

N6839V

### 【作者名】

天空 翼

### 【あらすじ】

十代には双子の弟がいた。その名は紅代！両親の離婚で離れ離れだった2人はデュエルアカデミア試験会場で再会するがデュエルに対する十代の知る紅代の面影はなく「デュエルは勝つことが全て。負けは許されない。真のデュエリストは1人だけだ。」と言う考えを持っていた。そのことで対立してしまい紅代から嫌われる十代。果たして紅代が「勝利」にこだわる理由とは？何故、「勝利」にこだわるようになってしまったのか？全てはアカデミアで起こる事件に関していくうちにわかってきた… 第2期突入！

## メインキャラ紹介

遊城紅代（通称・コウ）  
ゆうぎこうだい

所属・オシリスレッド

年齢・初登場時16歳

詳細・この物語の主人公の1人。

十代の双子の弟。

兄とよく似た容姿を持つが性格は真逆で常に冷静沈着。さらには頭脳明晰。

幼いころ、勉強ができるのを逆恨みされ学校の男子からイジメられていた。

そんなある日、十代がデュエルで自分より年上の少年を倒しているのを見てデュエルを教わる。

しかしなかなか上達はせず（主に引きが悪く）大会にも出たことがなかった。

両親の離婚で一時的にアメリカに行き十代とは離れ離れになってしまっていたが手紙での連絡のやり取りはしていた。

しかし1年後アメリカのデュエル大会に出る前日に行方不明になり6年後のデュエルアカデミア受験会場で十代と再会する。

しかしそのときの紅代は「デュエルは勝つことが全て」という考えを持ち「デュエルを楽しむ」者を嫌う性格へと変貌していた。

だが心の中では十代のことを十兄と愛称で呼んでいたりデュエルを楽しみたいという気持ちがあったりなど、何かに縛られているような描写があり組織・デスペルというデュエリスト犯罪集団と何らかの関係があるらしい。

#### 使用デッキ

「G」ガーディアンと名のつくモンスター群。

十代のE・HEROとは違って防御系統のモンスターが多く、長期戦向けのデッキ。

遊城十代ゆうじょうしだい（通称・十兄、アニキ）

所属・オシリスレッド

年齢・初登場時16歳

詳細・この物語と原作の主人公の1人。

紅代の双子の兄。

弟と性格は真逆で常にデュエルを楽しむ活発な性格。頭は弟と違って受験番号110番というくらい悪い。

幼いころ、学校の男子からイジメられていた紅代を常に支えて助けていた。

紅代にデュエルを教わる、所謂紅代の師。  
何回か大会で優勝するほどの実力を持っている。

両親の離婚で一時的にアメリカに行った紅代と離れ離れになってしまったが手紙での連絡のやり取りはしていた。

1年後アメリカのデュエル大会に出る前日に行方不明になった紅代の形見のジ・アース等のヒーローも使う。

6年後のデュエルアカデミア受験会場で紅代と再会するが「デュエルを楽しむ」者を嫌う性格へと変貌していた紅代を見て戸惑う。

しかし紅代の電話の内容を偶然聞いてしまい紅代の変わってしまった原因を探するためにデスペルのことを調べ始める。

紅代のことを何度拒絶されても変わらずコウと愛称で呼んでいる。

紅代のことを溺愛しており何があっても守ろうとしている。所謂ブラコン。

そのブラコンっぷりはカイザーや吹雪を圧倒する。

使用デッキ

原作のまま「E・HERO」デッキ。

しかしジ・アース、アブソルートZero等の漫画版ヒーローも使う。

そして紅代との兄弟の絆「ブラザー・バンド」等の魔法カードも使う。

元ネタは流星○ロツ○マン。

## オリジナルカード紹介

シリーズ・「G」  
ガーディアン

所有者・遊城紅代

詳細・エドの父親がデザインしペガサス・J・クロフォードが作成した世界で紅代のみが持つカード群。

十代の攻撃特化のカードとは違い守備に特化したカードが多いカテゴリー。

G・HEROブレイクストライク

効果モンスター

星1/風属性/戦士族/ATK0/DEF500

このカードは1ターンに1度、守備力を500ポイントアップできる。

このカードの守備力がアップした回数だけフィールド上に存在するカードを持ち主の手札に戻す。

初登場回

プロローグ2 兄弟の再会

詳細・紅代のデッキで代表的な壁モンスター。

主に紅代は「風守のリング」と一緒に使い守備力を上げてモンスターや厄介なマジック、トラップカードを手札に戻している。

G・HEROドリルブレイク

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 機械族 / ATK2000 / DEF2600

「G・HEROブレイクストライク」+「G・HEROシールドリ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は相手の手札の数×500ポイントアップする。  
1ターンに1度このカードは戦闘では破壊されない。

初登場回

プロローグ2 兄弟の再会

詳細・紅代の融合モンスターの1体。

主に「G・HEROブレイクストライク」のコンボと一緒に使う。

風守のリング

装備魔法

「G」と名のついたモンスターに装備可能。  
カードエフェクト

このカードを装備したモンスターの守備力は500ポイントアップする。

初登場回

プロローグ2 兄弟の再会

詳細・紅代の持つ装備カードの1枚。

「G・HEROブレイクストライク」とのコンボの他に守備モンスターの守備力をアップさせての壁にするのにも使える。

G・HEROウインドピエロ

効果モンスター

星3 / 風属性 / 戦士族 / ATK500 / DEF2000

このカードは1ターンに1度相手の攻撃を無効にできる。

初登場回

第三話 月一試験と6年前の事件

詳細・紅代の壁モンスターの1体。

「ガードブレイブ」で敵モンスターを自分の装備モンスターにし、「ブレイクボンバー」のコストにするとというコンボによく使われる。

ガードブレイブ

通常罠

「G・HEROウインドピエロ」が相手の攻撃を無効にしたとき発動可能。

相手フィールドのモンスターを自分フィールド上のモンスターに装備カードとして装備する。

初登場回

第三話 月一試験と6年前の事件

詳細・紅代の持つトラップカードの1枚。

「G・HEROウインドピエロ」専用カードでもあり「ブレイクボンバー」の主にコスト確保のために使われる。

クリーナー  
消去者

効果モンスター

星2 / 光属性 / 戦士族 / ATK500 / DEF1000

このカードを手札から墓地に送ることでこのターン相手フィールド上に

表側表示で存在する効果モンスターの効果を無効にする。

初登場回

### 第三話 月一試験と6年前の事件

詳細・紅代の効果モンスター。

魔法、罨カードが効かないモンスターに対して使用されたり十代のフレイム・ウイングマンのように効果ダメージを与えるモンスターの効果ダメージを避けるために使われる。

G・HEROシールドリル

チューナー・効果モンスター

星4/地属性/戦士族/ATK1000/DEF2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り他の「ガーディアンG」と名のつくモンスターは

戦闘では破壊されない。

1ターンに1度、手札を1枚捨て相手フィールド上に存在する魔法、罨カードを1枚を破壊することができる。

初登場回

### 第三話 月一試験と6年前の事件

詳細・紅代の効果モンスター。

他のGを戦闘から守る効果と魔法、罨を1枚破壊する効果を持つ。

「G・HEROドリルブレイク」の融合素材でもある。

## プロローグ 十代の弟 その名は紅代！（前書き）

この小説は十代に双子の弟がいたらどんな感じだろうなと思った結果です。

## ブローグ 十代の弟 その名は紅代！

とある孤島にある学園。名をデュエルアカデミア。

デュエリストを育成するデュエルの学校だ。

毎年多くの受験生がおり、その門はかなり狭いという。

そんな多くの受験生の中に2人の精霊が認識できるデュエリストがいた。

1人はこれから仲間とともに様々な事件を解決し成長し、果てには伝説といわれるまでもなる少年。

そしてもう1人は…

「チツ、遅れそうだ…」

自転車に乗り全力でペダルを扱う茶髪の少年は腕時計を見ると舌打ちをした。

そしてさらにペダルを扱う足に力を入れた。

「よし、先ほどの受験番号110番も行ったしもう大丈夫だ」「ストップストップストップ！！」「！？」

デュエルアカデミアの入学試験受付の職員は声のしたほうを見る。自転車が進みから飛び出してきた。

「ハア、間に合ったようだな…受験番号1番だ！新幹線の事故で遅れた。」

「わ、わかった。早く行きなさい。」

「ああ！恩に着る！」

少年は一礼すると自転車を止めて会場へと走った。

「やってるようだな。」

少年は会場に入るとそう言う。

「スカイスクレイパーシュート！！」

「マンマミーヤー！！」

「十代、か…何年振りだろうな。」

『受験番号1番、遊城紅代君。デュエルフィールドまで来てくださ  
い。』

茶髪の少年、遊城紅代はニヤリと笑みを浮かべた。

デュエルフィールドに降り立った十字架のような模様が描かれた服を着た彼の瞳は冷たかった。

「私服で受験とは随分と余裕なのですね？」

彼方の相手はこの私、クロノス・デ・メディチがするノーネ！」

「わかったよ。早く始めよう。」

クロノスと紅代はデュエルディスクを構えた。

「十代の弟 その名は紅代！」

「デュエル！」

クロノス

LP 4000

紅代

LP 4000

「私のターン、ドロ！ニョ！トロイホースを召喚しますーノ！」

トロイホース

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / ATK 1600 / DEF 1200

地属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

トロイホース

ATK 1600

「さらに魔法、二重召喚を発動するーのデス！」

二重召喚

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

「二重召喚の効果でこのターン、2回目の通常召喚を行いますーノ！  
トロイホースを生贄に古代の機械巨人<sup>アンティーク・ギアゴーレム</sup>を召喚するーノデス！」

古代の機械巨人

効果モンスター

星8 / 地属性 / 機械族 / ATK 3000 / DEF 3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

「古代の機械巨人…か。

（レアカードにも落とし穴ってのはいっぱいあるってことを見せてやるぜ…）」

「カードを1枚伏せ、ターン終了ですーノ！」

クロノス

LP 4000

手札2枚

モンスター / 古代の機械巨人（攻）

魔法・罠 / リバース × 1

「いくぜ、オレのターン！」

紅代の手がカードの束に触れる。

紅代は瞳を瞑りカードを勢いよくドロウした。

「ドロウー！ー！」

…続く…

## ブローグ2 兄弟の再会

クロノス

LP4000

手札2枚

モンスター／古代の機械巨人（攻）

魔法・罠／リバース×1

紅代

LP4000

手札6枚

モンスター／0

魔法・罠／0

周りから古代の機械巨人が出てきたことによって「あの受験生終わったな」や「可哀想に」などの声が聞こえてくる。

「（うるさい…）オレはG・HEROブレイクストライク召喚！」  
ガーディアン

G・HEROブレイクストライク

効果モンスター

星1／風属性／戦士族／ATK0／DEF500

このカードは1ターンに1度、守備力を500ポイントアップできる。

このカードの守備力がアップした回数だけフィールド上に存在するカードを持ち主の手札に戻す。

紅代の場に緑のユニフォームを着てサッカーボールを持ったモンスターが現れた。

背番号は2番。

「そのような低級レベルモンスターで何が出来のーネ!？」

「古代の機械巨人の落とし穴ってわかるか？」

「古代の機械巨人に落とし穴などないのーネ！」

紅代の質問にそう答えるクロノス。

紅代は呆れた。

「この程度の実力なんてな…古代の機械巨人の落とし穴はこれだ！ブレイクストライクは1ターンに1度、守備力を500ポイントアップできる！」

G・HEROブレイクストライク

DFE500↓1000

「さらに装備魔法、風守ふうしゅのリングをブレイクストライクに装備する！」

風守のリング

装備魔法

ガーディアン

「G」と名のついたモンスターに装備可能。

このカードを装備したモンスターの守備力は500ポイントアップする。

ブレイクストライクの指に緑の宝石のついた風のような模様の描かれたリングが装備される。

「これでブレイクストライクの守備力は500ポイントアップだ！」

G・HEROブレイクストライク

D F E 1 0 0 0 ↓ 1 5 0 0

「これでよし…ブレイクストライクのモンスター効果だ！」

紅代がそう言うのとブレイクストライクがサッカーボールを2つクロノスの古代の機械巨人、セットカードに向かって蹴り飛ばした。クロノスのフィールドから古代の機械巨人、セットカードが手札に戻ってしまった。

「な、何が起きたのですーノ！？」

「ブレイクストライクは守備力をアップした回数だけフィールドのカードを持ち主へと戻す。

先生、アンタの古代の機械巨人はマジック、トラップを無効にする効果があるが、

それはそのカードが攻撃を行うとき、しかもダメージステップだけだ！

つまり、それ以外の場合の効果は受け付けてしまう！」

「そ、そうなのーネ！ま、まさかそこをついてくる何ーテ…」

「そうだ、それこそが古代の機械巨人の落とし穴なんだよ！！  
さらにマジック、融合発動！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決め

られた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「ブレイクストライクと手札のG・HEROシールドリルを融合！天を貫き大地を割る！そのヒーローの名はG・HEROドリルブレイク！」

G・HEROドリルブレイク

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 機械族 / ATK2000 / DEF2600

このカードの攻撃力は相手の手札の数×500ポイントアップする。1ターンに1度このカードは戦闘では破壊されない。

地面が割れ頭にドリルのついた機械のようなヒーローが現れた。

「しかしそのモンスターでは私のライフは削りきれないのーネ！」

「それはどうかな？このモンスターは相手の手札の枚数分攻撃力を500ポイントアップする！」

G・HEROドリルブレイク

ATK2000 ↓ 4000

「ドリルブレイク、タイタンブレイク！！」

ドリルブレイクが地面に潜ったかと思うとクロノスの前に地面を突き破り現れ、そのドリルでクロノスを貫いた。

「マンマミーヤアアア！！」

クロノス

L P O

「ありがとうございました。クロノス最高責任官？」

「グググウウ、悔しいのーネー!!」

最後に紅代は皮肉を言っ不敵な笑みを浮かべるとデュエルフィールドから去って行った。

紅代が廊下の自販機でコーヒーを買っていると紅代によく似た少年と水色の髪少年、どこか普通な分陰気を持つ少年と一緒に駆け寄ってきた。

「…十代か？久しぶりな。」

「お前、コウか？」

「ああ。また昔みたいに呼ぼうか？十兄って…」

「コウ、コウ、よかったぜええええ!!」

茶髪の少年、十代は紅代に抱きついた。

「グハッ!!」

「コウ、俺は生きてるって信じてたぜ！どこ行ってたんだ！？」

「さあ？」

紅代はゴクリとコーヒーを飲んだ。

「知り合いなの？」

水色の髪の少年は聞く。

「ああ、こいつは紅代！俺の双子の弟なんだ！」

「双子か、それでよく似ているのか……」

「それにしても学力は違うけどね……」

「始めまして、遊城紅代だ。」

「紅代か、俺は三沢大地だ。」

「僕は丸藤翔。」

握手を求めてくる三沢に握手を返す紅代。

「コウ！今からデュエルしようぜ！また楽しいデュエルをさ！」

その言葉を聞くと紅代は顔を伏せた。

「……」

「コウ？どうしたんだよ？」

「…十兄の考えにはホトホト呆れるな。」

「コウ？」

いきなり変わった紅代の様子に戸惑う十代。  
紅代は顔を上げて言い放った。

「デュエルは勝つことが全て。負けは許されない。真のデュエリストは1人だけだ。」

「コウ、何言つて…デュエルが勝つことが全てなんて…」

十代はショックを受けた顔を見せる。

「勝てないやつは真のデュエリストじゃない。デュエルは勝つこと以外意味はない。」

「コウ、お前…！」

「ここでハッキリ言っておくぜ。オレは十兄、いや、十代！お前が嫌いだ。」

「そ、そんな、なあ、嘘だろ？どうしちゃったんだよコウ！」

「オレはオレだ。どうもしてない。それとオレをコウと呼ぶな。虫唾が走る。」

紅代はクルリと向きを変えて去って行った。

そしてその後には十代が呆然と立っており、翔は紅代を嫌な奴と認識し、三沢は紅代の突然の変貌に啞然とするばかりだった。

紅代は長い廊下をしばらく歩くと携帯を取り出した。

「……」

そのままどこかへと電話をかける。

「……はい。……家族は拒絶、しました。……はい。……はい。……わかり、ました……。」

紅代は携帯を切ると壁を思いっきりドンと殴った。

「うつく……十兄……。ごめんなさい、でも、こうするしかないんだ……。  
ごめんなさい、ごめんなさい、でも……助けて……」

……続く……

## 第一話 闇に潜みし悪魔

『いいか、お前は兄を超えるデュエリストになるんだ。』

「はい。」

『そのためには勝利だけを追い求めろ。

デュエルは勝つことが全て。わかったな？』

「はい。」

暗闇で少年と男が話していた。

しかし少年の顔はどこか寂しそうで辛そうで…

「闇に潜みし悪魔」

「デュエルは勝つことが全てなんだ。」

紅代は夢から目覚めるとそう言った。

ここはデュエルアカデミアのオシリスレッドの寮である。

紅代はさっそく指定された制服を着ると外へと出て行った。

小鳥のさえずりが響き渡り太陽が彼の顔を照らし出した。

デュエルアカデミアに来てから約数日がたった。

正直言って紅代にとってはブルー生徒は弱すぎた。

「コオーウ！」

聞き覚えのある声に彼が振り返ると思いつきり抱きつかれた。それは自分の双子の兄である十代だった。

「十代か。言っただろう、俺はお前が嫌いだ。俺の半径5メートル以内には近寄るな。」

紅代は十代を思いつきり睨みつけた。

「そう言っとなってーの！これからデュエルすんだけどコウも行こうぜ！」

「行かないしコウって呼ぶな！」

紅代は十代を振りほどくと思いつきり走ってその場から逃走した。

「あ！コウ！」

十代は紅代を追いかけようとするが足元の何かに気を取られた。

「これって…」

十代の腕を振りほどいた時にでも取れてしまったのだろうか、そこには紅代がもみあげに着けている二つのヘアピンの一つが落ちていた。

「ヤバイじゃん！コウ！これ落とし物…って、いないのかよ!？」

紅代は既にかなり遠くに行ってしまった。

「あいつ相変わらず足速えな。待てよコオーウ！」

十代は紅代を追いかけて走って行った。

紅代は人気のない所に来ると携帯で電話をかけた。

「…はい、もしもし。紅<sup>レッド</sup>の道化師<sup>ドイロ</sup>です。…はい。…わかりました。全ては組織・デスペルのために…」

紅代はそれだけ言うと携帯の通話を切った。

（コウ…？）

会話を十代に聞かれているとも知らずに。

イエロー寮

「え？パソコン？」

「ああ、ちょっと調べたいことがあつてさ…」

十代は組織・デスペルを調べるために三沢にパソコンを借りていた。

（コウが変わっちゃったのは絶対に組織・デスペルが問題だ！コウは兄ちゃんである俺が助けるんだ！）

十代は決意を胸にデスペルの事を調べ始めていた。

---

これはまだ十代と紅代が幼かったころの話。

デュエルが好きで活発で周りから好かれていた兄の十代。

デュエルをやっておらずいつも泣き虫でイジメられっ子だった紅代。

対照的な彼らはいつも支えあっていた。

「お前ってホント本ばかり読んでるよなー、そんなに本が大事なのかよ？」

「僕の本返してよー！」

体格のいい少年が紅代の読んでいた小説を取り上げた。

「返してー！」

「返してほしかったら俺から取り返せよほらほらー！」

体格のいい少年のほうは紅代をいつも苛めているグループのリーダーだった。

少年が本を近くの池に投げ捨てた。

「あ！ううう…僕の本…」

「ギャツハハハハ！お前がすぐに取り返さないからいけないんだよ  
くっだ！」

少年の周りにいたグループのメンバーもゲラゲラ笑い出す。

「ふえええええん！」

「こらー！！コウをイジめるなーーーー！！！！！」

そこに木の棒をブンブンと振り回し十代がやって来た。

「ゲツ！十代だ！」

「逃げるぜ！」

少年たちは十代を見ると即座に退散した。

「あいつら俺がコウから目を離れた隙にいつもいつも！！大丈夫  
かコウ！？」

「うん…でも本が…」

紅代は池に落ちた本を見やる。

十代はそんな紅代の様子を見て冬場だというのに水に入った。

「十兄！？」

「ホラ！本取れたぞ！」

十代は水に浸かってまで紅代の小説を取ってきてくれた。

「ありがとう。」

「へへっ！へつくしゅ！」

「わああ！十兄！早く上がらないと風邪引くよ！」

紅代は十代に手を伸ばしたが足を滑らせそのまま池の中へ転倒してしまった。

「うわあああ！！！」

「コウ！？」

水飛沫が上がり紅代は顔を出す。

「ぶはあ！」

「フッフッフ！アハハハハハハ！！！」

「クスリツ、クスクスクス。」

十代は突然の出来事に声を上げて笑い出し紅代はクスクスと笑い始めたのだった。

これが原因で2人が両親に怒られ風邪をひいたのはまた別の話…

ブルー生徒は森の中を歩いていた。

この生徒はプライドの高いオベリスクブルーでは珍しい差別をしない生徒だった。

「早速このレアカードを使ってデッキを強化しよう。」

ブルー生徒はルンルン気分で寮へと戻っていった。

そんなブルー生徒の目の前にマントを羽織りフードを深く被った自分と同じくらいの年の少年が現れた。

「時は満ちた…。彼方のレアカード、僕が奪わせてもらおう。」

「何だって!?!」

少年はデュエルディスクを構えた。

まるで悪魔の腕のようなデュエルディスクを。

「くっ、やるしかない…!」

「デュエル!」

フードの少年

LP4000

ブルー生徒

LP4000

「先攻は僕からだ。ドロー！僕はクリッターを守備表示で召喚する！」

クリッター

効果モンスター（制限カード）

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK1000 / DFE600

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。

クリッター

DFE600

「カードを2枚伏せてターン終了だ。」

フードの少年

LP4000

手札3枚

モンスター / クリッター（守）

魔法・罫 / リバース×2

「俺のターン、ドロー！俺はアックス・ドラゴニートを召喚！」

アックス・ドラゴニート

効果モンスター

星4 / 闇属性 / ドラゴン族 / ATK2000 / DFE1200

このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

アックス・ドラゴニユート  
ATK2000

「アックス・ドラゴニユートでクリッター撃破だ！」

「トラップカード、死のデッキ破壊ウイルス発動！」

「デッキ破壊だと!？」

死のデッキ破壊ウイルス

通常罠

自分フィールド上に存在する攻撃力1000以下の  
闇属性モンスター1体をリリースして発動する。

相手のフィールド上に存在するモンスター、相手の手札、

相手のターンで数えて3ターンの間に相手がドロートしたカードを全  
て確認し、

攻撃力1500以上のモンスターを破壊する。

「デッキ破壊なんて忌々しいやり方を……！」

「……彼方が何と言おうとデュエルには勝つ。どんな手を使ってでも  
……！」

僕はフィールドのクリッターを生贄にする！

彼方のターンで数えて3ターンの間はモンスター、手札、ドロートし  
たカードを見せてもらう。

そして攻撃力1500以上のアックス・ドラゴニユート、手札のジ  
ヤイアント・オークは破壊させてもらう！」

「くっ！」

カードから飛び出たウイルスがアクセス・ドラゴニユート、ジャイアント・オークに纏わりついた。

「さらにクリッターの効果でデッキからファントム・オブ・カオスをデッキに加えさせてもらっ。」

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

ブルー生徒

LP 4000

手札0枚

モンスター/0

魔法・罫ノリバース×2

「僕のターン、ドロー！僕はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

フードの少年

LP 4000

手札3枚

モンスター/0

魔法・罫ノリバース×1 死のデッキ破壊ウイルス

「俺のターン、ドロー！」

「ドローしたカードを確認させてください。」

「くう…不屈闘士レイレイだ…」

「では破壊ですね。」

ブルー生徒は悔しそうに手札を墓地に送った。

「ターンエンドだ……」

ブルー生徒

LP4000

手札0枚

モンスター/0

魔法・罠/リバーズ×2

「僕のターン、ドロー！僕はエンド・オブ・ザ・ワールドを発動。」

エンド・オブ・ザ・ワールド

儀式魔法

「破滅の女神ルイン」「終焉の王デミス」の降臨に使用する事ができる。

フィールドか手札から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように

生け贄を捧げなければならない。

「いくぞ、手札の溶岩魔人ラヴァ・ゴーレムを生贄に終焉の王デミスを儀式召喚！」

終焉の王デミス

儀式・効果モンスター

星8/闇属性/悪魔族/ATK2400/DEF2000

「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。

フィールドか手札から、レベルの合計が8になるよう

カードを生け贄に捧げなければならない。

2000ライフポイントを払う事で、

このカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する。

終焉の王デミス

ATK2400

「終焉の王デミスの効果発動！2000ポイントのライフを払うことでこのカード以外の全てのカードを破壊する！」

「何だと！うわあああ！！！」

デミスの青い炎で全てが焼かれた。

「終焉の王デミスでダイレクトアタック！」

「うわあああ！！！」

ブルー生徒

LP1300

「ターンエンド。」

フードの少年

LP4000

手札1枚

モンスター／終焉の王デミス（攻）

魔法・罨／0

「くっ、ドロー！（ミラーフォース！神は俺に味方してくれた！）俺はカードを伏せてターンエンドだ！」

ブルー生徒

LP1300

手札0枚

モンスター/0

魔法・罠/リバーズ×1

「残念だ。これで終わりか…ドロー！」

「終わるのは君のほうだ！（さあ、攻撃して来い！）」

「（あの自信の程、攻撃反応型のトラップでも仕掛けてるな…）僕はサイクロンを発動！」

「な！？」

サイクロン

速攻魔法（準制限カード）

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

「お、俺のミラーフォースが…」

竜巻がカードを巻き上げ破壊した。

「終焉の王デミスでダイレクトアタック！」

「うわあああああ！！！！」

ブルー生徒

LP0



## 第一話 闇に潜みし悪魔（後書き）

次回はラブレター事件です。

デスペルが何かも少しわかります。

## 第二話 カイザー亮登場（前書き）

題名通り早い段階でのカイザー登場です。はい。

## 第二話 カイザー亮登場

「ちつくしょー！」

十代はデスペルを調べるため日々図書館や三沢の部屋を走り回っていたのか無理が祟って体育の授業中にぶっ倒れてしまった。そして保健室まで運ばれて今に至るということである。

「デスペルのことは何も収穫なかったし、初めての体育の授業ではぶっ倒れるし、ああもう最悪だああ！！」

十代が嘆いていると隣のベッドから声が聞こえた。

「デスペル？」

「！？」

十代が驚いてカーテンを開けた。

「あ」

「あ」

そこには学園最強のデュエリスト・カイザーこと丸藤亮が寝ていた。

「…し、失礼しました」

「君はデスペルの事を調べてるのか？」

十代がカーテンを閉めようとするとカイザーが声をかけてきた。

「え？うん。いろいろあって…」

「あの組織には関わるな。」

「ど、どういことだよ…」

カイザーが真剣な顔をする。

「あの組織は裏デュエル界では1番極悪非道で表のほうにまでその噂は広がっている。」

「極悪非道…お、教えてくれ！そのデスペルのこと！」

「何故そこまでデスペルのことを知りたがるんだ？」

「俺の弟が、その…危険な目にあってるかもしれないんだ！だから…」

「お前も弟がいるのか…。」

「え？うん。双子のな。」

カイザーは笑みを浮かべると話し始めた。

「いいだろう。デスペルはどんな手を使っても勝利しようとするデュエリストの風上にも置けない者達が集まった裏デュエルグループだ。勝利のためには人を殺めることも躊躇しないというほどのな。」

「

「そんなのが…」

「レアカード強奪もしているらしい。その弟がデスペルに関わっているのならすぐに引き離すんだ。大変なことになるかもしれない。」

最後にカイザーが忠告した。

「わかった！ありがとよ！」

「体のほうはもういいのか？」

「ああ！もうピンピン！それに次は実技だしな！ええっと…」

「オベリスクブルー、丸藤亮だ。」

「（丸藤？）そっか、亮か！俺、遊城十代！十代でいいよ。じゃあなー！」

十代が出て行った保健室はまるで嵐が過ぎ去ったかのように静かになった。

カイザーは静かに呟く。

「十代、か…。あいつとなら良いデュエルができそうだ…」

（カイザー 亮登場）

夜

ピリリリリ…

「何だ、こんな時間に…」

紅代はPDAのメールを開いた。

『丸藤翔は預かった。返してほしくば女子寮まで来られたし。』

「っ！消去しよう。」

紅代は悪寒を感じ即座にメールを消去すると外へと出かけて行った。

女子寮

「コウも呼んだのか!？」

「ええ。でも遅いわね…」

十代は紅代を呼んだというのに驚き天上院明日香は紅代が来ていな

いの不審に思っばかり。

「…あいつ、来ないと思っぜ…」

「え？」

「何でさアニキ。」

「あいつって小っちゃい頃イジメられてさ、それで宛先のわからない呼び出し、知らない人間からの呼び出しは受け付けないんだよ。」

「じゃあ、彼方から呼び出してもらえる？私は彼とは面識ないし。」

「そうか！って、俺あいつのPDAの番号知らないんだったあ！」

「『双子の兄弟なのに！？』『』『』」

全員の言葉に十代は耳を塞いだ。

「いっっっな！」

「ハア、仕方ないわ。紅代とのデュエルはまた今度ね。いくわよ十代！」

「おう！」

「『デュエル！』『』」

灯台

「誰だ…！？」

何者かの気配にカイザーが振り向く。

「丸藤亮ですね…僕とデュエルをしてください。」

暗闇から現れた少年はブルー生徒からカードを奪ったあのフードの少年だった。

「ただし、そのデッキを賭けて…」

「お前は最近学園を騒がせているカードハンターか？」

「はい。まあ、彼方に拒否権はないんですがね。」

「わかった。ただし俺が勝ったらフードを取ってもらっぞ！」

「わかってますよ。」

「「デュエル！」」

フードの少年

LP4000

カイザー

LP4000

「先攻はもらいます！ドロー！僕は黒き森のウィッチを召喚！」

「何！？禁止カードだぞ！？」

黒き森のウィッチ

効果モンスター（禁止カード）

星4 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK1100 / DEF1200

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

自分のデッキから守備力1500以下のモンスター1体を手札に加える。

黒き森のウィッチ

ATK1100

「どんな手を使ってもデュエルには勝つ…！それが僕のデュエルですよ！カードを2枚伏せてターンエンド！」

フードの少年

LP4000

手札3枚

モンスター / 黒き森のウィッチ（攻）

魔法・罠 / リバース×2

「くっ、俺のターン！ドロー！俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン

効果モンスター

星5 / 光属性 / 機械族 / ATK 2100 / DEF 1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

サイバー・ドラゴン

ATK 2100

「さらにマジックカード、エヴォリュション・バースト発動！」

エヴォリュション・バースト

通常魔法

自分フィールド上に「サイバー・ドラゴン」が表側表示で存在する場合のみ

発動する事ができる。相手フィールド上のカード1枚を破壊する。

このカードを発動するターン「サイバー・ドラゴン」は攻撃する事ができない。

「俺は黒き森のウィッチを選択し破壊する！」

「くつ、トラップ発動！死のデッキ破壊ウイルス！」

「何だと!?!」

死のデッキ破壊ウイルス

通常罠

自分フィールド上に存在する攻撃力1000以下の  
闇属性モンスター1体をリリースして発動する。

相手のフィールド上に存在するモンスター、相手の手札、相手のターンで数えて3ターンの間に相手がドローしたカードを全て確認し、

攻撃力1500以上のモンスターを破壊する。

「黒き森のウィッチを生贄に発動！効果は…知ってますよね？カイザー…。サイバー・ドラゴンを破壊！さらに手札のヘル・ドラゴンともう1体のサイバー・ドラゴンを破壊してもらおう！」

「くっ…！デッキ破壊か…。」

「さらに黒き森のウィッチの効果でデッキから幻銃士を手札に加える！」

「カードを1枚伏せてターン終了…」

カイザー

LP4000

手札1枚

モンスター/0

魔法・罠/リバーズ×1

「手札を大きく持っていていかれたか…」

「もう1枚のカードは融合でしたね…なら、行きます！ドロー！来たか…。スナイプストーカーを攻撃表示で召喚！」

スナイプストーカー

効果モンスター

星4/闇属性/悪魔族/ATK1500/DEF600

手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。

サイコロを1回振り、1・6以外が出た場合、選択したカードを破壊する。

スナイプストーカー

ATK1500

「カードを伏せターン終了です。」

フードの少年

LP4000

手札2枚

モンスター/スナイプストーカー（攻）

魔法・罫/リバーズ×2 死のデッキ破壊ウイルス

「まだ死のデッキ破壊ウイルスの効果は2ターンもあるのか…ドロ  
ー！」

「ドロウしたカードは未来融合・フューチャー・フュージョンですね。いいですよ。リバーズカードオープン！魔封じの芳香発動！」

「何！？」

魔封じの芳香

永続罫

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て

次の自分のターンが来るまで発動する事はできない。

「くっ…カードを伏せる。ターンエンドだ…」

カイザー

LP4000

手札1枚

モンスター/0

魔法・罠/リバーズ×2

カイザーは苦戦していた。

魔法カードがロックされさらには死のデッキ破壊ウイルスでモンスターも破壊されてしまうこの状況に。

「成す術もありませんか…僕のターン！ドロー！僕はスナイプストーカーの効果発動。カードを捨てて効果発動！伏せカードを選択しサイコロを投げます。」

出た目は2…

「スナイプストーカーの効果でカードを破壊！」

「くっ！」

スナイプストーカーの銃から光線が発射され伏せていたミラーフォースが破壊された。

「もう1枚の手札を墓地に捨てサイコロを投げる！」

出た目は5…

「破壊！」

「っ！」

「これで彼方は僕の攻撃を防げなくなりました…。」

カイザーは声を詰まらせる。

まさにその通りだったからだ。デッキ破壊をされ魔法カードも封じられ、さらには伏せカードも全て破壊された。  
今の彼に成す術はなかった…

（しかし、ライフは残ってくれるはず…）

「残りのライフに頼ろうとするつもりでも？ だけど残念。彼方のライフはここで尽きる…！」

「何！？」

「僕はトラップ、リビングデッドの呼び声発動！」

リビングデッドの呼び声

永続罠（制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。  
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「邪帝ガイウスを特殊召喚！」

邪帝ガイウス

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 2400 / DEF 1000

このカードの生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。

除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

邪帝ガイウス

ATK 2400

(だがライフはまだ1000ポイント残る！)

「残念だけどカイザー。僕はこのターン、まだ通常召喚を行っていないよ？」

「な！」

「僕はキラー・トマト召喚！」

キラー・トマト

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 植物族 / ATK 1400 / DEF 1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を

自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「全てのモンスターでダイレクトアタック!!」

「ぐわああああ!!!!」

カイザー

L P O

「くっ…負けた…。」

「約束通りデッキは……。」

フードの少年は少し考え込んだ。  
そして何を思ったのか…

「いいや。」

「何故……」

「だって僕は…とにかく！急いで逃げろよ！もうじきデスペルのやつらが来る！」

「しかし…！」

「いいて言ってるんだ！速く逃げて…！」

少年の尋常じゃない気迫に押されカイザーはその場から去った。

「おい、どこに行ったんだ獲物は！？」

「まさか逃したとかいうんじゃないかねえだろうなあ！？」

体格の良い男達が現れ少年に詰め寄った。

「……逃げ出しました。」

「仕方ねえ…。」

「カイザーといえど所詮は腰抜けってことだな！」

「くだらねえこと言ってねえで探せ！まだそこらへんにいるかもしれないからな！」

「そこで何をしているんだ！」

男達が見るとそこには懐中電灯を持った教師達がいた。

「チツ、ずらかるぞてめえら！」

その言葉で全員が逃げ出した。  
少年も暗闇へと消えていった。

## 第二話 カイザー亮登場（後書き）

というわけでカイザー登場&サイドでラブレター事件でしたー。

次回は十代VS万丈目の回ですが紅代の相手はTFのキャラクターです。

誰が出てくるかは楽しみに！

### 第三話 月一試験と6年前の事件（前書き）

紅代は1期ではあまり原作には関わりません。この次の話は十代メインですね。

### 第三話 月一試験と6年前の事件

紅代は背伸びをしパンをモグモグと食していた。

今日は月一試験。そして先ほど筆記試験が終わったところだ。

く月一試験と6年前の事件く

普段、他の人間と接触することを拒み教科書ばかりを読んでいる紅代には簡単すぎた筆記試験。

そこに十代が話しかけて来た。

「コウ！一緒に新パック見に行こうぜ！」

紅代はうざったそうに十代を見やるとプイツと横を向きまたパンをモグモグと食し始めた。

「コオーウ！一緒に行こうぜー！」

「何故、俺を誘うんだ？いつも一緒にいる取り巻きと行けばいいだろう。」

「翔達は取り巻きじゃない！」

十代が机をバンツと叩く。

それに紅代はビクリと肩を震わせた。

「それにあいつらは先に購買に行ったぜ…。」

「そつ。」

紅代はそう返すとパンのゴミをゴミ箱に捨てもう1つのパンを取り出した。

「俺は新パックにも興味ないし新しいカードを入れるつもりもないとつとと失せる！」

「…わかったよ。またな！」

「もう2度と俺の前に現れるな！」

紅代は出て行く十代の背中に向かって叫ぶとまたパンを食し始めた。

「あれがお前の言っていた双子の弟か？」

十代が教室から出るとカイザーが腕を組み壁に寄りかかっていた。

「亮！？」

「また会ったな十代。しかし大変そうだな。」

「再会したときにはあんなだったんだ。しかもデュエルは勝つことが全てだって…」

「再会？」

「ああ、コウとはしばらく離れ離れだったんだ。」

「そうか…」

カイザーはそれだけ言つと購買前まで黙つたままだつた。

「十代、俺はここで。」

「え？一緒に行かないのか？」

「ああ。ちよつと野暮用があつてな。」

「わかつた！じゃあな！」

「また今度。」

カイザーは十代と分かれると紅代のことを考えていた。

「十代の弟、コウか…」

デュエルフィールド

紅代は自分の順番になつたのでデュエルフィールドに立つ。

「シヨニヨール紅代の相手はオベリスクブルーのシヨニヨール藤原雪乃なのーネ！」

紅代の相手はどこか色っぽい分陰気を出すオベリスクブルーの女子生徒だった。

「よろしくねボウヤ。」

「とつとと始めよう。」

「「デュエル！」」

紅代

LP4000

雪乃

LP4000

「俺のターン、ドロー！」

紅代は手札を見て笑みを浮かべた。

「俺はG・HEROウインドピエロを攻撃表示で召喚！」

緑の服を着たピエロが出てくる。

G・HEROウインドピエロ

効果モンスター

星3 / 風属性 / 戦士族 / ATK500 / DEF2000

このカードは1ターンに1度相手の攻撃を無効にできる。

G・HEROウィンドピエロ

ATK500

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

紅代

LP4000

手札4枚

モンスター/G・HEROウィンドピエロ（攻）

魔法・罠/リバーズ×1

「攻撃力500のモンスターを攻撃表示？ボウヤは私のことを舐めてるのかしら…ドロー！私は黄泉ガエルを召喚！」

黄泉ガエル

効果モンスター

星1/水属性/水族/ATK100/DFE100

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、

自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が

表側表示で存在する場合は発動できない。

黄泉ガエル

ATK100

「そしてモンスターゲートを発動するわ！」

モンスターゲート

通常魔法

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。  
通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキをめくり、  
そのモンスターを特殊召喚する。  
他のめくったカードは全て墓地に送る。

「黄泉ガエルを生贄に効果発動！通常召喚可能なモンスターが出る  
までデッキをめくりモンスターを特殊召喚するわ！」

雪乃がめくったカードは5枚。その中に青氷の白夜龍があった。

「青氷の白夜龍を特殊召喚！」

青氷の白夜龍

効果モンスター

星8 / 水属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 2500

このカードを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。  
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選  
択された時、  
自分フィールド上に存在する魔法または罠カード1枚を墓地に送る  
事で、

このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

青氷の白夜龍

ATK 3000

「ウィンドピエロにこ・う・げ・き♪アイスストリーム！」

「ウィンドピエロは1ターンに1度だけ攻撃を無効化する。」

ウィンドピエロが乗っていた玉を使って攻撃をガードする。

「さらにトラップカード、ガードブレイブ発動。このカードは相手のモンスターを自分のモンスターに装備カードとして装備する！」

「でも、私の青氷の白夜龍はマジック、トラップの効果を受け付けないわよ？」

「さらにガードブレイブにチェインし手札からモンスター効果発動  
クリナー  
！消去者！」

クリナー  
消去者

効果モンスター

星2 / 光属性 / 戦士族 / ATK500 / DEF1000

このカードを手札から墓地に送ることでこのターン相手フィールド上に

表側表示で存在する効果モンスターの効果を無効にする。

「このカード墓地に送り相手フィールド上の表側表示のモンスター効果をこのターン無効にする。」

「なんて効果を持ったチートカードなの!？」

「すっげえ……!」

「……」

明日香は立ち上がって驚き十代は顔を引きつらせカイザーは黙ったまま観戦している。

ガードブレイブ

通常罠

「G・HEROウインドピエロ」が相手の攻撃を無効にしたとき発動可能。

相手フィールドのモンスターを自分フィールド上のモンスターに装備カードとして装備する。

「俺はウインドピエロに青氷の白夜龍を装備！」

「これで…私の場にモンスターは0ね。ボウヤ、なかなかやるじゃない。」

「…」

「愛想がないのね。私は墓地の黄泉ガエルの効果発動！墓地の黄泉ガエルをフィールド上に守備表示で特殊召喚！」

黄泉ガエル

DFE100

「さらにカードを伏せてターン終了よ。」

雪乃

LP4000

手札3枚

モンスター／黄泉ガエル（守）

魔法・罠／リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！俺はチューナー、G・HEROシールドリ

ルを召喚！」

「「「チューナー!?」」」

チューナーと言う聞いたことない単語に驚く一同。

それはそうだろう。チューナーとは未来のモンスターでこの時代にはまだいないモンスターなのだから。

紅代のフィールドに右手にドリルのような先の剣、左手に巨大な盾を持った騎士が現れた。

G・HEROシールドリル

チューナー・効果モンスター

星4/地属性/戦士族/ATK1000/DEF2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り他の「ガーディアンG」と名のつくモンスターは

戦闘では破壊されない。

1ターンに1度、手札を1枚捨て相手フィールド上に存在する魔法、罠カードを1枚を破壊することができる。

G・HEROシールドリル

ATK1000

「俺は手札を1枚捨てシールドリルの効果発動！お前の伏せカードを破壊させてもらう！」

「そんな!?キャッ！」

シールドリルが手に持ったドリルの剣で雪乃の伏せカードを突き刺し破壊した。

「俺はマジック、ブレイクボンバー発動！」

ブレイクボンバー

通常魔法

自分フィールド上の装備カードを墓地に送ることで  
フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を破壊する。

「装備モンスターの青氷の白夜龍を墓地に送り特殊召喚されたモンスター1体を破壊する。黄泉ガエルは特殊召喚されたモンスターだったよな？破壊だ！」

「キヤアアア！」

爆発が起きモンスターが破壊される。

「これで雪乃の場は全滅ね…」

「相変わらず嫌な奴！」

「見たことのないカードばかりだな。」

明日香が呟き翔がムスツとし三沢が顎に手を置き考える仕草をする。

「俺はレベル4チューナー、G・HEROシールドリルをレベル3のG・HEROウインドピエロにチューニング！閉鎖された心の扉、何者をも受け付けぬその扉の門番となり、扉に近寄るもの全てをなぎ払え！シンクロ召喚！G・HEROダークソードマン！」

G・HEROダークソードマン

シンクロ・効果モンスター

星7 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 2500 / DEF 2000

このカードがシンクロ召喚に成功したとき手札から

手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚することができる。

このカードがフィールド上に存在する限りこの効果で特殊召喚されたモンスターは

相手の魔法・罠カードの効果対象にならない。

「このカードがシンクロ召喚に成功したとき、レベル4以下のモンスターを手札から特殊召喚できる。さらにこの効果で特殊召喚されたモンスターは相手のマジック、トラップの効果対象にならない！俺は手札からG・HEROファイヤーバーストを特殊召喚！」

G・HEROファイヤーバースト

通常モンスター

星4 / 炎属性 / 戦士族 / ATK 1500 / DEF 1000

G・HEROで珍しい戦闘狂のHERO。

その炎は立ちふさがる相手が強ければ強いほど燃え上がる。

フィールド上に赤黒い炎を点した女のHEROが現れた。

姿はバーストレディそのもの。

「黒いバーストレディだ！」

十代が声を上げた。

「いけ、ファイヤーバースト！バーサーカー・ファイヤー！！」

ファイヤーバーストが巨大な黒い炎をの玉を創り雪乃に向かって放

り投げた。

「きゃ、キヤアアア!!!!」

雪乃

LP2500

「ダークソードマンでダイレクトアタック!ダーク・オブ・スラッシュ!!!!」

「キヤアアアアアアア!!!!!!」

雪乃

LP0

「しょ、勝者、オシリスレッド遊城紅代!」

「……呆気ない。」

「なかなかやるじゃないのボウヤ。」

「……フンッ……」

紅代は握手を求めた雪乃に対しあまりにも素っ気無い態度で手を振り払いデュエルフィールドから出て行った。

「あらまあ……」

「やつぱり嫌な奴だ!」



十代は頭を抱えて状況整理をしデスペルのことをまず聞こうと考えた。

「あ、あのさ…デスperlってどんな組織？極悪非道だって聞いたんだけど…」

「6年前デスperlは一時期腕の立つ子供デュエリストを攫っていたらしいわ。」

「まさかコウもそのときに…！いや、でもコウは俺と違って大会に出たことなかったよな…。デュエルも6年前はそんなに強くなかったし…」

「それなら可能性は低いわね。」

雪乃の言葉にデスperlに攫われたわけじゃないと思った十代はホッと息を吐いた。

しかし、十代は気づかなかった。とても大事なことに…

## 第四話 絆のカード（前書き）

今回はカイザーVS十代戦です。

しかし勝敗が思いがけない結果に…

## 第四話 絆のカード

十代達は数日前、廃寮に無断で入った。

そして退学をかけて制裁タッグデュエルをすることになった彼らにある事件が起ころうとしていた…

「お前の弟、行っちゃまってよ亮！」

十代は制裁タッグデュエルでタッグを組むことになった翔が自分から退学しようとしたので追ってきた。  
そこでカイザーと出会った…

（絆のカード）

「不甲斐ないな、翔。」

「お、お兄さん…！？」

「逃げ出すのか？」

「僕は…」

「それもいいだろうな。」

（亮、お前…！！）

十代は怒った。

自分も兄だから。同じ兄であるカイザーが弟を切り捨てようとしているのを見ていられなくなったのだ。

離れたくなかったのに離れてしまった悲しさを知らずまさに今、翔を切り捨てようとしているカイザーに怒りを覚えた。

翔は泣き出し名前を呼んでも泣きながらイカダの残骸を集め始めるだけで…

「こんなので、こんなので…！お前はそれでも兄なのかよ亮！！！」

「十代…！？」

カイザーは自分を睨みつける十代を驚いた顔で見る。

翔、明日香、隼人は今まで見たことのない十代の怒りっぷりに驚いて目を見開いた。

「お前は兄として何で翔を助けてやらないんだ！すぐ傍に！手の届くところにいるのに！！！」

「アニキ…」

「お前に手を伸ばしたくても、とても遠くて助けてやりたくても助けてやれない気持ちがかかるのかよ！？お前にこのもどかしさがわかるのかよ！？俺はコウに手が届かなかった！お前は翔に手が届くだろう！？何で助けてやらないんだよ！？何で手を伸ばさないんだよ！？」

十代は叫びながらカイザーを殴った。

カイザーはバシャンと音を立てて海に倒れこむ。

今度は十代はカイザーの胸倉をつかんだ。

「お前は弟を何だと思ってるんだよ！！パワー・ボンドを何のためにお前は渡したんだ！？」

「俺は…」

「言葉にしましなや伝わんないときだつてあるんだ！お前は兄弟の絆のために渡したんだろうけど、黙ったままじゃわかるわけないだろう！？」

「言葉にしましなくては伝わらない…？」

「そつだよ！俺は手を差し伸べたくても差し伸べられなかった辛さを知ってる…」。

俺は両親の離婚でコウと離れ離れになつちまつた…。

だからコウが辛いことがあつても助けてやれなかつた…手を…差し伸べてやれなかつた…。

その結果が今のコウの性格だ！考え方だ！！俺が手を差し伸べなかつたからコウはあんなになつちまつた！！

俺が手を差し伸べてたら…きつと…きつとコウは…今でもデュエルを楽しんで…。う、うわああああああ！！！！」

十代はとうとう泣き出した。

そして大泣きしたあと涙を海水で濡れた制服で拭き立ち上がった。

「亮、翔に選別のために、お前自身に兄としての気持ちを教えるために、デュエルしようぜ！」

「…わかつた。そのデュエル、受けて立つ！」

「「デュエル！」」

十代

LP4000

カイザー

LP4000

図書室

「…！」

紅代は読んでいた本を閉じると窓のほうへ顔を向けた。

「十兄がデュエルしている…？」

「俺のターンだぜ！ドロー！俺はE・HEROバブルマンを召喚！」

E・HEROバブルマン

効果モンスター

星4 / 水属性 / 戦士族 / ATK800 / DEF1200

手札がこのカード1枚だけの場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に

自分のフィールド上に他のカードが無い場合、

デッキからカードを2枚ドローする事ができる。

E・HEROバブルマン

ATK800

「さらにバブルマンの効果でデッキからカードを2枚ドロー！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

十代

LP4000

手札5枚

モンスター / E・HEROバブルマン（攻）

魔法・罫 / リバース × 2

「俺のターン、ドロー！俺は融合発動！手札のサイバー・ドラゴン3体を融合し召喚！サイバー・エンド・ドラゴン！」

カイザーの場に3つの頭を持つ竜が現れた。

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

サイバー・エンド・ドラゴン

融合・効果モンスター

星10/光属性/機械族/ATK4000/DEF2800

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「サイバー・ツイン・ドラゴンでバブルマンに攻撃する！エターナル・エヴォリュション・バースト！」

「速攻魔法、バブル・シャッフル発動！」

バブル・シャッフル

速攻魔法

「E・HERO バブルマン」がフィールド上に表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「E・HERO バブルマン」1体と

相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。

守備表示にした「E・HERO バブルマン」1体を生け贄に捧げ、「E・HERO」と名のつくモンスター1体を手札から特殊召喚する。

「バブルマンとサイバー・エンド・ドラゴンを守備表示にする！」

E・HEROバブルマン

DFE1200

サイバー・エンド・ドラゴン

DFE2800

「さらにバブルマンを生贄に手札からエッジマンを特殊召喚！」

E・HEROエッジマン

効果モンスター

星7/地属性/戦士族/ATK2600/DFE1800

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

E・HEROエッジマン

ATK2600

「ならば俺は手札からサイバー・ジラフを召喚する！」

サイバー・ジラフ

効果モンスター

星3/光属性/機械族/ATK300/DFE800

このカードを生け贄に捧げる。

このターンのエンドフェイズまで、

このカードのコントローラーへの効果によるダメージは0になる。

サイバー・ジラフ

ATK300

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

カイザー

LP4000

手札0枚

モンスター/サイバー・エンド・ドラゴン(守)サイバー・ジラフ  
(攻)

魔法・罠/リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！」

カイザー視点

「俺のターン、ドロー！」

さて、十代。お前はどする？お前は俺のサイバー・エンド・ドラゴンをどう破壊する。

「俺は摩天楼・スカイスクレイパーを発動！」

摩天楼か…たしかにそれなら攻撃力を上げて俺のサイバー・エンド・ドラゴンを破壊できる。だが、そう簡単にはやらせない…！

摩天楼・スカイスクレイパー・  
フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、  
攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い  
場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントア  
ップする。

「E・HEROエッジマンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！  
パワー・エッジ・アタック！！」

E・HEROエッジマン

ATK2600↓3600

「トラップ発動！攻撃の無力化！」

攻撃の無力化  
カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。  
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「バトルフェイズを強制終了する！」

「くっ…俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

十代

LP4000

手札3枚

モンスター/E・HEROエッジマン（攻）

魔法・罾ノリバー×2 摩天楼・スカイスクレイパー・

「俺のターン、ドロー！俺はサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃表示にする！いけ、サイバー・エンド・ドラゴン！エターナル・エヴオリュション・バースト！！」

「トラップ発動！ヒーローバリア！」

ヒーローバリア

通常罾

自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする

「防いだか…俺はターンエンドだ。」

カイザー

LP4000

手札1枚

モンスター/サイバー・エンド・ドラゴン(攻)サイバー・ジラフ(攻)

魔法・罾ノ0

「俺のターン！ドロー！俺は装備魔法、エッジ・ソードを発動！」

エッジ・ソード

装備魔法

「E・HEROエッジマン」に装備可能。

装備モンスターの攻撃力を500ポイントアップする。

このカードはエンドフェイズに破壊される。

E・HEROエッジマン

ATK2600↓3100

「E・HEROエッジマンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！」

E・HEROエッジマン

ATK3100↓4100

「サイバー・ジラフのモンスター効果発動！このカードを生贄にこのターン俺が受けるダメージを0にする！」

「けど、エッジマンでサイバー・エンド・ドラゴンは破壊させてもらうぜ！」

「くっ！」

E・HEROエッジマン

ATK4100↓3100↓2600

「これでお兄さんの場はがら空き…」

「ターンエンド！」

十代

LP4000

手札3枚

モンスター/E・HEROエッジマン（攻）

魔法・罫ノリバース×1 摩天楼・スカイスクレイパー -

「いくぞ、俺のターン！ドロー！俺はマジックカード、貪欲な壺発動！」

貪欲な壺

通常魔法

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「俺は墓地のサイバー・ドラゴン3体、サイバー・エンド・ドラゴン、サイバー・ジラフをデッキ、融合デッキに戻しデッキからカードを2枚ドロー！さらに強欲な壺発動！」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「一気に手札が4枚になった！？」

「いくぞ！俺は手札のサイバー・ドラゴン2体を融合！来い、サイバー・ツイン・ドラゴン！」

「さっきの貪欲な壺で戻したモンスターがもう手札に来たってのかよ！？」

十代が驚いている。  
いくぞ十代！

サイバー・ツイン・ドラゴン

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 機械族 / ATK 2800 / DEF 2100

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

サイバー・ツイン・ドラゴン

ATK 2800

俺の場に2つの頭を持つドラゴンが現れる…！

「いくぞ十代！エッジマンをサイバー・ツイン・ドラゴンで攻撃！  
エヴォリューション・ツイン・バースト！」

「くっ！」

十代

LP 3800

「サイバー・ツイン・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「うわああああ！！！！」

十代

LP 1000

ん？あれは…

俺は岸壁の陰に隠れてこちらの様子を伺っている十代の弟の姿を見つけた。

カイザー視点終了

紅代は岸壁の陰に隠れて十代とカイザーのデュエルを見ていた。

（十兄が押されてる…！さっきまで優勢だったのは十兄だったのに…。これがカイザーと呼ばれる丸藤亮の実力…！）

紅代は知らぬ間に胸元で拳を握り締めていた。

（頑張れ、十兄…！）

「俺はターンエンド！」

カイザー

LP 4000

手札 0 枚

モンスター / サイバー・ツイン・ドラゴン（攻）

魔法・罠 / 0

「俺のターン、ドロー！へへっ！」

（十兄の顔つきが変わった？）

「亮！お前のサイバー・エンドを倒す俺とコウの兄弟の絆のカードが手札に来てくれたぜ！」

「何！？」

（兄弟の絆…）

「俺は手札からブラザー・バンドを発動！」

ブラザー・バンド

通常魔法

相手フィールド上にモンスターが存在し

自分フィールド上にモンスターが存在していない場合に発動可能。  
ライフを半分払いエクストラデッキから「E・HERO」と名のつく融合モンスターを1体特殊召喚する。

（十兄…）

「（コウ、お前が行方不明になったときに俺に残してくれたヒーロー）今使わせてもらっぜ！」

「紅代が！？…そう、わかったわ…。十代！今すぐアメリカに行くわよ！」

「え？何で？」

「……落ち着いて聞いて十代。紅代が、行方不明になったの。」

「コウが…行方不明…？」

それは十代と紅代が両親の離婚で離れ離れになった1年後の事件だった。

仕事の都合で少しの間だけアメリカに父親と渡った紅代は初めてのデュエルモンスターの大会に出場する前日に、行方不明になってしまった。

知らせを聞いた母親と十代は急いでアメリカに渡った。

そこで母親と十代は紅代がデッキとデュエルディスク以外荷物を1つも持たずに消えたことを知らされた。

「これ…」

十代は紅代の部屋で紅代が大会当日に手紙とともに贈ろうとしたカードを見つけた。

『十兄へ

僕さ、今日デュエルの大会に出るんだよ！

初めてのデュエル大会だけど初の大会が外国ってワクワクするよね！

あ、手紙と一緒に入ってるカードはこの前買ったパックに入ってた

んだ！

このカードすつごいレアなんだってさ！E・HEROだから十兄にピッタリだよね！

じゃあ、大会の結果はまたお手紙で！  
カード、ぜひ使ってね！

紅代より』

「…コウ…」

「俺はライフを半分払い…」

十代

LP500

「融合デッキからE・HERO…ジ・アースを召喚！！！」

上空から音を立てて地球の戦士が降り立った。

E・HEROジ・アース

融合・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/ATK2500/DFE2000

「E・HERO オーシャン」+「E・HERO フォレストマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のつ

いた

モンスター1体をリリースする事で、このカードの攻撃力は  
このターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの  
攻撃力分アップする。

E・HEROジ・アース

ATK2500

「見たことのないヒーローね…」

(これは…！)

明日香は見たことのないヒーローに驚きカイザーは目の前に現れた  
ヒーロー、それがどれほどに希少な物が知っているから驚く。

「そのヒーローは…随分前に販売中止になった幻の…」

「……こいつは、行方不明になったコウがパックで手に入れたのを  
俺が形見として持つてるんだ。でも…そろそろ返さないとな…。コ  
ウはもう見つかったし…」

「…」

「アニキ…」

「いくぜ！さらにマジックカード、ミラクル・フュージョン発動！」

ミラクル・フュージョン

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって

決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。  
(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「俺は墓地のエッジマンとバブルマンを融合！E・HEROアブソルートZero！」

E・HEROアブソルートZero  
融合・効果モンスター

星8 / 水属性 / 戦士族 / ATK2500 / DEF2000

「HERO」と名のついたモンスター + 水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO アブソルートZero」以外の

水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

E・HEROアブソルートZero  
ATK2500

「いくぜ！アブソルートを生贄にジ・アースの攻撃力を2500ポイントアップ！！」

E・HEROジ・アース  
ATK2500 ↓ 5000

「さらにアブソルートの効果で相手フィールドのモンスターを全て破壊！」

カイザーのサイバー・ツイン・ドラゴンが氷付けになった。

「何だと!?!」

「ジ・アース! 地球灼熱斬ツ!」

「な...! ぐわあああああ!」

カイザー

L P O

「亮、お前は...俺とコウの絆に負けたんだ!」

「...翔。」

「お兄さん...」

「俺は、お前にパワー・ボンドを渡したのは、お前ならこのカードを渡した理由に気づいてくれると思ったからだ。」

「パワー・ボンドを渡した理由...」

「そうだ。しかし、兄弟といえど俺とお前は違う人間。あの時は言葉でなければ伝わらなかったようだな...」

「...お兄さん! 僕はこのパワー・ボンドでお兄さんのようなデュエリストを目指すよ!」

「翔...!」

カイザーは顔を輝かせる。

「…フッ、お前も隠れていないで出て来い。」

カイザーが紅代の隠れている岸壁の陰に叫ぶ。

「……」

紅代が黙ったまま出て来た。

「コ、コウ…」

「…十代。俺は楽しいデュエルなんか認めない。」

紅代はそのまま歩いて行く。しかし途中振り向き、口元に笑みを浮かべ…

「でも、おめでと。」

「コウ…お前、やっぱり…あ！これ、受け取れ！」

十代は紅代に向かってヘアピンを投げた。紅代は受け取るとそれを大事そうに持って歩いていった。

「久々に見たぜ、コウの笑顔！」

十代は嬉しく思い、常に紅代が笑顔でいられるようにしようと硬く決意したのだ。

「けど、紅代への思いだけでカイザーとのあの状況をひっくり返す

なんて…」

「ブラコンっす…」

「十代らしくていいんじゃないか？」

「「お兄さん（亮）…（呆）」

「ん？」

カイザーの天然はいつまでも直りそうにないと思った明日香と翔であつた。

#### 第四話 絆のカード（後書き）

というわけであの状況を巻き返しさらにはチートドローを見せてくれたカイザー戦。

次回は紅代が万丈目と接触、そしてデュエルします。そこからさらに飛んで闇夜のキングゴブリンの話になります。

## 第五話 その瞳に写るは狂気（前書き）

今回の話ではありえないカードが出てきます。

現在のGXの時間輪では絶対出てくるはずのないあのカードです。

## 第五話 その瞳に写るは狂気

紅代は人気のない港で何者かと携帯で連絡を取り合っていた。

「はい…はい…。…わかりました。必ずあのカードを手に入れて見せます。…はい。…わかっています。それでは。」

紅代は電話を切るとふうと息を吐き出し倉庫の壁に体を預けた。

（絶対あいつらより先にあのカードを手に入れなくちゃ…。そうしないと大変なことになるんだ…）

紅代はそう考えると授業の時間になったが出る気にならなかったの  
でデッキを調整を始めた。

「おい…おい！」

「ん？んあ…？」

いつの間にか寝てしまったのだろう。

目を開けるとそこには黒髪のおベリスクブルー生徒がいた。

「その瞳に写るは狂気」

「……万丈目準……」

紅代は寝ぼけた声でそういうとふわぁと欠伸を一つし体を起こした。

「何だよ……」

「貴様、遊城十代の双子の弟という紅代か？」

「ああ。で、用件は何さ。」

万丈目はフンツと鼻で笑うと…

「貴様がマヌケ面で寝ているから起こしてやったのだ。」

と言った。

「そつ、でも本当は別の目的もあるんだろ？」

ニタリと笑う紅代を見て万丈目は「噂に聞いていたが本当に兄とは違うのだな」と言い持っていた荷物を置きデュエルディスクを構えた。

「俺を破った男、十代。あいつの弟であるお前とデュエルがしたい。」

「あいつの弟って言われんのは尺だ。もう2度と言うな。」

「よほど嫌っているのだな…。」

「で、俺に何のメリットがあるんだ？お前とデュエルして。」

万丈目は口元に笑みを浮かべると言った。

「メリットか…お前が十代以上の実力にどれほど近いのかを試せるんじゃないか？」

「…そうか。」

「デュエルだ。紅代。」

「ああ…言つとくが俺は負けない。」

「俺もだ。」

「「デュエル！」」

紅代

LP 4000

万丈目

LP 4000

「俺からいかせてもらっぞ！ドロー！俺は仮面竜を守備表示で召喚  
！」

仮面竜

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / ATK 1400 / DEF 1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を  
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

仮面竜

DEF 1100

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

万丈目

LP4000

手札4枚

モンスター/仮面竜(守)

魔法・罾/リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！…俺はG・HEROシールドリルを召喚。」

G・HEROシールドリル

チューナー・効果モンスター

星4/地属性/戦士族/ATK1000/DFE2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り他の「G」と名がつくモンスターは

ガーディアン

戦闘では破壊されない。

1ターンに1度、手札を1枚捨て相手フィールド上に存在する魔法、罾カードを1枚を破壊することができる。

G・HEROシールドリル

DFE2000

「俺はシールドリルの効果で手札を1枚捨てて相手のマジック、トラップカードを破壊する。」

「速攻魔法、ドラゴン・オブ・スピリッツ発動！」

万丈目が破壊されそうになったリバーズカードをオープンする。

ドラゴン・オブ・スピリッツ

## 速攻魔法

ライフを1000ポイント払い手札からレベル4以下のドラゴン族モンスターを守備表示で特殊召喚する。

「このカードはライフを500ポイント払いレベル4以下のドラゴン族モンスターを守備表示で特殊召喚する！  
来い、ギィブル！」

## 万丈目

LP3500

## ギィブル

効果モンスター

星4/風属性/ドラゴン族/ATK1300/DFE400

このカードが戦闘でモンスターを破壊して墓地へ送った時、  
自分フィールドに「ワイバーストークン」（ドラゴン族・風・星1・  
攻/守400）を1体守備表示で特殊召喚する。

## ギィブル

DFE400

「俺はカードを伏せてターン終了。」

## 紅代

LP4000

手札3枚

モンスター/G・HEROシールドリル（守）

魔法・罠/リバーズ×1

「ドロー！…フッ、来てくれたか俺の相棒！」

俺はフィールドのドラゴン族モンスター2体を生贄に、特殊召喚！  
舞い降りろ、光と闇の竜！！」

光と闇の竜

効果モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 2800 / DEF 2400

このカードは特殊召喚できない。

このカードの属性は「闇」としても扱う。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にする。

この効果でカードの発動を無効にする度に、

このカードの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

自分フィールド上のカードを全て破壊する。

選択したモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

光と闇の竜

ATK 2800

「お前は、他のオベリスクとは一味違うようだな。だけど、所詮俺の敵じゃない……！」

「それは俺とこいつの力を見てから言うんだな！いくぞ、光と闇の竜でシールドリルを撃破！

シャイニングブレス……！」

「残念だったな万丈目！このカードが場にある限り、俺のガーディアンと名のつくモンスターは戦闘では破壊されない。このカード自身もガーディアンだ。つまり光と闇の竜の攻撃は無駄だよ。」

「言っただろう。そういうのは俺とこいつの力を見てからいうんだなと！」

俺は光と闇の竜の効果発動！このカードの攻守を500ポイント下げモンスター効果を無効にする！」

「何！？」

光と闇の竜

|     |      |   |      |
|-----|------|---|------|
| ATK | 2800 | ↓ | 2300 |
| DEF | 2400 | ↓ | 1900 |

光と闇の竜が光り輝く。

「これで戦闘破壊無効効果は消えた！」

「トラップ発動！ガード・シグナル！」

ガード・シグナル

通常罠

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「G・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「このカードは自分フィールド上のモンスターが破壊されたとき、デッキのガーディアンを呼び出す！」

「なるほど、ガーディアン版ヒーロー・シグナルか。しかしその効果も無効にさせてもらっ！」

光と闇の竜

ATK 2300 ↓ 1800

DFE 1500 ↓ 1000

「チツ…」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。」

万丈目

LP 3500

手札 2枚

モンスター / 光と闇の竜 (攻)

魔法・罫 / リバース × 1

「俺のターン、ドロー！」

(マズイな…俺のガーディアンは守備力がデカイ分攻撃力が低い…。消去者はあるが相手のモンスターはモンスター効果をも無効にしてしまう。しかしこのカードなら…)

俺は手札からG・HEROロックナイトを召喚！」

G・HEROロックナイト

星3 / 地属性 / 戦士族 / ATK 800 / DFE 2000

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在している場合、相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

このカードの効果は無効にできない。

G・HEROロックナイト

DFE 2000

「このカードは俺のデッキで唯一効果を無効化されないカード。  
そしてその効果は相手のモンスターの攻撃力を500ポイントダウンさせる効果だ！」

「何！？」

光と闇の竜に鎖が巻きつき錠がかけられる。

光と闇の竜

ATK1800↓1300

「俺はさらにカードを1枚伏せてターンエンド。」

紅代

LP4000

手札2枚

モンスター/G・HEROロックナイト(守)

魔法・罠/リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！光と闇の竜で無効化できないモンスターを盾にしてきたか…だが、そんなのは無力！」

「何！？」

「確かに今の俺の手札には光と闇の竜の攻守を上げるカードはない。  
だが、いくぞ！俺は光と闇の竜対象に速攻魔法、聖水の弊害発動！」

聖水の弊害

速攻魔法

フィールド上のモンスター1体の攻撃力、守備力を元々の数値に戻

す。

「光と闇の竜の攻守を元の数値に！」

光と闇の竜

ATK 1300 ↓ 2800 ↓ 2300

DEF 1000 ↓ 2400

「しかしその光と闇の竜は攻撃力を元に戻しても500ポイントダウンする！」

「しかし貴様のモンスターを破壊するには十分だ。さらに俺はギールを手札から召喚！」

ギール

ATK 1300

「さらにドラゴンズ・ユニットをギールに装備！」

ドラゴンズ・ユニット

装備魔法

装備モンスターの攻撃力・守備力は、フィールドに表側表示で存在するドラゴン族モンスターの数×400ポイントアップする。

ギール

ATK 1300 ↓ 2100 ↓ 1600

「いけ！光と闇の竜！ダークバプティズム！」

「くっ！」

ギープル

ATK1600↓2100

「ギープルでダイレクトアタック！」

「ぐわああ!!」

紅代

LP1900

「くっ…」

（こいつ、本当にオベリスクブルーか！？俺が戦った中で上位ランクに入りそうな強さだぞ！？）

カード効果を見捨ててガンガン攻撃する十代も悪いがそれを無しにしてもお前、強いな…」

「フツ、それはどうも。俺は手札からマジックカード、強欲な壺を発動！」

カードを2枚ドロー！」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

万丈目

LP3500

手札1枚

モンスター／光と闇の竜（攻）ギール（攻）  
魔法・罾／リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！」

（このカードなら…！いや、でも…）「

「効果を無効にする光と闇の竜の前では手も足も出ないか？」

「……」

「無言は肯定か…」

「フツ、アハアハハハッ！アハハハッ！アハハハハハハッ！」

「何がおかしい…」

いきなり笑い出した紅代に万丈目は聞く。

「そつだ、俺は勝利のためなら何だってするさ！

たとえば使つてはいけないと言われているカードでも！使つてやる！」

（こいつの瞳…今浮かんでいるのは悲しみと狂気と怒り、苦しみだけか。）

「俺はウィンドピエロを召喚！」

G・HEROウィンドピエロ

効果モンスター

星3／風属性／戦士族／ATK500／DFE2000

このカードは1ターンに1度相手の攻撃を無効にできる。

G・HEROウィンドピエロ

ATK500

「さらに手札から超融合発動！」

超融合

速攻魔法

手札を1枚捨てる。

自分または相手フィールド上から融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、

その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「このカードは手札を1枚捨てて発動する！なおこのカードの効果は無効にできない！俺は万丈目のフィールド上の光と闇の竜、ウィンドピエロを融合！」

「相手の場のモンスターをも融合するカードだと！？」

そんなデタラメなカード、俺は聞いたことない！」

「来い、<sup>アタック</sup>A・HEROシャイニングアロー！！」

A・HEROシャイニングアロー

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / ATK2500 / DEF2000

「G・HERO」+光属性モンスター

このカードは「超融合」の融合召喚でしか特殊召喚できない。

1ターンに1度相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。

相手プレイヤーは破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを受ける。

ギブブル

ATK 2100 ↓ 1600

「いくぞ…このカードは1ターンに1度相手モンスターを破壊。そしてその攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「何だと！？ぐわあ！」

万丈目

LP 2400

「さらにシャイニングアローでダイレクトアタック！シャワー・アロー！！！」

無数の光の矢が万丈目に降り注いだ。

「ぐわああああ！！！」

万丈目

LP 0

デュエルが終わると紅代はペタリと操り人形の糸が切れたように地面に座り込んだ。

（あ、れ…？今俺は、何をしてた…？）

「おい、しっかりしろ…！」

「あ…」

「どうした、人形のような顔をして。」

「（人形…）そうか。万丈目……いいや、何でもない。」

紅代は握手のために差し出そうとした手を見つめズボンのポケットに突っ込む。

「紅代。俺は光と闇の竜とともに絶対にこのデュエルアカデミアに戻ってくる！だから、そのときはまた俺とデュエルしろ！」

「いいぜ、俺はただ勝利し続けるだけだ。」

「嫌いではないな、そういう性格は…。」

万丈目は船に乗り込むと振り向きもせず去っていった。

（しかし、あいつから精霊の気配がしたが、デュエルが終わるころには無くなっていた…。どういうことだ？）

精霊が見える万丈目の疑問はセブンスターズ編まで明かされることはない…

万丈目と紅代のデュエルから数日後。

あれから…

「で、で、出たあああ！！サイコショッカー！！」

サイコショッカーの精霊が出たり…

「明日香君のフィアンセの座をかけて勝負だ！」

十代が熱血馬鹿とデュエルしたりなどしたがほとんど無視。

「コウ！」

「コオウ！」

「コオーウ！」

十代が話しかけてもことごとく無視。

紅代の態度はとにかく他の人間とかかわらないようにデュエルを挑まれたとき、授業以外は外に出ないようになると言うまで悪化してしまった。

「どうするのよ十代？」

明日香が話しかける。

「うーん、何がいけなかったんだあ！」

「心を開いてもらつてと言つてもあまり強引過ぎると逆に心を閉ざしてしまつらしいな。今回のがいい例だ。」

カイザーの言葉に十代は反論する。

「亮、お前はそう言うけどよぉ！強引にいかなきや紅代はいつまでもあんな風なんだぜ！？あれじゃ、またいつイジメられるか…」

「イジメ？もしかして十代、紅代はイジメを受けていたのか？」

三沢の言葉に十代はうなずく。

「ああ。小学校2年生ごろかな？紅代がイジメられるようになったの…」

「つまり今から8年前っすね。」

「最初は紅代の頭のよさを妬むやつらの嫌がらせ程度だったんだけどどんどんエスカレーターしつてっさ…」

「十代、それを言うならエスカレートよ…」

明日香が十代の間違いを訂正する。

「紅代の大切なものを目の前で壊したり本を池に落したりするようになったんだ。」

学校はまだ小さいやつらだったからそんなに叱らずにいたんだ。やつらはそれをいいことに先生に呼び出されても曖昧にもうやりませんだとか言つてそれでそこまでエスカレートしてつた。

俺が守るのも限界があつてそれで教えたのがデュエルだった。」

「『それだ!』」

明日香、三沢、翔が叫ぶ。

「きっとそれでデュエルで勝ち続けると言う方程式が彼の中で出来上がってしまったんだ!」

「じゃあ何でアニキを拒絶するのさ。だってアニキは紅代君を助けたんだろ? 拒絶する意味がないじゃないか。」

「それは自分と十代の意見があってないからじゃないのかしら。」

「そ、そう言うものなのかあ?」

「いや、実際はもっと違うものじゃないか?」

カイザーの言葉に全員が振り向く。

「十代、紅代と接触するとき彼が何か同じ素振りをしたりしているのを見ているんじゃないか?」

「共通点? んん〜! …… あ! 紅代っていつも俺と話すとき征服の胸元をギョってつかむぜ!」

「『いや、そうじゃないだろ(でしょ)』」

十代の言葉にいつせいにツッコミを入れる明日香、三沢、翔。

「何をやっている?」

突如聞こえた声に全員が顔を見合わせて振り向くとそこには噂の本人、紅代が現れた。

「…」

「あ、あはは！い、いやこれはそのお…」

さすがに本人の前で本当のことを言うのも不味いのでシドロモドロになりながら十代が何とか答えようとする。  
そこにカイザーが助け舟を出した。

「先日の月一試験の結果を報告しあっていたんだ。」

「ふうん？」

紅代は明らかに信じていない様子だがそれ以上深入りする気はなかったらしく「それならいい」と言って教室を出て行こうとする。しかし出る直前に顔を十代達のほうに向けて言い放った。

「そうそう。最近カード狩りが頻繁らしいから気をつけろよ。」

いつもと同じ不敵な偽りの笑みを浮かべて…

「こ、コウ？」

「じゃあな。」

「相変わらず何考えてるんだかわからないっす！」

「何か隠してるってことだけは明白だけど…」

三沢はノートに方式を書き始めた。

十代でもわかる文字の方式だ。

「つまりはこういうことだな。紅代は十代を拒絶している。

理由はデュエルを楽しむ人間だからの他に何かあると思われる。

紅代は過去にイジメを受けた人間。」

「ここまで来るとイジメが原因の何かがあったとしか考えられないわ。」

「でも、何か引つかかる。」

カイザーの言葉に「頭がこんがらがったー！」と喚く十代。

「くっそー！どうすりゃいいんだ!？」

十代は再び喚き始める。

「落ち着きなさい十代!」

明日香が十代を押さえつけた。

「ドロップアウトボーイ、ちょうどよかったのーネ。」

「クロノス先生。」

クロノスが話しかけてきた。

「実は最近我がオベリスクブルーの生徒のカードがアンティルールで奪われると言う事件が発達しているのーネ！」

「え？そうなのか？」

「アニキ知らないの？」

何でも黒いマントを羽織ったフードの男がアンティルールでアカデミアの生徒のレアカードを奪ってるんだって。

しかもカードを奪われた後は大柄な男たちが出てきて暴力でボコボコにされた後、もっとレアカードを奪われちゃうらしいです。」

「実際、シヨニョールカイザーも被害にあってるのーネ。」

「ええ！？」

「お兄さんも！？」

「ああ。俺の場合はデッキごと奪われかけた。」

翔の顔がサアツと青ざめる。

「よかったっすお兄さんがボコボコにされなくて！」

「相手はデッキ破壊を使う。」

しかも完璧なロックをかけてきて手元に必要なカードが来る時間すら与えない。

俺も負けてしまった…」

「亮が負けた！？」

「ああ。強かった。」

「……」

「しかし、私が言ってるのはそのカードハンターのことではないのーネ！」

「「「え？」」」

「実はそのカードハンターとは別にもう一人カードハンターがいるのーネ。そのカードハンターを捕まえてほしいのーネ！」

クロノスの言葉に十代は立ち上がって面白そう！と言う。

「いくぜ翔！ついでにそのフードのカードハンターも捕まえてやる！」

「あ、待つてよアニキー！」

「十代、危険だ！」

三沢の言葉に十代は大丈夫大丈夫！と言うとさっさと行ってしまった。

それから……

十代達はレアカード狩りの犯人を見つけ寮へと戻っていた。

「しかし小原達が犯人だったとはな。」

三沢の言葉に十代は明日のレポートと嘆いている。

「あれでよかったんだけど、でもレポートがあ！」

「頑張れ十代。」

「亮が見捨てたあああ!!」

カイザーの応援の言葉にさらに嘆く十代。

そこに割って入るように歌が聞こえてきた。

「英語の歌のようだな…」

三沢がその歌を翻訳する。

「月は嘘を語らず人は嘘を語る。

それは何と言う情景だろうか。

嘘吐き人間、嘘でこの世は溢れ返っている。

怖がりな人間は集団で集まりその群れの中から取り残されたものは孤独を歩む。

嘘に流され騙され続け利用され、いずれなるのは操り人形。」

「悲しい歌ね…」

「っ！あの男は！？」

カイザーが声を荒げる。

森の中にいたのはあのフードの少年だった。

「…また会ったねカイザー。」

「感謝するぞ。この間は逃がしてくれて。あの後、ひどい目には遭わなかったか？」

「…」

少年は黙りながら木へと飛び上がった。

「…「んな！？」」」

「カイザー。僕はカードハンターだ。そんな僕に頭を下げないで。格が落ちるよ。」

「待ちやがれ！」

十代は木を見上げるがフードの少年の顔は赤い仮面に覆われて見えなかった。

「デュエルしやがれカードハンター！」

「遊城十代。君とはできればやりたくないんだ。それに、今は月を見てただけだしね。じゃあね。」

少年は闇へと消えていく。

「あ！くっそ、逃がしたあ！」

十代は嘆きだす。

「しかし、俺の記憶ではあの声はどこかで聞いたことがあるんだが……」

「え？誰さ？」

「ああ。結構最近に……ってあれ？明日香君は……」

三沢が言つと全員が明日香を探し出した。

そのころの明日香は……

「まったくどこ行っちゃったのかしら！」

迷子になっていた……。

## 第五話 その瞳に写るは狂気（後書き）

と、いうわけで新たな謎の超融合が出てきましたー！

次回は遊戯デッキの話です。その後、様々なことをぶっ飛ばしてゼブスターズ編です。

早いなおい！

紅代は原作には関わってきませんから。

## 第六話 分かれた道（前書き）

今回はデュエルないです。

## 第六話 分かれた道

紅代は購買で大勢の生徒が遊戯デッキ展示会の整理券を求めている光景から目を逸らし携帯の画面に目を移した。

く分かれた道く

「…今夜12時決行か…」

紅代は目を細めそう言った。

「コオウ！」

十代が紅代の背中に抱きつく。

「十代、またお前か…」

紅代は外に出るんじゃないかと後悔する。

「おう！また俺だぜ！」

「毎回思っていたんだがスキンシップが激しすぎるぞお前。」

「え？いいじゃん。」

そう言う十代に思いっきり溜息をつく紅代。

「それにしても今夜決行ってどういう意味？」

（ギクッ！）

紅代は「何でもない！！」と大声を上げて十代を振り切って走り去っていった。

「変なの。折角コウに俺がデュエルでゲットした整理券やろっと思っただのに…」

十代は2枚の整理券のうち1枚を見て心底がっかりする。

「まあ頑張れよ十代。」

「あれ？三沢いつからいたんだ？」

「最初からだ！！」

哀れ三沢（笑）

そして…

夜、遊戯デッキが神楽坂という生徒により奪われた。

それを十代が取り返し遊戯デッキは無事に戻った。

…はずだった。

夜の12時、あのフードの少年が現れ…

スッ

鍵を壊してショーケースの扉を開け遊戯デッキをどこかへと持ち去っていつてしまった。

そして展示室に一人のレッドの制服を着た人物が現れた…

「くっ、遅かったか…!!」

その人物は急いでもと来た道に戻って行った。

翌日

「ええええ！？遊戯デッキが盗まれたあああ！?!?!」

盛大に十代は遊戯デッキ盗難に驚いていた。

「ああ。今朝な。」

三沢の言葉に紅代は顔を俯かせる。

「どうしたんだよコウ？」

「…別に…」

「…ハッハアン？お前、遊戯デッキが見たかったんだろ？」

十代の言葉に息詰まる紅代。

「ま、まあ…んなところだ…」

「やっぱりか〜！」

ニマニマ笑っている十代から顔を背けスタスタと寮へ歩いていく紅代。

その背中を見て十代は少しだけ寂しくなった。

「昔はあんなに頼ってくれたのにな…」

その後、十代達は鮫島校長に呼び出された。

その中には紅代もいた。

「実は、彼方方に鍵を守っていただきたいのです。」

話とはセブンスターズというデュエリスト達が三幻魔というカードを狙っていること、そのために七星門という門を開く鍵を守ってほしいと言ったものだった。

次々と全員が鍵を取っていく中、紅代もその鍵を手についた。

そして一足早く寮に戻ると電話をかけた。

「紅の道化師です…。はい…」

電話の主は男の声だった。

『超融合を使っただってね。』

「っ…！申し訳、ありません…」

『大勢が見ている場所じゃなかったからよかったものの…。今度使ったら…』

「っ…！すみません！ゴメンなさい！もうしません…！だから…」

紅代は悲鳴に近い声を上げた。

電話の主はそんな紅代にまるで人形に話しかけるように優しく声をかけた。

『いい子だ。次からは気をつけるんだよ。』

「はい…」

『では次の指令を言い与える。』

紅代の瞳が内容を聞くと絶望に染まった。

『君は僕の自慢の可愛い息子だ。できるよね？』

「……………はい。」

『じゃあ、頼んだよ。』

「了解しました。」

紅代は机に向かって何かを書き始めるとそれを封筒に入れてデッキとともに机の上においた。

「十兄…さようなら…」

封筒の中の紙は涙で少し濡れた。

そして紅代は小さなリュックを持ち出すと何処かへと行ってしまった。

次の日…

「コウが…行方不明？」

十代は昨日の夜、セブンスターズの刺客である天上院吹雪とデュエルをした。

そして闇のデュエルでダメージを負い眠っていたが翔や明日香達の声で目が覚めたのだ。

「じゅ、十代…」

「ど、どういうことだよコウが行方不明って!？」

「…昨日、貴様が眠っている間に紅代は手紙とデッキを残して消え

てしまったんだ。」

「う、そ…」

十代は床に膝をついた。

「これがその手紙だ。」

万丈目が渡した手紙を十代は声に出して読み始めた。

「拝啓、遊城十代様。

俺はとても無力です。今まで助けてくれた彼方に恩返しの一つもできなから。

それどころか彼方を悲しませるだけ…

ごめんなさい。ごめんなさい。謝って許してもらえないけどこれだけは言わせてください。

俺のことなんか忘れて幸せな人生を歩んでください。もし、俺が彼方と敵対することになったとしても、

その時は俺を、最低な俺を俺じゃない他人として見て……殺してください？」

「十代…」

「紅代のやつはいったい何を考えているのだ!？」

「そうよ。兄に自分を他人として見て殺せなんて…」

「僕だったらできるわけないっす! 弟を殺すなんて!」

全員が口々に言う。

「コウ、どうしちまったんだよ…」

そんなころ…

「この少年がダークネスに変わるセブンスターズだと？」

フードの少年が火山口の近くでセブンスターズの面々と会っていた。

「ええ。僕がセブンスターズの新たなメンバーですよ。」

「でも禁止カード入りのデッキ破壊デッキを使うんでしょ？」

「でも、相手を翻弄するには十分でしょ？」

「威勢のいいボウヤね…嫌いじゃないわよ。」

「それはどうも。」

フードの少年は赤い仮面の下で笑っていた。

「人形とかいずれは壊れてしまっんだ。直したと思っていても実際は壊れている。」

花瓶なんてそうじゃないか。ボンドとかでくっつけても結局は見た目だけ。直ったとは言えない。

僕は人形、哀れな悪人達のための人形さ…。

十代、皆はどうするかな？この僕を完全に直せるかな？

この直せるかどうかすらわからないほどに壊れた僕という名の人形を。」

少年が放った言葉は狂気が混じっていた。

## 第六話 分かれた道（後書き）

次回は…どうしよう。紅代がないからどうしても話が原作どおり進んでいく…

で、考えた結果がカイザーとフード少年のデュエルですね。

ちなみに時間は黒蠍盗掘団の話の翌日ですね。

フード少年の正体が明らかになります。

第七話 少年の正体 創世の蒼登場（前書き）

今回は新キャラが出てきます。

## 第七話 少年の正体 創世の蒼登場

「さて、そろそろ行くか。」

フードの少年はデッキとデュエルディスクを持ってアカデミアに向かって行った。

「カイザーはこの闇のデュエルをどう思っかなあ……」

ニタリと笑って少年は仮面をかぶった。

十代は心の傷がまだ癒えてなかった。

「コウ……」

「十代。」

「アニキ。」

『クリクリ〜』

ついに万丈目が痺れを切らして十代の胸倉を掴み上げた。

「いつまでウジウジしているんだ十代！！いい加減にしろ！」

「万丈目君やめて！」

「十代、貴様は紅代の兄だろうが！！だったら何故、紅代を助けないと思わない！」

ウジウジしていないで行動すればいいだろう！？紅代の過去に何が起きたのか調べてみる！！

紅代はそれを望んでいないかもしれない。

しかしそれを調べて紅代を救ってやることがお前が今、兄としてできることじゃないのか！？」

十代はそれを聞くとすぐさま保健室を出て行った。

「十代！」

（そうだ、俺がコウを助けるんだ！コウは苦しんでいるんだから！）

カイザー、翔、万丈目を筆頭に全員が十代を追いかける。

カイザーは森の中を探していた。

そこで1枚の白紙のカードを見つけた。

「これは…」

カイザーがカードを手にとると風が巻き起こりあのフードの少年が現れた。

「お前は…！」

「カイザー、やろつよ。鍵をかけてのデュエルをさ。」

「なるほど、次の刺客はお前か…」

「うん！でも僕の闇のデュエルはちょおつと風変わりなんだ。  
負けた人は永遠の闇に飲み込まれるんじゃないって、負けた人は一番  
大事なものの記憶を全て失う。  
引き分けは無効だけどね…」

「何！？」

カイザーは驚いた。

「一番大事なものの記憶…」

「そう。さあ、やろうよ。闇のデュエルを。」

（失わないためには引き分けか勝利すること…）

「デュエル！」

フードの少年

LP4000

カイザー

LP4000

「先攻はもらいますよ。ドロー！僕はゾンビキャリアを攻撃表示で  
召喚！」

ゾンビキャリア

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星2/闇属性/アンデット族/ATK400/DEF200

手札を1枚デッキの一番上に戻して発動する。

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたこのカードは、

フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

ゾンビキャリア

ATK400

「ゾンビキャリア？」

「はい。さらにカードを1枚伏せてターンエンド。」

フードの少年

LP4000

手札4枚

モンスター/ゾンビキャリア（攻）

魔法・罠/リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！俺はパワー・ボンド発動！

サイバー・ドラゴン2体を融合しサイバー・ツイン・ドラゴンを融

合召喚！！」

パワー・ボンド

通常魔法

手札またはフィールド上から、

融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、

機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

このカードによって特殊召喚したモンスターは、

元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。

発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは

特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。  
(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

サイバー・ツイン・ドラゴン

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 機械族 / ATK2800 / DEF2100

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

サイバー・ツイン・ドラゴン

ATK2800 ↓ 5600

「亮！鍵が光ったんだけどいったい何が…あいつは!？」

明日香を初めとする鍵守が集まり驚く。

「ああ！あのとときのカードハンター!？」

「ああ、ギャラリーが増えたね。」

「そのようだな、サイバー・ツイン・ドラゴンで攻撃！エヴォリユ  
ーション・ツイン・バーストオオオオ!!」

少年はカイザーが攻撃宣言するのを聞いてニタリと仮面の下で笑った。

「トラップ発動！死のデッキ破壊ウイルス!」

死のデッキ破壊ウイルス

## 通常罠

自分フィールド上に存在する攻撃力1000以下の  
闇属性モンスター1体をリリースして発動する。

相手のフィールド上に存在するモンスター、相手の手札、  
相手のターンで数えて3ターンの間に相手がドロートしたカードを全  
て確認し、

攻撃力1500以上のモンスターを破壊する。

「来たな、デッキ破壊…」

「俺はゾンビキャリアを生贄に相手の攻撃力1500以上のモンス  
ターを破壊する！」

「だがさせはしない！速攻魔法、サイバー・ゼロ発動！」

サイバー・ゼロ

速攻魔法

フィールド上の「サイバー」と名のつくモンスターをリリースし  
相手の魔法・罠・モンスター効果の発動を無効にし破壊する。  
次の自分のターン、リリースしたモンスターを攻撃力を半分に  
して自分フィールド上に特殊召喚する。

「俺はサイバー・ツイン・ドラゴンを生贄に死のデッキ破壊ウィル  
スの効果を無効にする！」

「チッ…」

「けどこれでカイザーも攻撃するモンスターがいなくなつたな…」

「俺はサイバー・ジラフを召喚！」

サイバー・ジラフ  
効果モンスター

星3 / 光属性 / 機械族 / ATK 3000 / DEF 800

このカードを生け贄に捧げる。

このターンのエンドフェイズまで、

このカードのコントローラーへの効果によるダメージは0になる。

サイバー・ジラフ  
ATK 300

「サイバー・ジラフを生贄にこのターンの効果ダメージを0にする。  
カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

カイザー  
LP 4000  
手札0枚  
モンスター / 0  
魔法・罫 / リバース × 1

「僕のターン、ドロー！僕は墓地のゾンビキャリアのモンスター効果発動！

手札1枚をデッキの1番上に戻しこのカードを墓地から特殊召喚する！」

ゾンビキャリア  
ATK 400

「さらに僕はダーク・ブレインを召喚！」

ダーク・ブレイン

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / ATK500 / DEF1000

このカードがシンクロ召喚の素材にされ墓地に送られたとき

相手のデッキの1番上からカードを5枚墓地に送る。

ダーク・ブレイン

ATK500

「いくぞ、レベル3のダーク・ブレインにレベル2のチューナー、ゾンビキャリアをチューニング!!」

闇より出でし人形よ、我の手足となり世界に悪夢を与えよ!! シンクロ召喚! ダーク・ナイトメア・マリオネット!!」

少年の場に不気味な分陰気を持った操り人形が現れた。

ダーク・ナイトメア・マリオネット

シンクロ・効果モンスター

星5 / 闇属性 / アンデット族 / ATK2300 / DEF2000

1ターンに1度相手フィールド上のモンスター1体を選択し発動する。

選択したモンスターのレベルだけ相手のデッキの1番上のカードを墓地に送る。

ダーク・ナイトメア・マリオネット

ATK2300

「シンクロ召喚!?!?!」

「嘘だろう!? シンクロ召喚なんて...」

十代が遅れて合流しシンクロ召喚を目撃し驚いた。

「コウだけの召喚方法だったはずなのに……」

「ダーク・ナイトメア・マリオネット！ナイトメア・ダンシング！」

ダーク・ナイトメア・マリオネットがカクカクとした踊りでカイザーに向かっていく。

「トラップ発動、攻撃の無力化！」

攻撃の無力化

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「ナイトメア・マリオネットの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了する！」

「くっ…カードを1枚伏せてターンエンド！」

フードの少年

LP4000

手札2枚

モンスター/ダーク・ナイトメア・マリオネット（攻）

魔法・罠/リバーズ×1

「いくぞ、ドロー！このターン、生贄となったサイバー・ツイン・ドラゴンは攻撃力が半分になりフィールドに戻ってくる！」

サイバー・ツイン・ドラゴン  
ATK2800

「さらに強欲な壺を発動！」

強欲な壺  
通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「デッキからカードを2枚ドロー！そしてサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ  
効果モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / ATK1500 / DEF1000

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、

ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。

1ターンに1度、手札の魔法カード1枚を相手に見せる事で、

このカードのカード名はエンドフェイズ時まで

「サイバー・ドラゴン」として扱う。

また、このカードが墓地に存在する場合、

このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ  
ATK1500

「いくぞ、サイバー・ツイン・ドラゴンでナイトメア・マリオネットを攻撃！」

「ぐわっ！」

フードの少年  
LP3500

「さらにサイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃！エヴォリューション・ツイン・バーストオー！」

「ぐわあああー！」

フードの少年  
LP1200

「くっ…！」

フードの少年は肩膝を突く。風圧でフードが取れる。さらに2度目の攻撃で仮面にひびが入り割れた…。

「え…？」

「そ、そんな…！」

「嘘だ…」

仮面の下から現れた顔は…

「コウ…なのか？」

十代にそっくりの顔をした行方不明の紅代だったのだから…。

「紅代…」

「攻撃しないのか？カイザーさんよお…」

「くっ…しかし…！」

「攻撃できないか…仕方ないもんなあ。」

紅代は凍てつく瞳でカイザーを睨んだ。

「でもな、手抜きされるの俺嫌なんだよ…」

「…サイバー・ドラゴン・ツヴァイで攻め止める亮…！」十代！  
？」

十代が攻撃宣言しようとしたカイザーの腕を押さえつけた。

「ダメだ亮…！闇のデュエルの敗者の末路はお前だって知ってるだろ…！」

「っ…！」

カイザーはその言葉を聞くと苦い顔をし手を下ろす。

「無理だ…俺にはできない！」

「……」

紅代はそれを聞くとカイザーを睨みつける。

「何で攻撃できないの？」

「仲間だからだよ!!」

「仲間、ねえ…。だから？俺はお前らのこと仲間だと思ったことなんてないぜ？」

「嘘だな。」

「何だと？」

紅代はカイザーの言葉を聞くとさらに彼を睨みつける。

「仮にお前が本当に俺達のことを仲間だと思っていなくても俺達は思っているぞ？」

「勝手な妄想押し付けんじゃねえよ……」

「なら、あの手紙は「言うな!!!」紅代…。」

「…それに今の俺は紅代じゃない、紅の道化師だ。」

「紅の…道化師？」

紅代…紅の道化師はけらけらと笑う。

「カイザーが攻撃しないのなら仕方がない。俺はサレンダーするぜ」  
「？」

「ま、待てよコウー!!」

紅の道化師はデッキの上に手を置こうとする。

「待て。」

しかし後ろから現れた蒼の瞳をした黒髪の青年がその手を止めた。

「ッ！創世の蒼…!?!」

「紅の道化師。貴様に負けてもらうのはデスペルの上が許さないぞ」  
「？」

「くっ…」

「このデュエルは無効だ。創世の蒼の名においてそれを宣言する。」

創世の蒼と呼ばれた青年がそう言うとモンスターが消え、デュエルディスクのカードがデッキに戻っていた。

「戻るぞ。」

「……わかった。」

「ま、待てよコウー！何で、何でだよ…！何でお前がセブンスターなんだよ…コウー…!?!」

「…………ッ！」

紅代は創世の蒼に抱えられ森の奥へと消えていった。

「コウ、そんなッ…嘘だろ？コウ…うわあああああああああ  
……………」

敵になってしまった紅代。

何故、敵になってしまったのかを十代達を知るのはもう少し後になる…

## 第七話 少年の正体 創世の蒼登場（後書き）

今回、新たな敵・創世の蒼を出しました。

今回は新たなキャラクター（作者さん）を出します。

そして紅代は過去に何があったのか、それはセブンスターズ編の終盤に明かされる予定です。

## 第八話 破滅の光（前書き）

と、いうわけで作者さんがキャラクターとして登場しました。

こんな感じでよかったのかいささか不安ですが…

## 第八話 破滅の光

「コ、コウ…」

「…」

「行っちゃだめだコウ！」

十代は必死に見えない壁にさえぎられながらも壁の向こうにいる深い闇へと向かおうとする紅代に手を伸ばす。

「コウ…行くな…!!」

紅代が十代のほうへ振り返る。

その瞬間、紅代に闇が覆いかぶさり…

「行くな、待ってくれよ！行っちゃダメだ！コオオオオオオオ！！」

「ッハア！ゼエハアゼエハア…」

十代は布団から飛び起きる。

「ゆ、夢…？」

十代にとって大切な半身である紅代が離れていくのは辛かった。  
紅代が離れていく夢は十代にとってはかなりの悪夢だっただろう。

「コウ、どうしてセブンスターズなんかにな…!!」

十代はタオルケットを掴んで涙を流した。

頭の中に数日前の手紙の内容と紅代の言葉が蘇る。

『もし、俺が彼方と敵対することになったとしても、  
その時は俺を、最低な俺を俺じゃない他人として見て殺してください。』

『俺はお前らのこと仲間だと思ったことなんてないぜ?』

『紅代じゃない、紅の道化師だ。』

「コウ…お前に何があつたんだよ…!!」

俺じゃお前を救えないのか!?俺じゃ頼りないのかよ、コウ!」

く破滅の光く

その日、十代は万丈目達などの鍵守とともに校長室に呼ばれた。

「今日、皆さんを呼んだのは他でもありません。紅代君のことです。」

「つ~~~~~!!」

「十代君。我々はある限り彼のことについて調べてみました。すると、とんでもないことがわかったのです。」

「とんでもないこと?」

十代は光のない虚ろな瞳で鮫島校長を見やる。

「はい……。彼が、紅代君が先日、遊戯デッキを盗んだ犯人だったのです。」

「え…!?!」

「詳しく、さらに詳しく調べると犯人の手がかりが紅代君のものと同じだったのです。」

「そんな…コウが、コウが遊戯デッキを盗んだ犯人…?」

ハ、ハハッ、う、嘘だよな?冗談も大概にしてくれよ校長先生…」

「…」

鮫島校長が目を伏せた。

「なあ、誰か、誰か嘘だつて言ってくれよ!

紅代がそんなことするなんて…嘘だ、嘘だあああああ!!!!」

「！」

「けど、現実はそのよ十代。紅代は遊戯デッキを盗んだ。」

「でも紅代はそんなことをする人間じゃない！！絶対にそんなことはしないんだ！！！」

「よく言っ たな十代！」

後ろから声がし振り向くとカイザーと同じくらいの年の青年が現れた。

「おお、来てくれましたか。」

「ああ。コウが大変なことになってるんだからな。」

補佐役として、あいつのカードをデザインした人間としては黙ってられないぜ。」

「あ、アンタは誰だ？」

万丈目が聞く。

「俺？俺はソニック。I2社勤務でコウの補佐役兼G・HERO、A・HEROをデザインした人間だ。」

「補佐役？デザインした？」

「そうさ。元々はG・HERO、A・HEROと言う対になる2つのカテゴリー。」

これをデザインしたのは別の人なんだけどその人が死んだせいで

俺にデザインの役職が回ってきたんだ。補佐役って言うのはコウが出た大会で

泊り込みの子供参加者の世話をする人間のことだったんだけど俺はコウの担当だったんだ。」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！コウは大会に出たことは一度もないんだぜ！？」

十代はそう言った。

「いいや、出てたんだよ。偽名と変装をしてさ。」

「そう、なのか…？」

「ああ。偽名は『加藤<sup>かとう</sup>札木<sup>さつき</sup>』だ。」

「加藤札木だと！？」

三沢の声に全員が振り向く。

「知ってるのか三沢？」

「ああ。ワールドジュニアデュエルカップ。

略してWJDCで見事優勝を果たしたドロース系エクゾディアデッキの使い手だ。」

「ドロース系エクゾディアデッキ…」

「ほとんどの試合を1キルで済ました凄腕デュエリストなんだが…まさか紅代が…」

「そうそう。あいつのデュエルはほとんど1キルだったんだぜ？  
毎回攻撃せずに勝つんだよ。まあ攻撃しなきゃいけない試合もあったけど…」

笑いながらそう言うソニックは思い出に浸っていた。

「あれはたしか6年位前だったかな？

あいつは第1試合からすっげえ1キルデュエルを見せてくれたぜ？」

『さあ、ついに始まったI2社とKC主催のワールドジュニアデュエルカップ！略してWJDC！様々な

次世代デュエリスト達の激闘が今始まる！！』

「ついに始まりましたねフェニックスさん。」

「ああ。この企画をちゃんとしたものにできたのもソニック君のお陰だよ。」

「いいえ、それほどでもありません！」

モニターを見ながらソニックとフェニックスはそう話す。

『まず第一試合は加藤<sup>かとう</sup>札木<sup>さつき</sup>VS有<sup>あり</sup>佐<sup>さが</sup>川<sup>かわ</sup>鈴<sup>れい</sup>のデュエルだ！』

「ボクの猛攻を彼方は止められるかしら？」

「止めて見せるよ。いいや、そんなのさせないから。」

「結構な自身だねえ。」

『デュエルスタート！！！！』

「「デュエル！！」」

札木

LP4000

鈴

LP4000

「俺のターン、ドロー。……俺はマジックカード、手札抹殺を発動。手札をすべて捨てて捨てた分だけドローする。」

手札抹殺

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする

「手札交換かな？あらあらいいカードが手札に来たわ！」

「ああそうですか。俺はさらにマジックカード、強欲な壺発動。」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドロースる。

「ああ、勝ったな。」

「な！？何を根拠にそんなことを…」

「（僕もドロークが十兄に近づいたみたい…）俺の手札に、エクゾディアパーツが揃った。これで俺は勝ちだ。」

札木が手札を見せた。

エクゾディアが五方星の魔法陣から出現し有佐川鈴に攻撃した。

「そ、そんな…1ターンキルなんて…このボクが…」

「終わりだ。怒りの劫火…エクゾード・フレイム！！！！」

「キヤアアアアアアアアア！！！！」

『き、決まったああああ！！』

札木選手、見事にエクゾディアパーツを全て揃え

ジュニア大会優勝経験のある有佐川選手を破ったああああ！！！！』

「そ、そんな…」

「これも立派な戦い方のひとつだよ。」

「く、悔しいiiiiiiii！！！！」

会場は熱気に包まれた。

「すっげえ！」

「ドローカードにはあんな使い方もあるんだな！」

「勉強になったぜ！」

それを特別室で見ていたソニックとフェニックスも思わず立ち上がった。

「相手に一切ダメージを与えず特殊勝利条件で勝つという戦法をとるとは……」

「しかも引きがすげえ……すげえ引きを持つデュエリストが出てきましたねフェニックスさん！」

「ああ。あれも立派な勝ち方だ……だが……」

「？」

「いいや。少し嫌な予感がただけだ。」

「そうですね。」

「ああ、ちなみに彼の補佐役は君だよ。」

「マジですか！？」

「まあこんな感じで知り合ったわけで、大会で起こったある事件をきっかけに偽名で出場ってこともわかったんだ。」

「ある事件？」

「ああ。決勝の最中に会場がある組織によってハイジャックされた事件だ。」

目的は優勝商品のレアカード。でもそこで…信じられない事件が起きたんだ。」

「信じられない事件とは？」

「コウがモンスターを実体化させたんだ…」

「『モンスターを実体化！？』」

ソニックはそのときのことを少しずつ話した。

「おい、てめえ優勝商品のレアカードはどこだ！？」

「貴様ごときの人間に答える必要などないわ！」

海馬は銃を向けられてもいつもの態度で答えた。

「チツ、探せ！」

男達が外に出ようとする扉から札木が現れた。

「さ、札木！逃げるんだ！」

「ああ、ソニックか…。俺のことは大丈夫。」

「このガキ、ちょうどいい！こいつの命が惜しかつゴハア！！」

男が倒れる。

後ろには影のようなモノが…。その後ろには白く光輝くカードとデュエルディスクを構えた札木がいた。

「……人間には狂気、恐怖、怒り、悲しみ、憎しみ、その他様々な感情が入り混じっている。

それが限界を超えると人間は死んでしまう。ああ！何て人間は脆いのだろうか！！」

札木は何かに取りつかれたように言う。

「さあ、踊れ！泣き叫べ！我の復活に必要なデュエルエナジーを集めるための儀式の場…

その儀式の場を汚したことをあの世で悔やむがよい！！」

「ひい！」

「行け！我が分身よ！」

「うわああああ！！」

影が黒い波動のようなものを発するとたちまち男たちはその場に糸が切れたように倒れていった。

「何が起きたのですーカ！？」

「安心するがいい、本来は殺してやりたいところだったがそうすると紅代が可哀想なのでな。

だから気絶させただけだ。我は力加減というものがまだできないので、少し心配だが…」

「お前は何者だ！？紅代とはいったい誰だ！？」

「我は…そうだな、破滅の光とでも言えばいいか？」

「「破滅の光！？」「」」

「そうだ。紅代は我に体を提供した者…」

全員はその言葉でハツとした。

まさに破滅の光と名乗った意思が宿っている体が紅代だということ…

「な、何故偽名を使って大会に…」

「深くは聞いてやるな。そしてこやつこの偽名のことも存在も他言

無用だ。」

「フンッ、何かわけがあるようだな……」

「まあそういうことだ。じゃあ、我は引ッ込むぞ……」

そう言うと札木…紅代の体がぐらりと倒れた。

---

「破滅の光…そんなのが、コウの体に？」

「ああ。」

「紅代にいったい何が起こっているのだ？」

「わからない。だけど、その後ペガサス会長に気に入られて新たなカテゴリーが作られたんだ。」

（もしや、この白紙のカードが…？）

カイザーはそんな中、あの時森で拾った白紙のカードを見つめた…

## 第八話 破滅の光（後書き）

次回は紅代の秘密がほとんど明かされ紅代VS十代の兄弟デュエルの回です。

**第九話 過去と兄弟のラストデュエル！？（前編）（前書き）**

今回、紅代の謎の一つが明かされます。

## 第九話 過去と兄弟のラストデュエル！？（前編）

三幻魔のカードを再び封印しようとする鮫島校長。そんな鮫島校長の手から三幻魔のカードが消えていた。

「過去と兄弟のラストデュエル！？（前編）」

「何ですと！？」

「……」

見ると紅代が森の奥に走っていく。

紅代を追っていくと港のほうで男達が屯していた。

紅代は三幻魔を男達に渡す。

「おお！よくやったな紅の道化師！」

「……」

「紅代！三幻魔のカードを返すんだ！」

十代達は追いつくとそう言う。

「……嫌だね！」

「コウ！俺の言うことを聞いてくれ！」

「嫌だ！」

紅代は何を言っても嫌だの一点張り。

「紅代！兄である十代の言うことを聞くんだ！」

万丈目の言葉に男の一人が立ち上がって言う。

「こいつの過去も知らねえくせにアニキ面してんじゃねえーよ！」

「「「ギャハハハハハハ！！！！」」」

その言葉に大笑いする男達。

「お前ら止める。」

それを止めたのは創生の蒼だった。

「しかし蒼さんよお、あのガキの言い分は笑えますぜえ…。」

「そーそー、こいつのアニキだとか言ってるんですから。」

「こいつの過去も知らずによくそんなことが言えたもんだって感じだもんな。」

創世の蒼は十代の瞳を見る。

「…遊城十代、貴様のその瞳はよほど真実を知りたがってるようだな…。」

「ま、待て創生の蒼！」

「てめえ操り人形の癖に蒼さんに口出すんじゃないねえ！」

紅代が止めようとするがそれを男の一人に阻まれてしまう。

「っ！」

「お前の家族がどうなってもいいのか？ ああ！？」

「…わかった、好きにしろ。」

「お、おい！ 家族って、どういことだよ！？」

十代が聞く。

「まあ、何ともマヌケな話だがこいつらの隠れ家になっていた場所がアメリカにあつてな。

そこへ遊城十代がやって来たという情報が入った。こいつらはその情報を手に入れかなりの強者である遊城十代をデスperlに入れ裏デュエル界のスターにしようと目論んだ。

しかし情報は間違っていた。アメリカに来ていたのは貴様の弟の紅代だった。

捕まえたはいいが人違い。しかし、何度も同じ家の人間を誘拐するとなると相当のリスクが伴う。

だからこいつを遊城十代の代わりにしようと考えたのだ。」

「な、何だって！？」

「しかしこいつは断固嫌だと断った。それでこいつらはお前と、両親の近くに殺し屋を潜ませておき

お前達を人質としてこいつを服従させていたんだ。

しかし服従させたはいいがお前よりデュエルの腕は低く裏デュエル界では負けっぱなしだった。  
そしてこいつらはこいつにマインドコントロールを施した。」

「『マインドコントロール！？』『』」

「こいつらのやり方は、そうだな……」

精神的、肉体的に苦痛を与え正確な判断力が低下したとき、文字通り脳の中に考えを叩き込む。

こいつらは「デュエルは勝つことがすべて」という考えをこいつの頭に叩き込んだ。

これを終えてこいつは晴れて俺達デスペルの誘導どおり動く操り人形になった。」

「てんめえー!!」

十代が怒りの声を上げる。

「しかしマインドコントロールは徐々に効果をなくしてきた。  
だから再びこいつらはお前たち家族を人質に取り、さらには今までやってきた罪の重さを自覚させることで  
再び操り人形へと成り代わらせた。

しかしやはり、自我がお前と再会してしまうことで戻ってしまった。  
だが、お前を含めた家族が人質という事実は変わらない。

こいつは自我が戻ってからこいつらの言いなりになった。」

「蒼さんの言うとおりだぜえ！遊戯デッキを盗んだのはこいつだ！  
俺らは命令しただけ…悪いのはすべてこいつなんだよ！」

「……ふざけんなあああああ!!!!」

十代の怒りはとうとう頂点にまで上がった。

「おやおや、そんなことを言っちゃってていいのかよ？お前の後ろには殺し屋がいるんだぜ？」

今、お前が動いたらほかの仲間もお陀仏だ。」

「ぐっ！コウが目の前にいるのに…助けることができないなんて…  
！！」

「…そうだな、おい紅の道化師。」

「何だよ…」

「お前、兄とデュエルしろ。」

「「！？」」

「兄が勝つたらお前を解放してやる。死という形で。」

創世の蒼の言葉に全員が固まった。

「それって…アニキが勝つたら紅代君は殺されちゃうってこと！？」

「そしてお前が勝つたら兄を人質から開放してやる。同じように死という形で！」

「卑怯よそんなデュエル！！」

「何とでも言え。これがデスペルのやり方だ。」

紅代は黙ったままデュエルディスクを構えた。

「……さあ、十兄。勝っても負けてもこれが俺とアンタのやるラストデュエルだ。やろうぜ！」

悔いのないお互いの全力をぶつけたデュエル！」

「コウ…俺は、俺は…！できないそんなデュエル！せっかくコウと再会できたのに…嫌だよ…！！」

「……大丈夫だよ！もし俺が死んじゃっても俺はカードの精霊として十兄のデッキに宿るから！なーんてな！  
だから…やろうぜ。本気のデュエル。俺も本気でやる。だからアンタも本気でやって俺をこの呪縛から解放してくれ。」

「コウ……。わかった…俺は、お前を兄としてその呪縛から開放してやる…！」

だから本気で来い…！」

十代は覚悟を決めた。

（まあ、死んでもそれはそれで困るんだがな…。

演出だけにしておいておけばやつの中の霸王を目覚めさせるための絶望には十分か…）

「『デュエル…！』」

紅代

LP4000

十代

LP4000

「先攻はもらっぜ十兄！ドロー！俺はG・HEROウィンドピエロを召喚！」

G・HEROウィンドピエロ

効果モンスター

星3 / 風属性 / 戦士族 / ATK500 / DFE2000

このカードは1ターンに1度相手の攻撃を無効にできる。

G・HEROウィンドピエロ

DFE2000

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド！」

紅代

LP4000

手札4枚

モンスター / G・HEROウィンドピエロ（守）

魔法・罠 / リバース×1

「俺のターンだ、ドロー！」

「十代は融合によってモンスターを大量展開して速攻で勝負を決めるいわばパワーで押し切る感じ。」

「対してコウは初めは守り、相手の勢いが弱くなったところで勝負を決める守備デッキだ。」

明日香とソニツクの言葉を聞きながら十代は攻め方を考える。

（１ターンに１度攻撃をしのぐウィンドピエロなら俺の融合ですぐに押し切れる…。

でもあの伏せカードが気になるな…。コウのことだし絶対攻撃を防ぐカードに決まってる…）

十代は改めて自分の手札を見やる。

「よし！俺はE・HEROバブルマンを召喚！」

E・HEROバブルマン

効果モンスター

星４／水属性／戦士族／ATK800／DFE1200

手札がこのカード１枚だけの場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に

自分のフィールド上に他のカードが無い場合、

デッキからカードを２枚ドローする事ができる。

「俺はバブルマンの効果でカードを２枚ドロー！

（バブル・ショットはないか。でも、コウは守りが主だから別になくてもいいな…）

俺はカードを２枚伏せてターンエンド！」

十代

LP4000

手札５枚

モンスター／E・HEROバブルマン（攻）

魔法・罫／リバーズ×２

「アニキが攻撃しない!？」

「十代のことだ。手札に攻撃できるモンスターがいなかったなんてことはないだろう。」

「きつと考えがあるんだ…」

「の前にあいつに考えなんてあるのか？」

「俺のターン!ドロー!」

（俺の伏せカードはガード・シグナル。攻撃を誘つか、それともこちらから攻撃するか…

いいや、十兄のことだ。あのカードはきつとバブル・シャッフルに違いない。）

俺はフィールド魔法、覇者の古城を発動!」

「あのカードは、俺がG・HEROと対になるように作ったA・HERO専用フィールド魔法!？」

覇者の古城

フィールド魔法

1ターンに1度、自分の場にミイラトークン（アンデット族・闇・星1・攻100・守800）を1体特殊召喚出来る。

ミイラトークンが1体、召喚される度にこのカードに死霊カウンターを1つのせる。

死霊カウンター1つにつき、戦闘ダメージを100ポイント下げる。死霊カウンターが5個以上あるこのカードが墓地に送られたとき、デッキ・手札・墓地から

『A・HERO ドレッドヴェルク』を1体特殊召喚できる。

周りが古い石の城になっていく。

「いくぞ、このカードは1ターンに1度ミイラトークンを特殊召喚し…」

ミイラトークン

トークン

星1/闇属性/アンデット族/ATK100/DFE800

ミイラトークン

DFE800

「このカードに死霊カウンターを乗せる。」

死霊カウンター×1

「マズイぞ…」

「何がマズインですか？」

ソニックの呟きを聞いた明日香は問いかけた。

「あのカードの効果で…最凶のA・HEROが現れちまうんだ…！」

「俺はさらにG・HEROスプリットプリーストを守備表示で召喚し…」

「さらにカウンターを乗せる気だよあいつ！」

G・HEROSプリットプリースト  
効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK1000 / DFE1800  
フィールド上に「覇者の古城」がある時、1ターンに1度「覇者の古城」に死霊カウンターを2つ乗せる事ができる。

死霊カウンターを1つ取り除く事で墓地に存在する「G・HERO」1体の攻撃力1000ポイントアップし、特殊召喚できる。

G・HEROSプリットプリースト  
DFE1800

「スプリットプリーストの効果で覇者の古城にカウンターを2つ乗せる。」

死霊カウンター×3

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド。」

紅代

LP4000

手札2枚

モンスター / G・HEROウインドピエロ（守） G・HEROSプリットプリースト（守） ミイラトークン（守）

魔法・罫 / 覇者の古城 リバーズ×2

「俺のターン、ドロー！そっちがいかないならこっちから攻めさせてもらうぜ！」

俺は融合発動！手札のフェザーマン、バーストレディを融合しフレーム・ウィングマンを融合召喚！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HEROフレイム・ウィングマン

融合・効果モンスター

星6 / 風属性 / 戦士族 / ATK2100 / DEF1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HEROフレイム・ウィングマン

ATK2100

「フレイム・ウィングマンでスプリットプリーストを攻撃！フレイム・シュート！！」

「ウィンドピエロの効果発動！モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「なあ！？」

ウィンドピエロがフレイム・ウィングマンの炎からスプリットプリーストを守り抜く。

「別にこのカードへの攻撃が無効になるわけじゃない。」

「なら、俺はこれでターンエンド。」

十代

LP4000

手札2枚

モンスター／E・HEROバブルマン（攻）E・HEROフレイム・  
ウイングマン（攻）

魔法・罠／リバーズ×2

「…十兄、本気出してないでしょ？」

「え？べ、別にそんなことはないぜ！」

「そつか、ならいい。」

（俺が勝ったら弟が殺されるって知って、本気なんて出せるわけねえ…。）

全力出すって言ったのになあ…）

「俺のターン、ドロ―！俺はスプリットプリーストの効果で覇者の古城に死霊カウンターを1つ乗せる！」

さらにリバーズカード、速攻魔法、サイクロン発動！」

サイクロン

速攻魔法

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

「俺は覇者の古城を破壊！」

「自分で自分のカードを破壊した？」

「何でそんな無駄なことを…」

「あああ！来る、単体で最凶のカードが来る！」

「俺はデッキからA・HERODレッドヴェルグを特殊召喚！」

A・HERODレッドヴェルク

効果モンスター

星9/闇属性/戦士族/ATK3800/DEF3000

相手の場にモンスターが2体以上いる時、「G・HERO」と名のつくモンスター1体のリリースで召喚できる。

このカードは守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を越えていたらその差だけ相手にダメージを与える。

また、このカードが場にいる限り、「G・HERO」または「A・HERO」は相手のカードの効果を一切受けない。

このカードは相手プレイヤーにダイレクトアタック出来ない。  
守備力を1000下げるによりバトルによる破壊を無効にできる。

A・HERODレッドヴェルク

ATK3800

「で、出やがった…俺がデザインした中で最凶のヒーロー…ドレッドヴェルク…！」

「あ、あれってどういう効果なんすか？」

「E・HEROエッジマンのような貫通ダメージを与える効果に場にある限り相手のカード効果をまったく受け付けないチート効果…さらに守備力を下げることによる戦闘破壊無効効果…」

「何だそれは!？」

「な?最凶だろ？」

「な?じゃないですよ!カード効果が効かない以上十代はあれ以上の攻撃力を持つモンスターを召喚しなくちゃいけないですよ!？」

「いや、あのモンスターの攻撃力を上回るモンスターは出せる。」

カイザーがそう言う。

「十代が俺とのデュエルするとき召喚したE・HEROジ・アースを使えば…」

「ジ・アースとは…あのレアカード、E・HEROジ・アースなのーネ!？」

「はい。あれを使えばあのA・HEROより攻撃力を上回することは可能だ。」

しかし、破壊無効効果があるとなると…」

「へえ、それがコウ、お前のエースなのか!？」

「いいや。俺のエースは別にいる。」

紅代がそう答えると十代は「どんなヒーローか楽しみだぜ！」とほしゃいでいた。

（やっぱり、デュエルの事となると周りが見えなくなるのは昔と同じだ…）

（ヤバ！今はコウをどうやったら死なせずにすむか考えながらデュエルしなくちゃ…！）

紅代は兄である十代との最高のラストデュエルを

十代は弟である紅代を呪縛から開放し再びともに生きたいと

アカデミアの仲間は2人の幸せを

それぞれの願いが交差しながら兄弟のデュエルはつづく…

## 第九話 過去と兄弟のラストデュエル！？（前編）（後書き）

説明がわからなかった人用の説明コーナー

紅代は十代と間違えられデスペルに誘拐。

十代と両親を人質に取られデスペルの言いなりに。

しかも少し前まではマインドコントロール…洗脳を施され操り人形と化していた。

こんな感じですね。

次回、紅代と十代のデュエルの決着！そして2人の運命は！？

次回もお楽しみに！

後厚かましいでしょうが感想ください。

## 第十話 過去と兄弟のラストデュエル!? (後編)

紅代

LP4000

手札3枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク(攻) G・HEROウ  
インドピエロ(守) G・HEROスプリットプリースト(守) ミイ  
ラトークン(守)

魔法・罾ノリバース×1

十代

LP4000

手札2枚

モンスター/E・HEROバブルマン(攻) E・HEROフレイム・  
ウイングマン(攻)

魔法・罾ノリバース×2

「いくぞ、俺はミイラトークンを生贄にG・HEROゲートガード  
ナーを守備表示で召喚!」

G・HEROゲートガードナー

効果モンスター

星6/地属性/戦士族/ATK1000/DEF2700

このカードと相手モンスターとの戦闘ダメージは0になる。

このカードをリリースする事で「G・HERO」と名のつくモンス  
ターを

手札から1体特殊召喚できる。

「さあてと、俺はドレッドヴェルクでフレイム・ウイングマンを攻

撃！」

A・HEROドレッドヴェルク  
効果モンスター

星9/闇属性/戦士族/ATK3800/DFE3000  
相手の場にモンスターが2体以上いる時、「G・HERO」と名の  
つくモンスター1体のリリースで召喚できる。

このカードは守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を  
越えていたらその差だけ相手にダメージを与える。

また、このカードが場にいる限り、「G・HERO」または「A・  
HERO」は相手のカードの効果は一切受けない。

このカードは相手プレイヤーにダイレクトアタック出来ない。  
守備力を1000下げるによりバトルによる破壊を無効にでき  
る。

A・HEROドレッドヴェルク  
ATK3800

E・HEROフレイム・ウィングマン  
融合・効果モンスター

星6/風属性/戦士族/ATK2100/DFE1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレデ  
ィ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、  
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HEROフレイム・ウィングマン  
ATK2100

「トラップ発動！ヒーローバリア！」

ヒーローバリア

通常罠

自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「相手の攻撃を無効に」「A・HEROドレッドヴェルクはカード効果を受けない！」な！？」

「いけ、ドレッドヴェルク！！ブラッドブレード！！！」

「うわあああ！！！」

十代

LP2300

「俺はこれでターンエンド！」

紅代

LP4000

手札2枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク（攻）G・HEROウインドピエロ（守）G・HEROスプリットプリースト（守）G・HEROゲートガードナー（守）

魔法・罠/0

「勝負は決まったも同然のようだな。」

「まだアニキは負けてないぞー!!」

翔が創世の蒼に向かってそう言う。

「ならば、この鉄壁の守りをどうやって崩すつもりだ？」

効果と戦闘破壊を無効にするドレッドヴェルクに1ターンに1度、戦闘を無効にするウインドピエロ。

さらに守備の高いモンスター……」

「十代……!!」

「へへっ、俺の引きは奇跡を呼ぶぜ……!!ドロー……!!俺は強欲な壺を発動!!」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「デッキからカードを2枚ドロー……!!そして天使の施し発動!!」

天使の施し

通常魔法

自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選択して捨てる。

「3枚ドローし2枚捨てる……!!さらにミラクル・フュージョン発動!!」

ミラクル・フュージョン

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって

決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。  
(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「俺は墓地のフレイム・ウィングマンとスパークマンを融合！輝け、シャイニング・フレア・ウィングマン！」

「な!？」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン  
融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / ATK2500 / DEF2100

「E・HERO フレイム・ウィングマン」+「E・HERO スパークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついた

カード1枚につき300ポイントアップする。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン  
ATK2500

「さらにシャイニング・フレア・ウィングマンは俺の墓地に眠るモンスターの数だけ攻撃力が300ポイントアップする！

俺の墓地に眠るヒーロー達は3体！よって攻撃力は900ポイントアップ！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン

ATK2500 ↓ 3400

「さらに手札のE・HEROバーストレディ、フィールド上のバブルマンを融合！E・HEROスチーム・ヒーラーを融合召喚！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HEROスチーム・ヒーラー

融合・効果モンスター

星5 / 水属性 / 戦士族 / ATK1800 / DEF1000

「E・HERO バーストレディ」+「E・HERO バブルマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントが回復する。

E・HEROスチーム・ヒーラー

ATK1800

「これで俺の墓地にさらにE・HEROが追加された！攻撃力アップだぜ！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン

ATK3400 ↓ 4000

「攻撃力4000ですって!？」

「何!？」

「すげえ、すげえよ十兄!」

「おう!E・HEROスチーム・ヒーラーでG・HEROウィンド  
ピエロを攻撃!」

「G・HEROウィンドピエロの効果発動!攻撃を無効にする!」

「けどまだシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃が残ってる  
!」

「うわぁ!」

シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃が決まりウィンドピエ  
ロが破壊される。

「さらに破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらっ  
!」

「っ!」

紅代

LP3500

「トラップ発動!ガード・シグナル!」

ガード・シグナル

## 通常罠

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「G・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「俺はこのカードの効果でデッキからG・HEROスター・ライティングを召喚！」

G・HEROスター・ライティング  
チューナー・効果モンスター

星3/光属性/戦士族/ATK1000/DFE1000

このカードが相手モンスターとの戦闘に破壊され墓地に送られたときデッキからカードを2枚ドローする。

G・HEROスター・ライティング  
DFE1000

「ターンエンドだぜ！」

## 十代

LP2300

手札1枚

モンスター/E・HEROスチーム・ヒーラー(攻)E・HERO  
シャイニング・フレイム・ウィングマン(攻)  
魔法・罠/リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！俺は手札から融合発動。

フィールド上のスプリットプリーストとゲートガードナーを融合し  
G・HEROホワイト・ナイツを融合召喚！」

G・HEROホワイト・ナイツ

融合・効果モンスター

星6/光属性/戦士族/ATK2400/DEF3000

「G・HEROスプリットプリースト」+「G・HEROゲートガードナー」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

1ターンに1度相手フィールド上のこのカードの守備力より攻撃力の低い

モンスターを破壊しそのカードの攻撃力分相手にダメージを与える。

G・HEROホワイト・ナイツ

DEF3000

「いくぞ、俺はホワイト・ナイツの効果発動！相手のモンスター1体を破壊してそのカードの攻撃力分相手にダメージを与える！俺が破壊するのはスチーム・ヒーラーだ！」

「なら、俺はトラップを発動するぜ！エレメンタル・チャージ！」

エレメンタル・チャージ

通常罫

自分フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO」と名のついたモンスター1体につき、自分は1000ライフポイント回復する。

「この効果で俺はライフを2000ポイント回復！」

十代

LP2500

ホワイト・ナイツが剣でスチーム・ヒーラーを破壊する。

「ぐわぁ！」

十代

LP700

「アニキのライフがたったの700に！？」

「しかし何故スチーム・ヒーラーなんだ？」

「ああ、あのカードはな自分の守備力より高い攻撃力を持つモンスターを破壊できないんだ。」

「なるほどな。それでシャイニング・フレア・ウィングマンは破壊されなかったのか。あつぶねえあつぶねえ…」

あ、墓地のE・HEROが増えたことによって攻撃力は300ポイントアップだ！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン

ATK4000↓4300

「（このまま十兄のモンスターを墓地に送っても攻撃力が増えるだけだ…）」

ターンエンド。」

紅代

LP3500

手札1枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク(攻)G・HEROホ  
ワイト・ナイツ(守)G・HEROスター・ライトニング(守)  
魔法・罾/0

「俺のターンだぜ！ドロー！俺はスター・ライトニングをシャイニ  
ング・フレア・ウィングマンで攻撃！」

「っ！スター・ライトニングは破壊されたときに効果が発動する！  
デッキからカードを2枚ドロー！」

「そして破壊されたスターライトニングの攻撃力分のダメージを受  
けてもらっぜ！」

「うわあああ！！」

紅代

LP2500

「くっ…」

「俺はカードを1枚伏せてターン終了だ！」

十代

LP700

手札1枚

モンスター/E・HEROシャイニング・フレイム・ウィングマン  
(攻)

魔法・罾/リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

紅代

LP 2500

手札3枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク(攻) G・HEROホ

ワイト・ナイツ(守)

魔法・罨ノリバース×1

「俺のターン、ドロー！」

(迂闊にモンスターを出したらホワイト・ナイツにやられちまう…)  
ターンエンド！」

十代

LP 700

手札2枚

モンスター/E・HEROシャイニング・フレイム・ウィングマン

(攻)

魔法・罨ノリバース×1

「ドロー！」

(ダメだ、こいつらじゃあのモンスターは倒せない…！)  
ターンエンド！」

紅代

LP 2500

手札4枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク(攻) G・HEROホ

ワイト・ナイツ(守)

魔法・罨ノリバース×1

「なかなか動かないですね。」

「この勝負、どっちが先にキーカードをドローできるかが勝負の行方を左右するな。」

「俺のターン、ドロー！」

…ダメか。」

紅代

LP2500

手札5枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク(攻)G・HEROホ

ワイト・ナイツ(守)

魔法・罠/リバース×1

「俺のターンだぜ！ドロー！」

(よし、あとは融合が来れば…！)

ターンエンド！」

十代

LP700

手札3枚

モンスター/E・HEROシャイニング・フレイム・ウィングマン

(攻)

魔法・罠/リバース×1

(この勝負、引きの強さが運命を分ける。

どうやら遊城十代は紅の道化師の陣を崩すコンボを揃えそうだが紅の道化師のほうは…無理そうだな。)

「俺のターン、ドロー！俺はターンエンド…」

紅代

LP2500

手札6枚

モンスター/A・HEROドレッドヴェルク(攻)G・HEROホ  
ワイト・ナイツ(守)

魔法・罠/リバーズ×1

「いくぜ……ドロー……！」

(来たぜ、融合が！)」

「十代は、キーカードを引いたらしいな。」

「俺は融合発動！手札のエッジマン、ワイルドマンを融合しワイル  
ドジャギーマンを融合召喚……！」

E・HEROワイルドジャギーマン

融合・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/ATK2600/DFE2300

「E・HERO ワイルドマン」+「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事がで  
きる。

E・HEROワイルドジャギーマン

ATK2600

「さらにフィールド魔法、摩天楼・スカイスクレイパーを発動！」

摩天楼・スカイスクレイパー・  
フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、  
攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い  
場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントア  
ップする。

「いくぜ！ワイルドジャギーマンでホワイト・ナイツを攻撃！」

E・HEROワイルドジャギーマン

ATK2600↓3600

「うわっ！」

「そして、シャイニング・フレイム・ウィングマンでドレッドヴェ  
ルクを攻撃！」

（馬鹿が。ドレッドヴェルクの効果をわかって……  
そうか。とことん守備力を減らしてやる寸法か……）

（ここでドレッドヴェルクの効果を使えば破壊は免れる……でも！  
そうしたら……）

そのままドレッドヴェルクは破壊された。

「っ！ー！」

紅代

LP2000

「な、何で効果を使わないんだよ…コウ。」

「わからない。体が動かなかったんだ。」

（体が効果を使うことを拒んだのか…）

「シャイニング・フレア・ウィングマンの効果で俺はダメージを受ける。」

「な！？」

紅代

LP0

紅代のライフが0になる。  
その場が静かになった。

（結局、本気が出せずに終わっちゃった…）

「負けたか…なら約束どおり貴様には…」

そう呟くと創世の蒼は腰から拳銃を取り出した。  
そして…

バンッバンッ！

紅代を打ち抜いた。

「死んでもらう。」

紅代の腹と胸を弾丸が貫通し彼は糸の切れた操り人形のようにバタリと倒れる。

「こ、コウ!!」

「動くな遊城十代。」

創世の蒼は拳銃を十代と仲間達に向ける。

「くっ!コウ、コウ!!」

「無駄だ。おい、やれ!!」

男達に創世の蒼が命令すると男達は紅代の体を持ち上げ海のほうへと連れて行く。  
そして…

「あばよ、操り人形。」

海に紅代の体が放り投げられた。

紅代はあつという間に海水の中に沈んでいく。

「や、やだ…そんな…う、う、うわあああああああ!!!!  
コウ、コオオオオオオオオ!!!!」

十代は地面にひざをつき紅代を泣きながら呼ぶ。  
悲鳴を上げたただ弟の名前を呼んだ。

「遊城十代。これから貴様には我々と一緒に来てもらう。」

十代を男達に取り囲み連れて行くとする。

「『十代！』『十代！』『十代！』」

「アニキ！」

「十代君！」

「シヨニヨール十代！逃げるのーネー！」

全員が呼びかける中、十代は黙ったままだった。

「…る…さない…」

「『？』『？』『？』」

「許さない許さない許さないッ！！！！紅代を殺したやつらを…生かしておくかああああ！！！！」

「『！？！？』『！？！？』『！？！？』」

その場に居た全員が驚く。

十代の瞳は金色に変わっていた。

「ぶっ倒してやる！てめえら全員！！！！」

「取り抑えて連れて来い。」

創世の蒼が男達に指示を出す。

すると男達はデッキからカードを取り出しデュエルディスクにそれをセットした。

出てきたのはエルフの剣士、絵画に潜む者、首なし騎士などのモンスターだった。

ソリッドビジョンではない実体化した…

「な、何が起こってるのーネ!？」

「…リアルフェアリー精霊実体化能力者の能力者が…」

十代の口がそう呟いた。

「しかし、どこが違う。……そうか貴様らは偽装能力者か…」  
フィクションナー

「そうさ!俺達は偽装能力者、しかもAランクだ!」  
フィクションナー

「お前一人でこの人数を相手にまともに戦えるのか?」

「…残念だったな。貴様ら。」

十代の口元がつり上がった。

「俺は…リアルフェアリー精霊実体化能力者のSSランクだ!」

「な!？」

十代がカードを手に取りディスクに読み込ませるとE・HEROフレイム・ウィングマンが現れる。

フレイム・ウィングマンが現れると同時に男達に向かって衝撃波が

起こる。

「くわあああ!!」

男達はその衝撃波で吹き飛ばされる。  
そして十代を見て脅えた。

「こ、これがSSランクの力…!!」

「勝てるわけねえ…!!」

「お、俺まだ死にたくない!!」

「貴様らは許さんツ!!!!」

十代がフレイム・ウィングマンに指示を出そうとするがそれは突如  
現れたバーストレディによって阻まれた。

精霊体なので万丈目、明日香以外には認識できないが…

『止めなさい。紅代が悲しんでしまう。』

「止めるなバーストレディ!」

『紅代の力の反応ならまだあるわ!今なら間に合う!そいつらは失  
神させておくだけにしなさい。』

バーストレディの言葉にフレイム・ウィングマンが男達を気絶させ  
る。

そして彼らは消え、十代の瞳の色も元に戻った。

「あ、あれ？俺は何を…」

十代はキヨロキヨロと辺りを見回しハッとすると急いで海に飛び込んだ。

カイザーも何を思ったのか後を追う。

海の中、紅代の体はある一定の深さで留まり続けていた。

ふわふわと空中浮遊するようなその体の周りに白い靄がいくつも巻きついている。

その靄が今にも消えそうな紅代の命をつないでいることは一目瞭然だった。

十代とカイザーは紅代を見つけると地上へと引き上げようとした。

しかし靄がその場所から紅代を逃がすまいとしているかのように紅代の体はびくとも動かない。

カイザーは十代に指差されて制服のポケットが光り輝いていることに気づく。

カイザーはポケットからあの白紙のカードを取り出した。すると靄はその白紙のカードに吸い込まれていった。

輝きが収まると白紙のカードは元の白紙のままだったが紅代の体は動かせた。

2人で紅代の体を持ち地上まで泳ぐ。

そして水面から顔を出すと安心した仲間の顔が見えた。

「十代！」

明日香がホツとし声をかけるが今はそれどころではなかった。

「明日香！紅代は俺と十代で運ぶ。その男達を逃がさないようにし  
つかりと縛り付けておくんだ！」

デッキとデュエルディスクは危険だから男達から引き離しておけ！」

「わ、わかったわ！」

明日香はカイザーの言葉に頷く。

十代はカイザーとともに紅代を保健室まで運んだ。

紅代は鮎川先生のおかげで何とか一命は取り留めた。

鮎川先生の話では後一步遅れていたら助からなかったそうだ。

これを聞いて十代とカイザーはあの靄に感謝したのだった。

紅代の命をつないでくれたあの白い靄に…

しかし十代は男達を気絶させたことを覚えていなかった。

第十話 過去と兄弟のラストデュエル！？（後編）（後書き）

はい、一体いくつ謎を出すんだって感じですね。

次回は目覚めた紅代に異変が…！

## 第十一話 心の消失（前書き）

今回、紅代が大変なことになります。

## 第十一話 心の消失

「先生！コウ（紅代）（紅代君）の目が覚めたって本当ですか！?!?!?!?!」

保健室の扉を乱暴に開けて息を切らして入ってきたのは十代、万丈目、明日香、翔、カイザーだった。

「ええ。」

「コウ!?!」

十代がベッドから起き上がっていた紅代に抱きついた。

「……」

「コウ？おい、コウ。」

十代が手を前で振っても紅代の瞳はずっと空虚を見つめているだけ。その瞳に光はなかった…

「コウ？コウ？どうしちゃったんだよ？なあ…」

「十代君、ちょっとこっちへ来てくれないかしら？」

鮎川先生が十代を紅代から離れさせる。

「…話はすべて聞いたわ。紅代君の過去も、全部。」

「まあ、話したからな。で、紅代はどうしたんですか？」

万丈目が聞くと鮎川先生は俯いた。  
そして出た言葉はとても残酷で…

「…言い難いんだけど紅代君は、いいえ。紅代君の精神は……………」

壊れてしまったわ…。」

「え…？」

十代はそれを聞くと呆然とした。

「壊れたって…どういふことっすかそれ!？」

「彼はマインドコントロールを施されたのよね？幾度にもわたるマインドコントロールと

罪よつての罪悪感、さらに兄である十代君を拒絶しなければいけない絶望。

これらが紅代君の精神を粉々に破壊してしまったの。  
もう、彼の精神は…心は…」

「そんな…」

十代は紅代を自分のほうに向かせ肩を掴み揺すった。

「おい、コウ！コウ！！俺のことがわかるだろう！？コウ！！  
なあ、返事してくれよ！！また十兄って呼んでくれよ！！コウ！！」

「十代…」

カイザーは紅代の顔を自分のほうに向かせ自分の事を指差し言った。

「紅代。俺はま・る・ふ・じ・りよ・う。」

「な、なにやってるのお兄さん？」

「いや、こういう治療法が脳には最適だとか聞いたことが…」

「……ま……る……ふ……じ……りよ……う……」

「……！？」

紅代が空虚を見つめながらもそう言ったことに全員が驚く。

「これは、やってみる価値はあるわね。」

鮎川先生の言葉に十代の顔が輝き今度は十代がやってみた。

「コウ！コウ！俺の名前はな、ゆ・う・き・じゅ・う・だ・い！」

「……ゆ……うき……じゅ……だ……い……」

「そうそう！」

「じゃあ私も！私はて・ん・じょ・う・い・ん・あ・す・か・よ。」

「てん……じょ……い……ん……あ……す……か……」

「僕の名前はま・る・ふ・じ・しょ・う！っす！」

「……ま……る……ふ……じ……しょ……う……」

「俺の名前はま・ん・じょ・う・め・じゅ・ん。」

「……ま……ん……じょ……う……め……じゅ……ん……」

名前を呟いていく紅代を見て十代はある提案を鮎川先生に出した。

「先生！コウは俺に面倒を見させてもらえませんか！？」

「え？」

「俺はコウと離れるなんて嫌だし、ましてやこんな状態のコウを置いて自分一人だけ学園生活を送っているなんて許せないんだ！」

「……………」

「お願いしますー！ー！」

十代はその場で土下座をした。

「ええ！？」

あの十代が土下座をするとは誰も思わなかったのだろう。

「先生、俺からお願いします。」

「俺からものです。」

カイザーと万丈目まで頭を下げた。

「私からも！」

「僕からも！」

明日香と翔も頭を下げた。

「…わかったわ。校長先生に話してみましよう。」

「「「や、やったー！！」」」

カイザー、万丈目以外が飛び上がって喜ぶ。

「…十代。紅代はお前のデュエルが好きなんだろう？」

カイザーが聞くと十代は拍子抜けした顔で答えた。

「え？ああ。いつも俺のデュエルを見ているのが好きだったやつだ

からな……」

「なら、誰かとデュエルをしてそれを紅代に見てもらえば……」

「そっか!!」

十代は保健室を飛び出した。

「あ!そっだ!鮎川先生!車椅子にコウを乗せてデュエルフィールドまで連れて来てくれ!!」

そう言って。

デュエルフィールド

「コウ!来てくれたんだな!見ていてくれよ、俺のデュエル!」

「……デュエル……」

車椅子に座ったまま空虚を見つめて言葉を返した。

「はやくしてください、十代君。」

「ああ、悪い悪い！」

「……………」

メガネをかけたブルー女子が紅代の顔を自分のほうに向けた。

「私の名前はは・ら・れ・い・かです！」

「……………は………れ………いか……………」

「そうです！天上院さん、十代君から話はすべて聞きました。私も委員長として紅代君を元に戻すのに協力します！」

「あ、ありがとう委員長。」

「それでは、いきますよ十代君！」

「おう！」

「「デュエル！」」

十代

LP4000

麗華

LP4000

「俺のターンでいいか委員長？」

「はい。十代君には先攻が似合っていますので。」

「じゃあ、ドロー！俺はE・エマージェンシーコールを発動！」

E・エマージェンシーコール

通常魔法

自分のデッキから「E・HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「俺はデッキからフェザーマンを手札に加える！手札から融合発動！フェザーマンとバーストレディを融合し来い！マイフェイバリットカード！E・HEROフレイム・ウィングマン！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HEROフレイム・ウィングマン

融合・効果モンスター

星6 / 風属性 / 戦士族 / ATK2100 / DEF1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HEROフレイム・ウィングマン

ATK2100

「カードを1枚伏せてターン終了だぜ！」

十代

LP4000

手札3枚

モンスター/E・HEROフレイム・ウィングマン（攻）

魔法・罠/リバーズ×1

「私のターンです！ドロー！私は永続魔法、悪夢の拷問部屋を行使します。」

悪夢の拷問部屋

永続魔法

相手ライフに戦闘ダメージ以外のダメージを与える度に、

相手ライフに300ポイントダメージを与える。

「悪夢の拷問部屋」の効果では、このカードの効果は適用されない。

「さらにマジックカード、ミスフォーチュンを行使します。」

ミスフォーチュン

通常魔法

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

このターン自分のモンスターは攻撃する事ができない。

「フレイム・ウィングマンの攻撃力の半分、ダメージを与えます！」

「うわぁー!!」

十代

LP 2950

「さらに悪夢の拷問部屋の効果が発動します。戦闘以外でダメージが相手ライフに与えられたとき  
さらに300ポイントのダメージを与えます。」

「っ!!」

十代

LP 2650

「さらにジャイアントウィルスの召喚を行います。」

ジャイアントウィルス

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 1000 / DEF 100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

相手ライフに500ポイントダメージを与える。

さらに自分のデッキから「ジャイアントウィルス」を任意の数だけ表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

ジャイアントウィルス

DEF 100

「カードを伏せます。ターン終了です。」

麗華

LP4000

手札2枚

モンスター/ジャイアントウィルス(守)

魔法・罠/リバーズ×1 悪夢の拷問部屋

「あービックリしたぜ。いきなりライフが3000切るとは思わなかったからな！」

「十代君、このくらいで驚いてはいけません。弟さんに良いところを見せるんでしょう？」

「そつだそつだ！ドロー！俺はトラップカード、ヒーロー・プラスト発動だぜ！」

ヒーロー・プラスト

通常罠

自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついた通常モンスター1体を選択し手札に加える。

そのモンスターの攻撃力以下の相手フィールド上表側表示モンスター1体を破壊する。

「俺は墓地のバーストレディを手札に戻しバーストレディの攻撃力より低い攻撃力を持つジャイアントウィルスを破壊する！」

「くっ！」

「やった！」

「ジャイアントウィルスは戦闘で破壊されなくては効果発動はできないからな。」

カイザーが言うと、紅代の瞳に一瞬光が戻った。

「俺はさらに手札のバーストレディとクレイマンを融合しランパートガンナーを融合召喚！」

E・HEROランパートガンナー

融合・効果モンスター

星6/地属性/戦士族/ATK2000/DFE2500

「E・HERO クレイマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが表側守備表示の場合、

守備表示の状態で相手プレイヤーを直接攻撃する事ができる。

その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。

E・HEROランパートガンナー

DFE2500

「いくぜ委員長！俺はフレイム・ウィングマンでダイレクトアタック！」

「迂闊でしたね十代君！聖なるバリア・ミラーフォース-を発動します！」

聖なるバリア・ミラーフォース-  
通常罠（制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「うわああ！！俺のフェイバリットカードがあー！！」

「十代……」

明日香が呆れている。

「でも、俺のバトルフェイズは終わらないぜ！ランパートガンナーは表側守備表示のとき、相手にダイレクトアタックができる！」

「何ですと！？」

「ランパート・ショット！」

「キャアアー！！」

麗華

LP3000

「あ、あれ？ランパートガンナーの攻撃力は2000のはず……」

「ああ、それはランパートガンナーの効果で攻撃力は半分になるんだよ。」

「なるほど。そういうことでしたか。勉強になりました。」

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

十代

LP 2650

手札1枚

モンスター／E・HEROランパートガンナー（守）

魔法・罨／リバーズ×1

「いきますよ！ドロー！私はファイヤー・トルーパーを召喚します。

」

ファイヤー・トルーパー

効果モンスター

星3／炎属性／戦士族／ATK1000／DEF1000

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、

このカードを墓地に送る事で、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

「このカードは召喚に成功したとき墓地に送ることで相手に1000ポイントのダメージを与えます！」

「うわあああ！！！」

十代

LP 1650

「さらに悪夢の拷問部屋の効果で300ポイントのダメージを与えます！」

十代

LP 1350

「カードを伏せてターンエンドです。」

麗華

LP3000

手札1枚

モンスター/0

魔法・罫/リバース×1 悪夢の拷問部屋

「俺のターンだな！ドロー！

（コウ…これで思い出してくれ。アカデミアでの楽しかったこと、小さい頃の俺とのデュエル。お前の楽しかったこと…！）」

「……………じゅ……………う……………に……………」

## 第十一話 心の消失（後書き）

というわけで精神…心が壊れてしまった紅代。

十代達は紅代の心を修復することができるのか？

## 第十二話 動き出す影

麗華

LP3000

手札1枚

モンスター/0

魔法・罨/リバーズ×1 悪夢の拷問部屋

十代

LP1350

手札2枚

モンスター/E・HEROランパートガンナー（守）

魔法・罨/リバーズ×1

「俺は強欲な壺を発動！」

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「デッキから2枚ドロー！俺は手札から融合発動！エッジマンとスパークマンを融合しプラスマヴァイスマンを融合召喚！」

E・HEROプラスマヴァイスマン

融合・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/ATK2600/DFE2300

「E・HERO スパークマン」+「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。手札を1枚捨てる事で相手フィールド上の攻撃表示モンスター1体を破壊する。

「プラズマヴァイスマンでダイレクトアタック！」

「あまいですね十代君！魔法の筒発動です！」

魔法の筒

通常罠（準制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「これであなたのライフは0！」

「それはどうかな！神の宣告発動だ！」

神の宣告

カウンター罠（制限カード）

ライフポイントを半分払って発動する。

魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

十代

LP675

「これで魔法の筒の効果は無効だ！」

「キヤアアア!!」

麗華

LP400

「ランパートガンナー、ランパート・ショット!!」

「キヤアアアアアア!!」

麗華

LP0

「あ……………」

紅代が声を出した。

そのとたん頭を抑えてうずくまる。

「うう……!!」

「どうしたの!？」

「しっかりしなさい!」

「鮎川先生を呼んだほうがいいかもしれん!」

『コウ！このカードはな……』

『まったく、隙あればコウをイジメやがって……』

『大丈夫かコウ？』

『コオウ！』

……誰？俺を呼ぶのは……

---

（動き出す影）

「コウ！俺のデュエル見てくれたか！？」

紅代は顔を上げた。十代は紅代に寄って行くが紅代は空虚を見ている。

決して十代を見てはいない。

「……」

「…どうだ？俺、カッコよかっただろ？」

「……」

「コウ…。なあ翔。俺しばらくコウの部屋で生活するわ。」

「わかったっす。きっと紅代君も喜ぶっす。」

「ああ。だいたいけど…」

十代はその日、紅代の部屋に荷物を入れ紅代と共同生活することになった。

朝

「コウ、朝だぜー！」

十代は珍しく早起きをし部屋のカーテンを開けていた。

「コウ！ほら起きろって！」

紅代を着替えさせると布団からお姫様抱っこで下の食堂まで運んだ。

「おはよー！」

「あ、アニキおはよう!」

「おはようなんだな。」

「珍しいな。貴様が早起きなど。」

レッドの仲間と挨拶を交わすと十代は急いで自分の朝食を食べ、紅代に朝食を食べさせる。

「紅代、口開けて!。」

紅代の口を開けさせると十代はスプーンで紅代の口に朝食を入れる。紅代はそれをゆっくりと食べるのだ。

「美味いよなー、今日の味噌汁!」

「……」

「コウ、早く戻ってくれよな……」

十代は紅代の体をギュッと抱きしめ子供をあやす様に背中を優しく撫でた。

「ここまで来たらぶっちゃけ兄弟というより恋人か何かだと思っ  
あ……」

「俺も思ってたんだな。」

「あ、隼人君も?」

「なんか言ったか？」

「「いいえ！（なんだな！）」」

2人は十代の声が低かったので身の危険を感じすぐに誤魔化した。

## 教室

「それではシヨニョール十代！効果モンスターについて説明するのーネー！」

授業中も十代は紅代の隣に座っている。

十代は授業中、珍しく眠らずに紅代のノートにクロノス先生の言葉をカリカリと書いている。

後で紅代が困らないためだ。

生徒達はドン引きした。

そして思ったのだ。

今日は雨どころか槍でも降ってくるんじゃないか。

と。

そんな中、十代が呼ばれた。

「は、はい！ええっと、ええっと……」

そんなとき紅代がノートのあるページを開いた。

そこにはモンスター効果についてが紅代なりにわかりやすく解説してあった。

「ええっと…効果モンスターはモンスターでもマジックみたいな効果を発揮するモンスターのことです。

効果しよ、処理？には大きく分けて5つあって、

メタモルポットやマシユマロンなどのリバース効果に…

このカードは戦闘では破壊されないなどの永続効果…ええっとさらに…

プレイヤーが発動すると宣言して発動される起動効果に

テキストにあるそのモンスターが決めたタイミングで発動される誘発効果と、ええっとええっと…

わ、わかりません…」

「それだけ言えれば十分なのーネ。座ってよろしいのーネ！」

クロノスに言われ座る十代。

そして紅代にお礼を言った。

「サンキューなコウ。」

「……」

紅代は無意識にやったことなのか、また空虚を見つめていた。

「コウ…もしかして本能的に俺を…？  
(なら、まだまだ希望はあるぜ！)」

十代は小さくガッツポーズした。

そしてその日、授業が終わると校長に呼び出された。

## 校長室

「…十代君、あの男達が遊戯デッキを売さばこうとしていたのを突き止めました。他にもフォードの少年が奪ったカードも…」

「そう、ですか…」

「もう売り出されてしまったカードもありましたが、それはI2社とKCが全力を挙げて探し出しています。」

「……」

十代は無言で空虚を見ている紅代を見つめる。

「…ごめん。校長先生。俺がもっと早くコウのことに気づいてあげ

れば……」

「いいえ。十代君とご両親を見張っていた殺し屋もあの日警察が来て捕まえました。」

「……デスベルは？」

「あの男達を問いただした結果、紅代君を捕らえたのはどうやら裏デュエル界のスターにすることの他に上からの命令もあったということです。」

「上からの？」

「はい。目的までは教えられていないのですが……」

十代は「そうですか。」と言うと紅代の車椅子を押して校長室から出て行った。

「……十代君、紅代君の中の破滅の光を正義の光に変えてほしい。それだけが紅代君を救える唯一の光なのだから……。」

鮫島校長はそう呟いた。

（ここはどこだ…？俺は一体…）

『やつとか、我は待ちくたびれたぞ。』

（お前は何者だ？）

『我はお前を導く者だ。紅代よ…』

（俺を導く…）

『お前を光の道へと導く、な…。』

（光…）

『お前の心、完全に修復してやりたいが我の今の力ではそれも不可能と言える。』

（別にいいよ…）

『お前を思う者達のデュエルエナジー…。それが集まれば少しずつ心は修復されていく。  
最終的にここから出るのはお前の意思しだい…』

（出るのは俺の意思しだい…。出たいよ。でも出たら俺は十兄達に拒絶されるかもしれない…。）

『可哀想な紅代！お前を救えるのはもはやこの光しかないのか！？』

（……）

『我はお前を守る。だから泣くな。私の同胞が悲しむぞ。』

（同胞…？何でお前の同胞が悲しむのさ？）

『可哀想な紅代よ。お前は選ばれたのだ。我を宿し、私の力を自らの力とし闇を殺す者として…！！』

（闇を殺す者…）

『そう、闇を殺す光として選ばれたのだ！！』

紅はマヤカシの光に墮ちていく…

??? デスペル本部

「そうですか…。遊城紅代のクイーン化は順調に進んでいますか…」

「はい。」

「遊城十代も霸王化の片鱗を見せましたがあれ以降はまったく…」

男と話していたのは創世の蒼と銀髪の何者かだった。

「遊城十代が霸王化しなければ計画は進められないというのに…。  
まあ、焦らずゆっくりやっていかなければ遊城紅代のように心を壊  
してしまいますか…。」

銀の音色！」

「ハッ！」

銀髪の男が顔を上げる。

「彼方はアカデミアで遊城紅代と遊城十代を見張れ。わかったな？」

「仰せのままに…」

影が、動き始めようとしていた…

## 第十二話 動き出す影（後書き）

次回はカイザーとのデュエルの前日の話と早いもんですが新入生と転校生の話ですね。

### 第十三話 転人生登場！？ VS 極星使い・越前リョーマ

今日、十代はカイザーから卒業デュエルの相手をしてくれと頼まれた。

そして衝撃的なことを言ったのだ。

「あと俺はこれからもアカデミアに研究生として残るから。」

これは衝撃を与えた。

「な、な、な、な、何でっすかお兄さん！？

卒業したらずぐにプロになるって言ってたじゃないっすか！？」

「いや、十代と紅代のこれからが心配でな。それに翔とももう少しいたいし……」

「アニキのブラコンがお兄さんにうつたつすー……！！！」

翔が騒いでいるなか紅代は車椅子の上でうたた寝をしていた。

「こらーコウ。風邪ひくぞー。」

こちらはどこか、ほのぼのしていた。

さて変わってあるへりの中。

「……遊城紅代に遊城十代。いずれ我らの上に立つクイーンと我らの障害となりうる霸王か。」

銀髪の青年が笑みを浮かべデッキを持った。

「遊城紅代、いや、紅代様のクイーン化は順調に進んでいる。問題は…遊城十代の霸王化か…」

「まあ、遊城十代が霸王化しないとせっかく紅代様がクイーンになられても目的達成ができないもの。  
キャハハハ！！」

緑色の髪をした少女が愉快そうに笑いながら青年に話しかけた。

「ああ。霸王化は遊城十代に極度の絶望を味合わせればいいはずだ。ただしゆっくりやらなければ今の紅代様のように精神に異常をきたす恐れがあるからな。」

「クイーン化は異常をきたさないと進まないけど霸王化はそうはいかないってわけね。キャハハ！」

「ああ。さて、そろそろアカデミアにつく。準備をしておけ。」

「はい。」

へりはアカデミアへと着く。

「転入生登場！？ VS 極星使い・越前リョーマ」

「ええーそれでは転入生を紹介したいと思います。どうぞ。」

校長が言つと3人の生徒がステージに上がってきた。

「越前<sup>えちぜん</sup>リョーマって言います。よろしくお願いします。」

テニスの王子様に出てくる主人公と同じ容姿の少年が自己紹介した。

「「「キヤー！！可愛いー！！」」」

女子が騒いでいる。

正直言つてうるさいとリョーマは思ったよつで顔が引きつっていた。

「俺は狼銀<sup>おおかぎんじ</sup>二です。以後よろしく。」

「私は織原翠<sup>おりはなみどり</sup>だよ！よろしくねー！」

他の2名も自己紹介をする。

「校長センサー。俺、アカデミアの实力が見たいから誰かとデュエルしたいんだけど。」

リョーマが手を挙げ言つ。

「それもいいですね。それでは皆さんにデュエルをしてもらいましょう。」

校長が相手を選び始めた。

「そうですね…越前君の相手は、十代君！お願いできますか？」

「ええ！？」

十代は紅代から目を離し驚いた。

「……おう！いいぜ！」

「十代！紅代なら私が見ていてあげるから。」

明日香が紅代を見ていると言うと十代は安心し「行ってくる！」と言いついていこうと…

ガシッ！

したがそれは紅代が制服の裾を掴むことで静止された。

「え？こ、コウ？」

「……」

「コウ、安心しろ。兄ちゃんは戻って来るからな。」

十代が優しく語りかけると紅代は裾から手を離れた。

「随分回復が進んでるな。」

（十代に弟っていなかったよな…）

三沢の言葉に十代は頷くと紅代の頭に手を乗せてステージへと走っていった。

「待たせたなりヨーマ！俺、遊城十代！」

「よろしく、十代。十代って弟いたの？」

「ああ！今ちよつとわけありであんな感じだけどな…」

「そつ。」

「「デュエル！！」」

十代

LP4000

リヨーマ

LP4000

「俺のターンだぜ！」

「いっすよ。」

「ドロー！俺はバブルマン召喚！」

E・HEROバブルマン

効果モンスター

星4 / 水属性 / 戦士族 / ATK800 / DEF1200  
手札がこのカード1枚だけの場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に  
自分のフィールド上に他のカードが無い場合、

デッキからカードを2枚ドローする事ができる。

E・HEROバブルマン

ATK800

「バブルマンの効果でデッキからカードをドロー！バブルマンにバブル・ショットを装備！」

バブル・ショット

装備魔法

「E・HERO バブルマン」にのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

装備モンスターが戦闘で破壊される場合、

代わりにこのカードを破壊し、装備モンスターのコントローラーへの戦闘ダメージを0にする。

E・HEROバブルマン

ATK800 ↓ 1600

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド！」

十代

LP4000

手札5枚

モンスター/E・HEROバブルマン（攻）

魔法・罠/リバーズ×1 バブル・ショット

「俺のターン、ドロー！俺は極星霊ドヴェルクを召喚！」

極星霊ドヴェルク

効果モンスター

星1 / 地属性 / 戦士族 / ATK1000 / DEF1000

このカードが召喚に成功したターン、

自分は通常召喚に加えて1度だけ

「極星」と名のついたモンスター1体を召喚する事ができる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分の墓地から「極星宝」と名のついたカードを1枚選択して手札に加える。

極星霊ドヴェルク

ATK100

「さらにこのカードが召喚に成功したとき、もう1度極星と名のつくモンスターを召喚する！」

俺はドヴェルクをリリースし極星霊デッキアールヴを召喚！」

極星霊デッキアールヴ

チューナー（効果モンスター）

星5 / 闇属性 / 魔法使い族 / ATK1400 / DEF1600

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する「極星」と名のついた

モンスター1体を選択して手札に加える事ができる。

極星霊デッキアールヴ

DEF1600

「さらにデッキアールヴの効果発動！このカードが召喚に成功したとき墓地の極星を手札に加える。

俺はドヴェルクを手札に加える！カードを伏せてターン終了！」

リヨーマ

LP4000

手札4枚

モンスター／極星霊デッキアールヴ（攻）

魔法・罾／リバーズ×1

「極星かぁ、カッコいいカード使うなリヨーマって！」

「まあね。」

「よっしゃ！俺のターンだ！ドロー！俺は手札のバーストレディとフェザーマンを融合しE・HEROフレイム・ウィングマンを融合召喚！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

E・HEROフレイム・ウィングマン

融合・効果モンスター

星6／風属性／戦士族／ATK2100／DEF1200

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HEROフレイム・ウイングマン

「いくぜ！フレイム・ウイングマンでデッキアールヴを攻撃！」

「トラップ発動！攻撃の無力化！」

攻撃の無力化

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「うわちゃ〜防がれたぜ〜。じゃ、俺はこれでターンエンド！」

十代

LP4000

手札2枚

モンスター／E・HEROバブルマン（攻）E・HEROフレイム・ウイングマン（攻）

魔法・罠／リバーズ×1 バブル・ショット

「俺のターン！ドロー！俺は極星霊ドヴェルクを召喚！ドヴェルクの効果で手札から極星霊リョースアールヴを特殊召喚！」

極星霊リョースアールヴ

効果モンスター

星4／光属性／魔法使い族／ATK1400／DFE1200

このカードが召喚に成功した時、

このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

モンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターのレベル以下の「極星」と名のついたモンスター

ー1体を

手札から特殊召喚する。

極星霊リヨースアールヴ

ATK1400

「レベル4のリヨースアールヴ、レベル1のドヴェルクにレベル5のデックアールヴをチューニング！」

「『チューニング！？』」

「まさかりヨーマもシンクロを使うのか！？」

「星界から光臨せし気まぐれな神！その絶対的な力を彼らに見せつけ世界の無力さを笑うがいい！

シンクロ召喚！光臨せよ、極神皇ロキ！」

極神皇ロキ

シンクロ・効果モンスター

星10/闇属性/魔法使い族/ATK3300/DEF3000

「極星霊」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、自分のバトルフェイズ中に相手が魔法・罠カードを発動した時、

その発動を無効にし破壊する事ができる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、

そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する

「極星霊」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、  
自分の墓地に存在する罠カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

極神皇ロキ

ATK3300

「いくよ…極神皇ロキ！バブルマンを攻撃！」

「バブル・シヨットの効果発動！装備モンスターが破壊されるとき、このカードを破壊して戦闘ダメージを0に！  
そしてバブルマンを戦闘から守る！」

「極神皇ロキはバトル中に発動されたマジック、トラップの効果を無効にし破壊する！」

「な！？うわあああ！！！」

十代

LP1500

「あ、アニキのライフが一気に削られちゃった！」

「まだまだだね十代。ターン終了だ。」

リョーマ

LP4000

手札3枚

モンスター／極神皇ロキ（攻）

魔法・罠／0

「つええ…楽しくなってきた！俺のターン、ドロー！俺は天使の施し発動！」

天使の施し

通常魔法

自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選択して捨てる。

「3枚ドロー！俺はさらに手札を2枚捨てるぜ！マジック、ミラクル・フュージョン発動！」

ミラクル・フュージョン

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「フレイム・ウィングマンと墓地のスパークマンを融合！！」

「そんなカード、いったいいつ……！そうか、あのときの天使の施しで……」

「そつだぜ！現れる、シャイニング・フレア・ウィングマン！！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / ATK2500 / DEF2100

「E・HERO フレイム・ウィングマン」+「E・HERO ス

パークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついた

カード1枚につき300ポイントアップする。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン

ATK2500↓2800

「いくぜ、フィールド魔法、摩天楼・スカイスクレイパー - 発動！」

摩天楼・スカイスクレイパー -

フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、

攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

辺りがビル街に変わっていく。

「いくぜ、シャイニング・フレア・ウィングマン！極神皇ロキを攻撃！シャイニング・スカイスクレイパー・シュート！！」

「っ！」

リョーマ

LP3500

「さらにシャイニング・フレア・ウィングマンは戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「な！？ぐわあああ！！！」

リョーマ

LP200

「やったー！リョーマ君に大ダメージだ！！」

「くっ…極神皇ロキの効果発動！」

「へ？」

「極神皇ロキは墓地の極星霊のチューナーを除外することでフィールド上に特殊召喚できる！舞い戻れ、極神皇ロキ！」

「なっ、せっかく倒した極神皇ロキが戻ってきたああ！！！」

「十代、これが俺の極神皇ロキの力だ。」

「俺はカードを1枚伏せてターン終了！」

十代

LP1500

手札1枚

モンスター／E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン（攻）

魔法・罨ノリバース×1 摩天楼・スカイスクレイパー・

「俺のターン、ドロー！十代、残念だけどアンタのライフはここで尽きる。」

「何!？」

「俺の極星神をナめないでほしいね…」

### 第十三話 転入生登場！？ VS 極星使い・越前リョーマ（後書き）

今回はここで終わりです。

十代「どれだけ中途半端？」

次回はリョーマ戦の続きと紅代が目覚めるためのデュエルです。

十代「ついにコウ復活か！？」

うん。 といってもあんまりたってないし…

次回もお楽しみに。

十代「あれ？リョーマってテニプリの…」

これも物語に必要なんだよ！！遊戯王に関係のない世界の人物って設定が！

## 第十四話 光と紅

リヨーマ

LP200

手札4枚

モンスター／極神皇ロキ（攻）

魔法・罨／0

十代

LP1500

手札1枚

モンスター／E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン（攻）

魔法・罨／リバーズ×1 摩天楼・スカイスクレイパー・

「俺は極星宝ドラウプニルを発動！」

極星宝ドラウプニル

装備魔法

「極神」または「極星」と名のついたモンスターにのみ装備可能。  
装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードがカードの効果によって破壊された場合、

自分のデッキから「極星宝」と名のついたカード1枚を手札に加える事ができる。

「このカードを極神皇ロキに装備する！」

極神皇ロキ

ATK3300↓4100

「さらに装備魔法、極星の裁きを発動！」

極星の裁き

装備魔法

このカードを装備した装備モンスターの攻撃力は自分フィールド上の「極星」と名のつくモンスターのレベル×100ポイントダウンする。

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン

ATK2800↓1800

「いくぞ！極神皇ロキで攻撃！」

「くっ、トラップ発動！ロキの効果を忘れたわけじゃないよね？」  
「っ！」

極神皇ロキ

シンクロ・効果モンスター

星10/闇属性/魔法使い族/ATK3300/DEF3000

「極星霊」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、自分のバトルフェイズ中に相手が魔法・罠カードを発動した時、

その発動を無効にし破壊する事ができる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、

そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する

「極星霊」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、  
自分の墓地に存在する罫カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

極神皇ロキ

ATK4100

「シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は1800ロキの攻撃力は4100…その差は…」

「2100…！」

「そついうことだよ。」

「うわああああ…！」

十代

LPO

「しょ、勝者！シヨニョールリヨーマなのーネ！」

「フツ、十代。まだまだだね。」

リヨーマはそう言いながらも手を差し伸べた。

「負けちまったぜー！でも、ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

十代がお決まりのポーズをして握手した。  
あちらこちらから拍手が巻き起こる。

紅代はその十代を見て一瞬だけ光を瞳に宿した。

く光と紅く

紅代は真っ白な空間に胎児のように丸まって浮かんでいた。  
どこからともなく声がする。

『さあ、デュエルエナジーは集まった。紅代よ！我とともに帰還の  
ためのデュエルだ！』

（嫌だ…！俺は、俺は帰りたくない…！）

『帰りたいのに帰れない。ああ！何と可哀想な紅代！しかしその迷  
いもすぐに吹っ切れるだろう。』

（どういうことだ？）

『大事なお前の片割れが危機に直面しているのだよ。』

（十兄に！？）

紅代が顔を上げた。

『ああ。さあ紅代！我とともにデュエルを！！』

紅代は立ち上がった。

（十兄、今行くよ…！）わかった、デュエルだ！！」

紅代が念じると腕にデュエルディスクが現れた。

『「デュエル！！」』

紅代

LP4000

光

LP4000

「先攻は俺がもらう。ドロー！覇者の古城を発動！」

覇者の古城

フィールド魔法

1ターンに1度、自分の場にミイラトークン（アンデット族・闇・星1・攻100・守800）を1体特殊召喚出来る。

ミイラトークンが1体、召喚される度にこのカードに死霊カウンターを1つのせる。

死霊カウンター1つにつき、戦闘ダメージを100ポイント下げる。

死霊カウンターが5個以上あるこのカードが墓地に送られたとき、デッキ・手札・墓地から

『A・HERO ドレッドヴェルク』を1体特殊召喚できる。

「俺はミイラトークンを特殊召喚！」

ミイラトークン  
トークン

星1/闇属性/アンデット族/ATK1000/DFE800

ミイラトークン

DFE800

「このカードに死霊カウンスターを乗せる。」

死霊カウンスター×1

「ミイラトークンを生贄にG・HEROゲートガードナーを生贄召喚！」

G・HEROゲートガードナー

効果モンスター

星6/地属性/戦士族/ATK1000/DFE2700

このカードと相手モンスターとの戦闘ダメージは0になる。

このカードをリリースする事で「G・HERO」と名のつくモンスターを

手札から1体特殊召喚できる。

G・HEROゲートガードナー

DFE2700

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

紅代

LP4000

手札3枚

モンスター／G・HEROゲートガードナー

魔法・罾／リバーズ×1

『ドロー！我は魔轟神オルトロを召喚！』

魔轟神オルトロ

チューナー・効果モンスター

星2／光属性／悪魔族／ATK800／DFE500

手札を1枚墓地へ送って発動する。

手札からレベル3の「魔轟神」と名のついた  
モンスター1体を特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

魔轟神オルトロ

ATK800

『手札を1枚捨て魔轟神ディフを特殊召喚！』

魔轟神ディフ

効果モンスター

星3／光属性／悪魔族／ATK1400／DFE1700

「魔轟神」と名のついたモンスターが手札から自分の墓地へ送られた時、

自分フィールド上に存在するこのカードをリリースし、  
そのモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

魔轟神ディフ

ATK1400

『いくぞ！レベル2の魔轟神オルトロをレベル3の魔轟神ディフにチューニング！』

悪魔の軍勢を引きつれ飛べ！！天高く！！シンクロ召喚！魔轟神レイジオン！！！！』

魔轟神レイジオン

シンクロ・効果モンスター

星5 / 光属性 / 悪魔族 / ATK 2300 / DEF 1800

「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

自分の手札が1枚以下の場合、このカードがシンクロ召喚に成功した時、

自分の手札が2枚になるまでデッキからカードをドローする事ができる。

光に実体はない。

モンスターが光の中から出てきた。

「ゲートガードナーの守備力には及ばない…。」

『そうだ。しかしこれでどうかな？フィールド魔法、魔轟亭を発動！！』

魔轟亭

フィールド魔法

「魔轟神」と名のついたモンスターの攻撃力を800ポイントアップする。

自分フィールド上の「魔轟神」が墓地に送られたときデッキからカードを1枚ドローする。

『これで魔轟神レイジオンの攻撃力は800ポイントアップする。』

魔轟神レイジオン

ATK2300 ↓ 3100

『レイジオンでゲートガードナーを攻撃する。』

「っ！ゲートガードナーが…」

『ターンエンド。』

光

LP4000

手札2枚

モンスター／魔轟神レイジオン

魔法・罫／魔轟亭

「俺のターン、ドロー！2枚戻しやいいか…俺はブレイクストライク召喚！」

G・HEROブレイクストライク

効果モンスター

星1／風属性／戦士族／ATK0／DEF500

このカードは1ターンに1度、守備力を500ポイントアップできる。

このカードの守備力がアップした回数だけフィールド上に存在するカードを持ち主の手札に戻す。

G・HEROブレイクストライク

ATK 0

「このカードの守備力を500ポイントアップ!」

G・HEROブレイクストライク

DFE 500 ↓ 1000

「さらに装備魔法、風守のリングをブレイクストライクに装備!そして守備力を500ポイントアップ!」

G・HEROブレイクストライク

DFE 1000 ↓ 1500

「そしてこのカードの守備力がアップした回数だけフィールドのカードを手札に戻す。」

俺はレイジオンとフィールド魔法を手札に戻す!さらに融合発動!ブレイクストライクと手札のシールドリルを融合!

融合召喚! G・HEROドリルブレイク!!」

G・HEROドリルブレイク

融合・効果モンスター

星6/地属性/機械族/ATK 2000 / DFE 2600

「G・HEROブレイクストライク」+「G・HEROシールドリル」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は相手の手札の数×500ポイントアップする。1ターンに1度このカードは戦闘では破壊されない。

「さらにこのカードは相手の手札分だけ攻撃力を500ポイントアップする!」

G・HEROドリルブレイク

ATK2000↓4000

「いけ！ドリルブレイクでダイレクトアタック！！！」

『仮のデッキでは無理か……』

光

LPO

『もう行くがよい。半身が待っているぞ……』

「あ、ああ……そうだ！お前の名前って何だ！？」

『……………教えることはできない。』

「え？そつ、か……じゃあ、またな！」

紅代は現れた扉の向こうへ走っていった。

（またな、か……。それがお前の最後にならないといいがな……）

紅代は目覚めると枕元に置いてあった紙を見つけた。

「ちょっと俺、用事ができたんでデュエルフィールド行って来る。すぐに戻るから……！？デュエルフィールド……！」

紅代はベッドから飛び起きそのままデュエルフィールドに走って行った。

デュエルフィールドに行くと十代のデッキがばら撒かれ十代自身が倒れていた。

「十代！」

「アニキ!!」

全員が呼びかける中、紅代は頭が真っ白になった。

（え？十兄が倒れた？何で？どうして？十兄のカードが真っ白だ。

[illegible]

「そうさ、それでいいんだ紅代……。お前の片割れを酷い目に合わせ  
た奴に復讐だ！！！！」

紅代の瞳が銀色になった。光を宿さないその瞳は真っ直ぐと十代を倒した相手……エドに向けられていた。

「おい、待てよ……」

「っ！！」

エドは鋭い殺気を浴びて振り向く。

そこには銀色の瞳をした……そう、まさに鬼のような紅代が立っていた。

「十兄を倒したんだろ？なら、相当の腕みたいだな……。なあ、俺とデュエルしないか？」

「っ……！！」

その殺気の籠った視線は明らかに自分に向けられていたものだ。エドは断つたら命を失うと察したのか黙ったままデュエルディスクを構えた。

「き、君は何者なんだ？何故、十代と同じ姿を「気安く十兄の名前を呼んでんじゃねえ……！！」

紅代はもみあげに着けていたヘアピンを2つとも取るとそれを明日香に投げ渡した。

そして赤いヘアゴムで後ろ髪を縛り懐から赤いキャップ帽を取り出し被った。

「俺が何者か？俺はテメエなんかに乗る名前なんか持ち合わせちゃいねえよ……」

唯、この姿のときは紅の道化師マジックヒロって呼べ……。この名前は屑同然だからな……」

そう。その姿は裏デュエル界での紅代の姿。そしてこのコードネー

ムはデスベルのときのもだった。

「さあ、やるうぜ……楽しいデュエルをさあ……！……！」

## 第十四話 光と紅（後書き）

それでは次回はエドと紅ベネットの道化師状態ビエロの紅代のデュエルです。

## 第十五話 記憶と再会と友

「さあ、やろつぜ…楽しいデュエルをさあ…!!!!」

〈記憶と再会と友〉

紅代

LP 4000

エド

LP 4000

「俺のターン、ドロー！俺はG・HEROウインドピエロを召喚！」

G・HEROウインドピエロ

効果モンスター

星3 / 風属性 / 戦士族 / ATK 500 / DEF 2000

このカードは1ターンに1度相手の攻撃を無効にできる。

G・HEROウインドピエロ

ATK 500

「G・HERO…まさかお前…」

「カードを1枚伏せターン終了。」

紅代

LP4000

手札4枚

モンスター／G・HEROウインドピエロ（攻）

魔法・罠／リバーズ×1

「まさかお前、紅代なのか!？」

「あれ？俺、お前と会ったっけ？」

「僕だ！エドだ！エド・フェニックスだ！あの大会の頃は、よく一緒にデュエルしたじゃないか！」

エドは必死に思い出させようとする。

「覚えてないね。あの大会の頃の記憶はG・HEROを作ってもらったことしか覚えていない…。」

「なら僕がこのデュエルで思い出させてやる…！ドロー！僕はダイヤモンドガイ、召喚！」

D・HEROダイヤモンドガイ

効果モンスター

星4／闇属性／戦士族／ATK1400／DEF1600

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。

それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、

次の自分のターンのメインフェイズ時に  
その通常魔法カードの効果を発動することができる。  
通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。  
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

D・HEROダイヤモンドガイ

ATK1400

「僕はダイヤモンドガイのエフェクト発動！デッキの1番上のカードを確認し、  
そしてそれが通常魔法の場合次の自分のターンに発動することができる。僕のデッキの1番上のカードは…」

天使の施し！」

「早々に天使の施しか…」

「このカードを墓地に送り次のターン僕はこのカードのエフェクトを発動することができる！  
カードを2枚伏せてターンエンド！」

エンド

LP4000

手札3枚

モンスター/D・HEROダイヤモンドガイ（攻）

魔法・罠/リバーズ×2

「俺のターン、ドロー！俺は覇者の古城発動！」

覇者の古城

## フィールド魔法

1ターンの1度、自分の場にミイラトークン（アンデット族・闇・星1・攻100・守800）を1体特殊召喚出来る。

ミイラトークンが1体、召喚される度にこのカードに死霊カウンターを1つのせる。

死霊カウンター1つにつき、戦闘ダメージを100ポイント下げる。

死霊カウンターが5個以上あるこのカードが墓地に送られたとき、デッキ・手札・墓地から

『A・HERO ドレッドヴェルク』を1体特殊召喚できる。

「ミイラトークンを特殊召喚！」

## ミイラトークン

### トークン

星1 / 闇属性 / アンデット族 / ATK100 / DFE800

## ミイラトークン

DFE800

「このカードに死霊カウンターを乗せる。」

死霊カウンター×1

「俺はさらにG・HEROスプリットプリーストを守備表示で召喚！」

## G・HEROスプリットプリースト

### 効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK1000 / DFE1800

フィールド上に「覇者の古城」がある時、1ターンの1度「覇者の

古城」に死霊カウンターを2つ乗せる事ができる。

死霊カウンターを1つ取り除く事で墓地に存在する「G・HERO」1体の攻撃力1000ポイントアップし、特殊召喚できる。

G・HEROスプリットプリースト

DFE1800

「スプリットプリーストの効果で覇者の古城にカウンターを2つ乗せる。」

死霊カウンター×3

「ターンエンド。」

紅代

LP4000

手札3枚

モンスター/G・HEROウインドピエロ(攻)G・HEROスプリットプリースト(守)ミイラトークン(守)

魔法・罫/覇者の古城 リバース×1

「僕のターン、ドロー！僕はダイヤモンドガイの効果で墓地に送ったマジックのエフェクト発動！

デッキから3枚ドローし2枚を墓地に送る！」

天使の施し

通常魔法

自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選択して捨てる。

「僕はD・HEROドゥームガイを守備表示で召喚！」

D・HEROドゥームガイ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / ATK1000 / DEF1000

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、

次の自分ターンのスタンバイフェイズ時に、

自分の墓地に存在する「D・HERO ドゥームガイ」以外の

「D・HERO」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

「さらにフィールド魔法、幽獄の時計塔を発動！」

幽獄の時計塔

フィールド魔法

相手ターンのスタンバイフェイズ時に、このカードに時計カウンターを1個乗せる。

時計カウンターの合計が4個以上になった場合、

このカードのコントローラーは戦闘ダメージを受けない。

時計カウンターが4個以上乗ったこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

手札またはデッキから「D・HERO ドレッドガイ」1体を特殊召喚する。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

エンド

LP4000

手札2枚

モンスター / D・HEROダイヤモンドガイ（攻）D・HEROD

ウームガイ（守）

魔法・罾／リバーズ×3 幽獄の時計搭

（幽獄の時計搭…？D・HERO…？エド・フェニックス…？何だ、俺は何を、何を忘れている…！？）

「おい！」

「ん？」

紅代は振り返る。

「ハアハア、探しました。」

「お前は…」

「僕は『 』って言うんです。彼方が紅代さんですか？」

「ああ。で、何で俺の名前を？」

紅代は目を細めそう言った。

「じ、実はあの時、紅代さんの活躍を見てたんです。父さんを助け

てくれてありがとう！」

「…別に。」

紅代は『 を無視してスタスタと歩いていく。

「あ、待ってください！」

「何か用？俺、あんまり人と関わりたくないんだ。」

「そ、その…ぼ、僕とデュエルしてください！」

「何？」

紅代はイラついた様子で話す。

「それで俺に何のメリットがあるって言うんだ？」

「そ、それは……」

「……ハア、いいよ。1度だけならやってあげる。」

「ほ、本当ですか！？」

「ああ。手早く済ませるけどな。」

「「デュエル!!」」「」

---

「今のはッ…俺の、キオ…ク？」

「紅代！」

「誰だよ……、誰なんだよ！！俺の記憶に勝手に入って来んなッ！！！」

エドの声は紅代に聞こえない。

「僕は、僕は君の親友だッッッ！！！！！！」

「親…友…？」

「そうだ！思い出してくれ、一緒にデュエルをしたことを、一緒にデッキを組んでくれたこと、一緒に遊んだこと！！」

「エドが紅代君の親友？」

翔だけではなく全員が驚いていた。

「う、嘘だ…俺に、俺に親友なんて…！！だって俺は、いつも一人で、十兄しか…」

「僕を思い出せ、紅代…いや、コウッ！！」

「あ、ああああ…嫌だ、入って来るな…勝手に俺の記憶に、入って来るなああああああ！！！！！！！！」

俺はこのままターンを終了する！！！！」

「紅代、君は相変わらず僕が追いつけなさそうな高みにいる。だが、勝つのは僕だ！！今度こそ君を超える！！」

「うわあああ！！」

『』

L P O

「凄い、凄いです紅代さん！！」

紅代は駆け寄ってくる『』をつざつたそうに見た。

「…用は終わったんだろう？なら、俺は行かせてもらっつ。」

「紅代さん！！僕、いつか彼方を超えて見せます！だから、そのときは彼方の本当のデッキでデュエルしてください！！」

「……『』。」

「は、はい！」

「コウでいい。敬語もなしだ。年は近いんだからな。」

「え？」

『は拍子抜けした。』

「1歳違い。それだけだ。それと、暇なときはデュエルしてやる。それ以外は関わるな。不幸になるぜ。」

「わ、わかった！！ありがとうコウ！」

「……」

紅代は少し微笑んで『

』に向かって手を振った。

「……仮に俺とお前が親友だとする。だけどな、十兄を、俺の兄弟

を傷つけたやつは、誰であろうと許さない……!!!!」

「……。」

## 第十五話 記憶と再会と友（後書き）

次回はVSエド戦、後編です。

そしてあのキャラも登場！

## 第十六話 デスペルの刺客

エド

LP4000

手札2枚

モンスター/D・HEROダイヤモンドガイ(攻) D・HEROD

ウームガイ(守)

魔法・罾ノリバース×3 幽獄の時計塔

紅代

LP4000

手札3枚

モンスター/G・HEROウインドピエロ(攻) G・HEROSプ

リットプリースト(守)

魔法・罾ノリバース×1

「デスペルの刺客」

「俺はこれでターンエンドといきたいがその時計塔が邪魔だな。サイクロン発動！」

サイクロン

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罾カード1枚を選択して破壊する。

「考えたけどやっぱり破壊しておこうと思ってな。これで本当にターンエンドだ。」

紅代

LP4000

手札2枚

モンスター／G・HEROウインドピエロ（攻）G・HEROスプリットプリースト（守）

魔法・罾／リバーズ×1

「くっ、僕のターン！ドロー！僕はエターナル・ドレッド2枚を發動！」

エターナル・ドレッド

通常罾

「幽獄の時計塔」に時計カウンターを2個乗せる。

時計カウンター×5

「そして時計カウンターが4つ以上になったため幽獄の時計塔のエフェクトで僕は戦闘ダメージを受けない！（G・HERO相手に長期戦は不利だ…。何とかして終わらせないと。しかし、ドレッドガイの効果を使うには墓地にモンスターがあまりにもいない…。おまけにウインドピエロまでいる…。）僕はダイヤモンドガイを生贄にダッシュガイを生贄召喚！」

D・HEROダッシュガイ

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 2100 / DEF 1000

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる事で、このターンの

エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

このカードが墓地に存在する場合、1度だけドローフェイズ時にドローしたモンスターカードをお互いに確認し特殊召喚する事ができる。

D・HEROダッシュガイ

ATK 2100

「（ここでダッシュガイで攻撃してもウインドピエロの効果で無効にされてしまう…）なら、僕はドウムガイを攻撃表示にしウインドピエロに攻撃！」

「そんな手に引つかかるとでも？トラップ発動！攻撃の無力化！」

攻撃の無力化

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「くっ…！」

「バトルフェイズは終了だ。」

「ターンエンド…」

エド

LP4000

手札2枚

モンスター/D・HEROダッシュガイ(攻) D・HEROドゥー  
ムガイ(攻)

魔法・罠/リバーズ×1 幽獄の時計塔

「俺のターン、ドロー！」

紅代が不敵な笑みを浮かべる。

「来たか、俺のデッキの最強のマジックカード…。俺はガーディアン不死鳥の魔方陣を発動！」

ガーディアン 不死鳥の魔法陣

通常魔法

自分フィールド上の「G・HERO」2体につき相手のモンスターを1体除外する。

除外したモンスターの攻撃力分、相手ライフにダメージを与える。

このカードを発動したターン、自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。

「俺はダッシュガイを除外しダッシュガイの攻撃力分、相手にダメージを与える！」

「なに！？ぐっ、うわあああ！！」

ガーディアンの目の前に魔方陣が現れるとそこから不死鳥が現れだ

ツシユガイを焼ききった。

そしてそのまま不死鳥の体当たりでエドのライフが削られる。

エド

LP1900

「さらにスプリットプリーストを生贄にジョーキマジシャンを生贄召喚！」

G・HEROジョーキマジシャン

効果モンスター

星5 / 光属性 / 魔法使い族 / ATK1200 / DFE2800

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードが場に存在する限り、相手モンスターは召喚されたターン攻撃できない。

G・HEROジョーキマジシャン

DFE2800

「このカードが場にある限り、相手モンスターは召喚されたターンは攻撃できない！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

紅代

LP4000

手札0枚

モンスター / G・HEROウインドピエロ（攻） G・HEROジョー

ーキマジシャン（守）

魔法・罾 / リバース × 1

「おやおや、同士討ちとは…」

タロットカードを使って占っている青年、斎王は光の力を使ってエドのデッキから紅代とエドのデュエルをリアルタイムで観ていた。

「しかし、クイーンが正しき闇の力を持つ者の血族だったとは…。まあ、これも想定内。光と闇は表裏一体。互いに引かれあいますからね…。さあ、クイーンに選ばれし人間の力、見させてもらいましょうか。」

「僕のターン、ドロー！僕はドゥームガイを生贄にダブルガイを生贄召喚！」

D・HEROダブルガイ

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 戦士族 / ATK1000 / DEF1000

このカードは特殊召喚できない。

このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

このカードが破壊された場合、次の自分ターンのスタンバイフェイズ時、

自分フィールド上に「ダブルガイ・トークン」（戦士族・闇・星4・攻/守1000）を

2体特殊召喚する事ができる。

D・HEROダブルガイ  
ATK1000

「僕はダブルガイでウィンドピエロに攻撃！」

「ウィンドピエロの効果発動！1ターンに1度モンスターの攻撃を無効にする！」

G・HEROウィンドピエロ  
効果モンスター  
星3/風属性/戦士族/ATK500/DFE2000  
このカードは1ターンに1度相手の攻撃を無効にできる。

「ダブルガイは2度の攻撃ができる！」

「何！？ぐっ！」

紅代  
LP3500

「やっと削れたライフはたったの500か…僕はこれでターンエンド！」

エンド  
LP1900  
手札2枚  
モンスター/D・HEROダブルガイ（攻）  
魔法・罫/リバーズ×1 幽獄の時計塔

「俺のターン、ドロ―！俺はジョーキマジシャンを攻撃表示に変更！攻撃！！」

G・HEROジョーキマジシャン  
ATK1200

エド  
LP1700

「ダブルガイは破壊されたときダブルガイ・トークンを特殊召喚する！」

ダブルガイ・トークン  
トークン

星4/闇属性/戦士族/ATK1000/DEF1000

ダブルガイ・トークン  
ATK1000

「チッ、しぶとすぎ…ターンエンド！」

紅代

LP3500

手札1枚

モンスター/G・HEROジョーキマジシャン（攻）

魔法・罨/リバーズ×1

「僕のターン、ドロ―！（来たか、ドグマガイ！）僕はD・HEROデイスクガイを召喚！」

D・HEROディスクガイ

効果モンスター

星1/闇属性/戦士族/ATK300/DFE300

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

D・HEROディスクガイ

ATK300

「3体のモンスターを生贄にささげ、ドグマガイを特殊召喚！」

D・HEROドグマガイ

効果モンスター

星8/闇属性/戦士族/ATK3400/DFE2400

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「D・HERO」と名のついたモンスターを含む

モンスター3体を生け贄に捧げた場合のみ特殊召喚する事ができる。

この特殊召喚に成功した場合、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時に

相手ライフを半分にする。

D・HEROドグマガイ

ATK3400

「これで…ジョーキマジシャンを攻撃!!」

「ぐわあああ!!」

紅代

LP1800

「くっ……！俺はトラップを発動！ガード・チューナー！」

ガード・チューナー

通常罠

自分がダメージを受けたターン、自分のデッキから

「G・HERO」と名のついたチューナーモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「ガード・チューナーの効果でデッキからG・HEROスター・ライティングを特殊召喚！！」

G・HEROスター・ライティング

チューナー・効果モンスター

星3/光属性/戦士族/ATK1000/D FE1000

このカードが相手モンスターとの戦闘に破壊され墓地に送られたときデッキからカードを2枚ドローする。

G・HEROスター・ライティング

D FE1000

「カードを伏せターンエンド！」

エンド

LP1700

手札1枚

モンスター/D・HEROドグマガイ（攻）

魔法・罠/リバース×1 幽獄の時計塔

「俺のターン、ドロー！」

「このとき、ドグマガイの効果発動！相手のライフを半分にする！」

「っー！」

紅代

LP900

「くっ…ライフは残り900か…。俺はレベル5のジョーキマジシヤンにレベル3のスター・ライトニングをチューニング！シンクロ召喚！エドとか言っただな？お前に見せてやるよ、俺のエースを！！」

「来るか…」

「立ち上がれ、G・HEROシールドブレイ！！」

G・HEROシールドブレイ

シンクロ・効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / ATK2500 / DEF2700

このカードがシンクロ召喚に成功したときフィールド上の

このカード以上の攻撃力のモンスターをすべて破壊する。

このカードがフィールド上に存在する限り

「G・HERO」「A・HERO」と名のつくモンスターの自分への戦闘ダメージは0になる。

「シールドブレイはシンクロ召喚に成功したとき、このカード以上の攻撃力のモンスターを敵味方関係なしですべて破壊する！」

「なに!？」

シールドブレイが刀を振るうと風が巻き起こりドグマガイが破壊される。

「ダイレクトアタック! 撃壁剣!」げきへきけん

「ぐわあああああ!!!」

エド

L P O

「よし…勝ったぜ…!」

「くっ…さすがだな、コウ。」

紅代の瞳がいつも通りの茶色に戻る。

「っ…十兄!」

紅代はエドの言葉に返事もせず十代の元へと走っていった。そのとき、帽子がはずれ地面に落ちる。

「コウ…君は本当に…」

「……に…兄！…十兄！！」

「ん…？あ、れ…？」

十代は保健室で目を覚ました。

「十兄！」

紅代は思わず抱きつく。

「コウ！？よかった、元に戻ったんだな…。」

「ああ！ああ！やっと、やっとちゃんと話せる…！」

「コウ、俺たち…やっと元の兄弟に戻れたんだな？」

「うん！うん！」

十代は紅代を抱き返した。

「…コウ、俺は、カードが見えなくなっちゃった。」

「ああ、俺も見ただけで真っ白だったな。皆は絵柄や効果が見えるのに俺と十兄だけ見えないんだ。シヨックの類なんかじゃ絶対ない…！」

そのとき、保健室を何者かが覗いていた気配があった。

「……十兄、ちょっと待ってて……」

紅代はそつと十代から離れるとそのまま廊下に出て行った。

「あの後姿は…！っ、待て！」

紅代が廊下に出るとブルーの制服に銀髪の男子生徒が走って逃げ出していたのが見えた。  
全力で追いかける。

「待てっ！待ちやがれ！！何で、何でアカデミアにいるんだよ…！！銀の音色！！」

ピタリと紅代の言葉に反応し男子生徒は立ち止まった。  
そのままゆっくりと振り返る。

「1度しか会ったことがないのによくわかったね…。紅の道化師、いや、紅代君。」

「ああ、デスペルの幹部は1度しか会ったことがなくてもよく覚えてるぜ。」

振り返った少年は…

「そうか。でも、この学園では別の名で通しているんだ。今度からそれで呼んでくれるかな？」

狼銀二と、ね…」

この間、転校して来た狼銀二その人だった。

## 第十六話 デスペルの刺客（後書き）

と、言う訳で斎王が登場しました！

そして次回は紅代VS銀二のデュエルです！

## 第十七話 それはとつぜんの…

「銀の音色、いや、銀二。お前は何が目的だ!？」

紅代の言葉に不敵な笑みを浮かべる銀二。

「さあね。俺は上からの命令でやっているだけだ。」

「上だと…？今更デスベルが何の用だ!？俺はデスベルを抜け「勝手に抜けるなんて許されると思ったのか?」

銀二が紅代を壁際に追い詰める。

「っ!」

「逃がさないよ。」

紅代は逃げようとしたが両肩を掴まれ逃げられない。

「てめえ…!」

「逃がさない、いや、逃げられない。俺達からはね…」

「いつ…!」

掴まれた肩に力が入る。

「離せ!離しやがれ!」

「嫌だね。わかってるはずだ。お前はもう逃げられないんだよ。俺達デスペルの呪縛からはね…」

「逃げ切つてやる…！」

「無理さ。１度足を踏み込んでしまったら抜け出すことはできない泥沼。そこにお前は入り込んでしまったんだ。」

その言葉が酷く体の芯に浸透していく。

「逃げ切るさ…逃げ切つてやるさ…！俺は絶対に！」

「その言葉が無碍にならないといいけどね。」

銀二は紅代を離すと囁いた。

「逃げ切つても君の罪はなくなる…」

銀二はそのまま廊下を歩いていった。

「じゃあ、道化師のお手並み拝見といくよ。」

銀二が去った後、紅代はズルズルと地面にへたり込んだ。

『逃げ切つても君の罪はなくなる…』

「違う！違う違う違う！！俺は…罪をなくしたいから逃げ切るんじゃない！罪を背負い償うために逃げ切るんだ！」

紅代は壁に手をついて立ち上がるとデッキケースを握り締めた。

「逃げ切つて、罪を償う…！」

「それはとつぜんの…」

「それデーハ！シヨニヨール銀二とシヨニヨール紅代の実技デュエルをはじめのーネ！」

「フツ、よろしく。」

銀二が手を差し伸べ握手を求めるが紅代はその手を振り払い自分の位置に向かう。

「嫌われたな。まあ、とうぜんか…」

（あいつには絶対に負けない！！）

「「デュエル！」」

紅代

LP4000

銀二

LP4000

「俺のターン、ドロー。」

銀二が先攻を取る。

「俺は幻獣ワイルドホーンを召喚。」

幻獣ワイルドホーン

効果モンスター

星4/地属性/獣戦士族/ATK1700/DFE0

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

（幻獣？聞いたことないカード群だ…）

「さらにおろかな埋葬発動。」

おろかな埋葬

通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

「デッキから幻獣クロスウィングを墓地に送る。さらに幻獣クロスウィングの効果により俺の幻獣は攻撃力が300ポイントアップする。」

幻獣クロスウイング

効果モンスター

星4 / 光属性 / 獣戦士族 / ATK1300 / DFE1300

このカードが墓地に存在する限り、

フィールド上に存在する「幻獣」と名のついた

モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

幻獣ワイルドホーン

ATK1700 ↓ 2000

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

銀二

LP4000

手札3枚

モンスター / 幻獣ワイルドホーン（攻）

魔法・罠 / リバース × 1

「俺のターン、ドロー！俺はG・HEROスター・ライティングを  
守備表示で召喚！」

G・HEROスター・ライティング

チューナー・効果モンスター

星3 / 光属性 / 戦士族 / ATK1000 / DFE1000

このカードが相手モンスターとの戦闘に破壊され墓地に送られたとき  
デッキからカードを2枚ドローする。

G・HEROスター・ライティング

DFE1000

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

紅代

LP4000

手札4枚

モンスター／G・HEROスター・ライティング（攻）

魔法・罠／リバーズ×1

「俺のターン、ドロー。俺は幻獣ワイルドホーンでG・HEROスター・ライティングを攻撃する。」

「!？」

紅代の体をソリッドビジョンが貫く。

紅代

LP3000

「っ…！そのモンスター、貫通ダメージ持ちか…!？」

「そうだ。さあ、俺の奏でる音色をごゆっくりご堪能あれ…。」

紅代は噂で聞いていた。

銀の音色はこの言葉を口にしたデュエルは決して負けることはない  
と…

「スター・ライティングは破壊されたときデッキからカードを2枚  
ドローできる！さらにトランプカード、オープン！ガード・シグナ  
ル！」

ガード・シグナル

通常罠

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「G・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「このカードの効果でデッキからG・HEROシールドリルを守備表示で特殊召喚！」

G・HEROシールドリル

チューナー・効果モンスター

星4/地属性/戦士族/ATK1000/DFE2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り他の「G」と名のつくモンスターは

戦闘では破壊されない。

1ターンに1度、手札を1枚捨て相手フィールド上に存在する魔法、罠カードを1枚を破壊することができる。

G・HEROシールドリル

DFE2000

「俺はワイルドホーンを生贄に幻獣ロックリザードを生贄召喚。」

幻獣ロックリザード

効果モンスター

星7/闇属性/獣戦士族/ATK2200/DFE2000

「幻獣」と名のついたモンスターを生け贄に捧げる場合、

このカードは生け贄1体で召喚する事ができる。

このカードが戦闘で破壊したモンスター1体につき、  
相手ライフに500ポイントダメージを与える。  
相手がコントロールするカードの効果によって  
このカードが破壊され墓地へ送られた時、  
相手ライフに2000ポイントダメージを与える。

幻獣ロックリザード

ATK2200

「このカードは幻獣を生贄に召喚する場合、1体の生贄で召喚できる。さあ、お前のターンだ。」

銀二

LP4000

手札3枚

モンスター／幻獣ロックリザード（攻）

魔法・罠／リバーズ×1

「俺のターン、ドロー！俺は手札を1枚捨てることでシールドリルの効果を発動！マジック、トラップカードを1枚破壊する！伏せカード撃破だ！」

「なに！？」

「さらにブレイクストライク召喚！」

G・HEROブレイクストライク

効果モンスター

星1／風属性／戦士族／ATK0／DEF500

このカードは1ターンに1度、守備力を500ポイントアップでき

る。

このカードの守備力がアップした回数だけフィールド上に存在するカードを持ち主の手札に戻す。

G・HEROブレイクストライク  
D F E 5 0 0

「ブレイクストライクの効果発動！１ターンに１度だけこのカードの守備力を５００ポイントアップする！」

G・HEROブレイクストライク  
D F E 5 0 0 ↓ 1 0 0 0

「このカードは守備力をアップしただけフィールド上に存在するカードを持ち主の手札に戻せる！俺はお前の幻獣を戻す！」

「な！？」

ブレイクストライクの蹴ったボールによってロックリザードが手札に戻る。

「融合を発動！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「フィールドのブレイクストライク、シールドリルを素材にしドリルブレイクを融合召喚！」

G・HEROドリルブレイク

融合・効果モンスター

星6/地属性/機械族/ATK2000/DEF2600

「G・HEROブレイクストライク」+「G・HEROシールドリル」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は相手の手札の数×500ポイントアップする。1ターンに1度このカードは戦闘では破壊されない。

「お前の手札は4枚、よってドリルブレイクの攻撃力は4000だ！！」

「くっ…！」

G・HEROドリルブレイク

ATK2000↓4000

「さあ、いけドリルブレイク！ダイレクトアタアアック…！」

「ぐわああああ…！」

銀二

LPO

「よし…！」

（やっぱり…本来のデッキじゃなきゃ使いづらいなあ…）

思うことは様々。

紅代は走って保健室の十代の元に向かった。

「十兄！俺、転校生に勝ったんだぜって…十兄？」

しかし、保健室に十代の姿はなかった…

**第十七話 それはとつぜんの…（後書き）**

十代は原作どおり海に出ました。

紅代、十代がいなくなって次回は暴走気味です。

翠のデュエルでもしようと思います。

第十八話 風の巫女とガスタ 運命を見通す者、  
斎王の登場（前書き）

今回は短いです。

## 第十八話 風の巫女とガスタ 運命を見通す者、斎王の登場

斎王はタロットカードを使って占いをしていた。  
出たのは…

「遊城十代の魂ははまだ彼自身が所有している…ならば…」

出たのは女教皇。

意味は知性、平常心、洞察力、客観性、優しさ、自立心、理解力、  
繊細、清純など…

「彼の弟は、クイーンともう1人の精霊が見える少年はどうでしょうね…？」

「風の巫女とガスタ 運命を見通す者、斎王の登場」

「十兄！十兄！どこにいるんだよ！返事しろー！！」

紅代は行方不明になった十代を探して森の中を歩き回っていた。

「ハアハア…。くそっ！十兄、何処に行ったんだよ…！カードが見えなくなったからって、そんなの、そんなの十兄じゃ、十兄じゃないよお…！やっと、やっとちゃんと話せるようになって少ししか絶

ってないのにこんなのって、こんなのって…」

紅代は地面に膝をつき地面を殴りつけた。

「くっそお…」

「情けないぞ紅代。」

声ができるのに驚いた紅代は急いで振り向く。

「万丈目…」

そこにいたのは万丈目だった。

「まったく、俺は這い上がってきたのにアイツは…ほら！」

万丈目は紅代にレモンジュースを手渡す。

「少しは休め。貴様、夕飯も食わずに飛び出して行っただろう？安心しろ、夕飯はリョーマがトメさんに頼んで確保してくれたぞ。」

「リョーマ？」

リョーマと面識のない紅代は首をかしげる。

「転校生の1人だ。」

「転校生…。そうだ！万丈目、言い忘れたけど…」

紅代は万丈目に転校生の1人、狼銀二がデスペルの幹部だということ

とを教えた。

「なに！？デスペルの幹部！？」

「うん。」

「何故もつと早く言わなかった！？」

「危害がなさそうだったからだよ。でも、今回の十兄の行方不明にあいつらが関わっているとしたら…！どうしよう！？十兄が、十兄が…！！」

紅代は万丈目の肩を掴んで今にも泣きそうな顔でいう。

紅代はデスペルにいたとき、兄である十代と両親を人質として取られていたこともあり、もしまた十代がデスペルの人質になっていたら自分もデスペルに連れ戻され兄である十代はもつと酷い目にあってしまうと恐怖した。

「落ち着け紅代！まだそうだと決まったわけじゃない。それに荷物が持ち出されていたんだ。その可能性は低い。」

「でも、あいつらは！デスペルは平気でそういうこともするんだ！俺を連れ戻したがってたし…。なにより、狼銀…銀の音色はデスペルの中でかなり頭のキれるやつだから、監視とか言って本当は十兄を攫うつもりでこの学園に来たのなら…」

万丈目はいい加減にしろ！と言いながら紅代の頭を思いっきり殴った。

「アイタツ!!」

「それならもつと早く行動を起こしていたはずだ!」

「様子見つてこともありえるだろう!？」

万丈目はため息をつく。と紅代の腕を掴んで船着場にやって来た。

「痛い!痛いって万丈目!」

「船着場には5つのモーターボートがある。そのうち1つがなくなつていたら十代が出て行つたという証拠だ。デスペルの銀の音色とやらは頭がいいんだな?なら、十代が学園内にいるように自分の用意した船で行くはずだ。わざわざ搜索範囲を広げさせるような真似はしないだろうからな。」

「そっか…」

モーターボートは4つあった。

「十兄は、本当に…何で?」

「教えてあげましょうか?」

声が出た方に顔を向けると白いスーツを着た男がいた。

「誰だ貴様!」

「いきなり現れて失礼。驚かせてしまったようだね。」

紅代の瞳が一瞬、銀色に染まる。

「てめえ…何者だ!？」

「警戒しなくていい。私は斎王。君達の後輩、エド・フェニックスのマネージャーをやらせてもらっている。」

「エド・フェニックスの…マネージャー？」

紅代の顔が怒りに歪む。

「あいつのマネージャーが何の用だ!」

「なに、君達とデュエルがしたくてね。」

『アニキ…なんか怖いよあの人…』

万丈目におジャマイエローが話しかける。

「私の目にかかれば君をプロリーグに推薦してもいい。」

「明らかに何か企んでますって顔をしているやつの施しなんか万丈目は受けないよ!」

万丈目の瞳が驚きで見開かれると同時に紅代が斎王に言い放った。

「何も企んでいないですよ。」

「わかるんだよ。そういうやつが沢山いる所にいた時期があったんでね…」

両者の睨み合いが続く。

「止める、睨み合っても何も始まらないだろう！ここは大人しくデユエルを受けよう。」

「でも、アイツの狙いは！」

万丈目に食いつく紅代。

その言い合いを遮るように声が響いた。

「あーあ、バツカみたいね。」

「「「！？」」」

声がした方に振り返ると緑のスカートに白い半袖の服を着て緑色の髪をストレートにした仮面の少女がいた。

「な…！」

「あ、紅代君に万丈目君。」

「な、何故俺達の名を…！」

万丈目の顔を見ると仮面の少女は声を上げて笑い始めた。

「キヤハハハッ！！そんなの私がデスペルだからに決まってるじゃない♪ターゲットとその周囲の人間とかは調べておくに決まってるじゃん♪」

「デスペル！？まさか十代は…」

「安心してよ、霸王君には手出ししてないから。あと1週間くらいで戻ってくると思うよ。」

「霸王だと？」

万丈目は霸王という単語に首をかしげる。

「お前は…」

「まあ、会ったことないよね。私は彼方がアカデミアに入ったとき正式に名前を貰って活動し始めたんだもん。一応名乗っとくよ。私は風の巫女。デスペルの幹部だよ。」さて、斎王さんだっけ？私達のクイーンに手を出すんだったら容赦しないからね。ここで潰すから。」

仮面の下顔から笑みが消えた。

「面白いですね彼方は。いいでしょう。」

「小細工無しの普通のデュエルでいこうか。」

「小細工とは？」

「タロット占いみたいなやり方だよ。」

「あれが小細工とは、彼方はつくづく面白いですね。」

斎王がデュエルディスクを構える。

風の巫女も羽のようなデュエルディスクを構えた。

「デュエル！」

風の巫女

LP4000

斎王

LP4000

「私のターンからだね。ドロー！私はガスタの巫女ウィンドを召喚するよっ」

ガスタの巫女ウィンド

効果モンスター

星2/風属性/サイキック族/ATK1000/DFE400

このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

ガスタの巫女ウィンド

DFE400

『マスター、いっくよー！』

ウィンドが喋ったのがたしかに万丈目には見えた。

「頼りにしてるよウィンドちゃん」私はカードを1枚伏せてターンエンドっ！」

風の巫女

LP4000

手札4枚

モンスター／ガスタの巫女ウィンダ（守）

魔法・罠／リバーズ×1

「私のターン、ドロー。私はアルカナフォース0 - THE FOOL  
を守備表示で召喚。」

アルカナフォース0 - THE FOOL

効果モンスター

星1／光属性／天使族／ATK0／DFE0

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードは守備表示にする事ができない。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、

コイントスを1回行い以下の効果を得る。

●表：このカードを対象にする自分の魔法・罠・効果モンスターの  
効果を

無効にし破壊する。

●裏：このカードを対象にする相手の魔法・罠・効果モンスターの  
効果を

無効にし破壊する。

アルカナフォース0 - THE FOOL

DFE0

「ストップとってください。このカードが正位置で止まった場合、  
このカードを対称にする私のマジック、トラップ、効果モンスターの  
効果を無効にします。」

「うーん…ストップだよ」

回転が止まった。

「正位置ですか。これでこのカードは私の発動するモンスター効果を今後一切受けません。ですが戦闘では破壊されませんからそのつもりで。」

「わあ、いきなり鉄壁の守りが来ちゃったね！それにウィンダは破壊されなきゃ効果が使えないし、アッ！言っちゃった」

（（こいつ、ふざけてるのか？））

紅代と万丈目の心がシンクロした瞬間だった。

「カードを1枚伏せてターンエンドです。（貴女が次にドローするのは…）」

斎王

LP4000

手札4枚

モンスター/アルカナフォース0・THE FOOL（守）

魔法・罫/リバーズ×1

「私のターン、ドロ」

風の巫女はドローしたカードをデュエルディスクに読み込ませた。

「ガスタ・ガルドを召喚するよ」

「なに！？（貴女がドローするのはガスタの疾風リリースだったはず……！）」

斎王はガスタ・ガルドを見ながら驚きの声を上げた。

ガスタ・ガルド

チューナー（効果モンスター）

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK500 / DEF500

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

自分のデッキからレベル2以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ガスタ・ガルド

ATK500

斎王が紅代の方へ視線を向けると紅代の瞳が銀色になっていた。

（そうか、紅代さん。彼方が私の力を邪魔しているのですね……！）

「レベル2のガスタの巫女ウィンダにレベル3のガスタ・ガルドをチューニング！風の鳥獣の羽ばたきがガスタの里に大風を巻き起こす！シンクロ召喚！飛べ、天高く！ダイガスタ・ガルドス！」

ダイガスタ・ガルドス

シンクロ・効果モンスター

星5 / 風属性 / サイキック族 / ATK2200 / DEF800

チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター1体以上

1ターンに1度、自分の墓地に存在する

「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、  
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して  
破壊する。

「シンクロだど！？アレは紅代だけの召喚方法じゃなかったのか！  
？」

「……シンクロが何で？それにガスタって……」

「っ！紅代、お前瞳が……」

「え？」

（気づいてないのか！？瞳の色が変わっていることに……！）

万丈目の疑問は晴れぬままデュエルは続く。

**第十八話 風の巫女とガスタ 運命を見通す者、斎王の登場（後書き）**

あれ？翠のデュエルを書くつもりがいつの間にかデスペルの幹部V  
S 斎王になってしまった…次回、決着です。

第十九話 風の巫女VS斎王決着！ バラバラに千切られたE・HERO

斎王

LP4000

手札4枚

モンスター／アルカナフォース0-THEFOOL（守）

魔法・罾ノリバース×1

風の巫女

LP4000

手札4枚

モンスター／ダイガスタ・ガルドス（攻）

魔法・罾ノリバース×1

「風の巫女VS斎王決着！ バラバラに千切られたE・HERO」

「さらにフィールドを離れたガスタ・ガルドはレベル2のガスタを呼び出す！ 舞い上がれ、ガスタ・イグル！」

ガスタ・イグル

チューナー（効果モンスター）

星1／風属性／鳥獣族／ATK200／DEF400

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキからチューナー以外のレベル4以下の

「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ガスタ・イゲル

DFE400

「さらにダイガスタ・ガルドスの効果発動！墓地のガスタ2体をデッキに戻して相手のモンスターを撃破！」

ダイガスタ・ガルドス

シンクロ・効果モンスター

星5/風属性/サイキック族/ATK2200/DFE800

チューナー+チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター1体以上

1ターンに1度、自分の墓地に存在する

「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

ダイガスタ・ガルドス

ATK2200

「ふふふ…トラップ発動、逆転する運命！」

逆転する運命

通常罫

自分フィールド上に表側表示で存在する「アルカナフォース」と名のついた

モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターがコイントスの裏表によって得た効果は逆にな

る。

「させないからね、トラップ発動ッ！トラップ・スタン！」

トラップ・スタン

通常罠

このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「このカード以外のトラップの効果をこのターン、無効化するよッ！」

「そ、そのようなカードが!？」

斎王は紅代を睨みつける。

「そもそも、クイーンと覇王の友人を手に加えようとした時点で彼方は愚かだったんだよ。クイーンなんて強大な力は特に、個人が手にするには大きすぎる。」

「クイーン？」

紅代は何故、風の巫女が自分をクイーンと呼ぶのかわからなかった。

「それに俺、男なんだけど？」

「ツッコむところはそこか!？」

万丈目は目を見開いて紅代の発言に驚く。

紅代って案外又けているな〜と実感する瞬間であった。

「くっ！私のアルカナフォースがやられるとは…」

「さらにダイガスタ・ガルドスでダイレクトアタック！」

「ぐわああああ！！」

斎王

LP1800

「カードを伏せてターン終了っ」

風の巫女

LP4000

手札3枚

モンスター／ダイガスタ・ガルドス（攻）

魔法・罫／リバーズ×1

「くっ…私のターン、ドロー。私はマジック、運命の選択を発動。」

運命の選択

通常魔法

自分の手札から相手はカード1枚をランダムに選択して発動する。  
それがモンスターカードだった場合、自分フィールド上に特殊召喚する。

「さあ、私の手札からカードを選んでください。それがモンスターカードだった場合、そのモンスターをフィールドに特殊召喚します。」

「じゃ…右から2番目のカードで。」

あまりにも簡単に選んだ風の巫女。

「くくくつ…貴女が選んだカードはモンスターカードです!!」

アルカナフォースXIII・THE HANGMAN  
効果モンスター

星6/光属性/天使族/ATK2200/DEF2200

このカードの召喚・特殊召喚に成功したとき、コイントスを1回行い以下の効果を得る。

●表：1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を破壊し、

自分はその攻撃力分のダメージを受ける。

●裏：1ターンに1度、相手フィールド上のモンスター1体を破壊し、

その攻撃力分のダメージを相手に与える。

「このカードが特殊召喚に成功したため効果が発動します。さあ、カードの回転を止めてください。それが貴女の運命を左右する…」

「キャハハハハハッ!!! 斎王。たしかに運命はあるよ。でも、その運命の壁をも乗り越えることだってできる。そしてその先に待つのは運命に左右されない未来だよ。ストップ!」

カードの回転が逆位置で止まろうとする。

しかし、すぐにまた回り始め正位置になった。

「な!?!」

「やった!」

「こつちには勝利の神様がいるからね」

「どういうことだ、一度止まったカードがまた…」

斎王は自分の見通した未来と違うのに驚き、紅代はその様子を見て斎王が不利なことに気づき声を上げる。

風の巫女は紅代を見て口元に笑みを浮かべ、万丈目は何故1度止まったカードが再び動いたのかを考えた。

「くっ…1ターンに1度、私のフィールドのモンスターを破壊しその攻撃力分のダメージを私が受ける…！」

斎王の場のアルカナフォースが破壊されると同時に斎王のライフが0になった。

「ぐわあああああ…!!」

斎王

L P O

「パーフェクトデュエルだど!？」

「すげえ…」

「言ったでしょ、運命という名の壁は乗り越えられるってね」さて、クイーン様っ」

風の巫女はデュエル終了と同時に紅代の元に近寄る。

「何だ…！」

「警戒しないしな…い！この学園では友達なんだから」

風の巫女が仮面を取る。

「な！？」

万丈目はその顔を見て驚く。

「私のこのデュエルアカデミアでの名前は織原翠！よろしくね！」

「織原、何故…！」

風の巫女は転校生、織原翠だった。

「デスペルの命により、本日より遊城紅代の監視役となりました！」

「監視！？」

「そう。彼方が光の結社の手に渡らないかだよ。あ、心配しないであくまで監視役だから手出ししないよ。危ないとき助ける護衛と監視ってだけ♪」

紅代は怒鳴る。

「あ、安心できるか…！」

「おお、怖い怖い！じゃ、また明日ねー！」

翠はどこぞへと消えてしまふ。斎王もどこかへ消えていた。

「あ、嵐のようなやつだったな……」

万丈目が感じたのは翠がいきなり現れすぐに去って行ったところから嵐のような人間ということだけだった。

食堂

「万丈目君、紅代君！」

食堂に集まっていたカイザーを含めたメンバーが帰ってきた紅代と万丈目を出迎える。

「どうしたの、暗い顔して？」

「天上院か。紅代、疲れているだろう？部屋で休んでおけ。夕飯…もう朝食か。朝食は部屋に後で持って行ってやる。」

紅代は小さく頷くと顔を俯かせながら十代の部屋へと行った。

「……あそこって、十代の部屋じゃなかった？」

紅代の食事を確保したりヨーマがやって来るなり十代の部屋に向かった紅代を見て言った。

「重症だドン。」

何気に初登場、剣山。

紅代は面識なしだが兄貴分である十代から耳がタコになるほど紅代のことを聞かされ、十代が世話していた紅代のことを見ていたので知ってはいる。

「相当依存しているな。」

「まあ仕方ないか。俺は心理学者ではないからうまく言えないがイジメで孤立していた紅代に手を差し伸べた兄の十代は紅代自身にとって神のような存在だろうからな。」

カイザーの発言に冷静に答える三沢。

三沢は現時点で紅代からは空気と認識されていない。

よかったね三沢」

「実は…」

万丈目は先ほどあった出来事と翠、銀二がデスペルの幹部だということ話を話した。

「まさか織原君と狼が…」

「でも何でデスペルは紅代君をまた連れ戻そうとしているんすかね？」

「紅代がクイーンという存在だからか？」

上から三沢、翔、カイザーが順番に言う。

「とにかく、そのデスペルってヤバイんでしょ？」

リョーマがだったらと言う。

「十代がいない今、紅代は俺達で守るしかないと思う。そうでしょう？」

「そうだドン！織原と狼は紅代先輩に近づけないようにするドン！」

「それには最低1人でも常に紅代のそばにすることが大切ね。」

「よし、紅代をなるべく1人でいさせないようにしよう！」

三沢の発言で誰か最低1人でも紅代のそばにいるようになった。

港

「  
…」

紅代は次の日、朝早くから一人で港に来ていた。

翔達の目を掻い潜り一人、港に来て十代の帰りを待っているのだ。

「こんな所にいたのか。」

後ろから声かけられる。

「っ！エド・フェニックス？」

説明しておこう。

紅代がエドを覚えていないのはエドと会ったのがマインドコントロールを受けている時期だったからだ。

ただし、マインドコントロールの効果が弱まっていたのである程度、自我を持っていたが。

「エドでいい。」

「何度も言ってるだろう。俺はお前のことなんて知らない。親友だなんて事実もだ。」

「わかっている。渡したいものがあつて探していた。」

「渡したいもの？」

紅代はエドを見やった。

エドはデュエルとき紅代の落とした帽子を差し出した。

「い、いらない…。それは、俺の忌まわしい過去の産物だ。」

「…じゃ、僕が被るよ。」

「ハア！？」

紅代は隣に座ったエドが自分の帽子を被ったのを見てスットンキョな声を上げる。

「くれるんだろ？」

「どうやったらそういう解釈になる!」

「いらないと言ってもこのまま捨てたらいけないじゃないか。」

「だからってお前にあげるとは言っていない!!」

紅代は怒鳴ってエドの頭から帽子を取り上げようとした。  
しかし帽子は風に乗って海に落ちる。

「あ!」

「チツ…」

エドは帽子を取りに行こうと海を覗き込んだ。

「っ!コウ!!」

「だあかあああ、コウって呼ぶな!」

「いいから見ても!」

エドは焦った様子で紅代を引っ張り海を覗かせた。

「こ、これは…!」

紅代の目に映ったのは大量のバラバラに千切られた無残なE・H  
E ROのカード達だった。

「そんな…E・HEROが!!」

「紅代先ぱーいー!!」

「紅代くーん!」

そこに紅代を慌てて探していた翔と剣山が現れた。

「あー! エド・フェニックス!!」

「翔、剣山…手伝ってくれ。」

紅代はレッドの上着を脱ぎ白と黒の十字架模様のTシャツになると海に飛び込み千切られたカードを拾い集め始めた。

「酷い! カードが…」

「しかもこのカード、E・HEROだドン!」

「コウ!」

翔、剣山も海に飛び込みカードを集め始める。

「…僕も手伝おう。」

エドもスーツの上を脱ぎ海に飛び込んだ。

「エド…! ?」

「親友は助け合うものだろう? それに、E・HEROは僕も使っているからね。こんな風にされるのはすごく腹が立つんだ。」

「親友になった覚えはないけど…助かる。」

その後、リョーマが応援に呼んだ万丈目、明日香、三沢、カイザー  
によって全てのカードは回収された。

**第十九話 風の巫女VS斎王決着！ バラバラに千切られたE・HERO（後書**

さて、パーフェクトデュエルを達成した風の巫女は翠でした。

そしてバラバラに千切られたE・HERO。  
犯人は誰なんでしょうか？

次回もお楽しみに！

## 第二十話 紅代に起こりし変化

バラバラに千切られ海に捨てられていたE・HERO…

回収したそれを見て紅代は齒軋りをして瞳に憎悪を宿していた。

く紅代に起こりし変化く

「よくも、よくもHEROをこんな風に…!!」

「酷いねこれは…」

リヨーマはそう言つとカードを乾かしテープでつなぎ始める。

「誰がこんなことを…」

「海水に浸かっていたから指紋は残っていないだろうな。」

明日香と三沢の言葉に紅代は顔を歪ませて自分の部屋に入っていた。

「で、何でエド・フェニックスがここにいるんだドン!？」

剣山の言葉でエドに視線が集まる。

「それはコウと同じように僕もそのE・HEROをバラバラにした人間が許せないんだよ。」

エドの言葉の後、明日香がなにやら思いつめているのに紅代は気づいた。

「明日香…？」

「……………まさか、あいつが？」

「あいつって誰だよ明日香！知ってるのか？E・HEROをこんなにしたやつのことを！」

明日香に突っかかっていく紅代。

「お、おい紅代！」

それを万丈目が抑える。

「…ええ。心当たりならあるわ。」

明日香はその心当たりのある人物のことを話し始めた。

「雄飛京助。オベリスクブルーの2年生よ。ずっと前から私にアタックし続けてきてる何度断つても付き纏ってくる迷惑な男で、デュエルで卑怯な手口を使ったり、万引きや、カンニングをしょっちゅうしてると噂のアカデミアの嫌われ者よ。って、あれ？紅代は？」

明日香が説明し終わると既に紅代はその場からいなくなっていた。

「さっき、どこかに出て行ったよ。」

リョーマの言葉に顔を青くするエド以外の全員。

彼らは紅代のブラコンっぷりを知っているのだ。そう、このままだと危ない。

雄飛京助が……

「お前が雄飛京助か…」

紅代は近くの森で黒髪の男を見つけていた。

「くくくつ… おやおや誰かと思えばオシリスレッドの遊城十代の弟君じゃないか。」

「御託はいい。E・HEROを千切って海に捨てたのはお前か？」

「何を聞くのかと思えば… そうさ！あの男さえいなければ明日香君は僕のものになってくれたというのに！明日香君を取ったあの男が憎い！あの男が使うHEROが憎い！だから破り捨てたのさ！彼自身のは無理だから僕の買った屑HEROだけね。」

ブチッ

その瞬間、紅代の中の何かが切れた。

「構えろ。デュエルだ。明日香に付きまとうことも許せないし八つ当たりにもカードを破ったことも許さない！！」

「ハッ！なら僕が勝ったら君のデッキを頂こう！」

「俺はお前なんかじゃ負けねえよ！！」

「「デュエル！」」

紅代

LP4000

京助

LP4000

「僕のターン、ドロー！僕は魂を削る死霊を守備表示で召喚！」

魂を削る死霊

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / ATK300 / DEF200

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になった時、このカードを破壊する。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

「さらに王家の眠る谷・ネクロバレーを発動！」

王家の眠る谷・ネクロバレー

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのプレイヤーは墓地のカードに効果が及ぶ

魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし、

墓地のカードをゲームから除外する事もできない。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の「墓守の」という名のついたモンスターカードの

攻撃力・守備力は500ポイントアップする。

「さらに王家の生け贄を発動！」

王家の生け贄

通常魔法（準制限カード）

「王家の眠る谷・ネクロバレー」が自分フィールド上に存在している時に発動する事ができる。

お互いの手札にあるモンスターカードを全て墓地に捨てる。

「このカードの効果でお互いの手札のモンスターを全て捨てる！」

「くっ…！」

紅代は苦い顔をして3枚：手札のモンスターを捨てる。

逆に京助は1枚も手札を捨ててなかった。

（クククッ…馬鹿正直に手札を捨てるなんて馬鹿のやることだよ…！）

スッ

紅代の瞳の色に銀色が混じっていく。

「嘘ですね…殺しますか？YES・それでは存在を消滅させますか？YES・了解しました。」

紅代はぶつぶつと呟きそしてスッと京助を見やった。  
瞳は完全に銀色に染まっていた。

「僕はターンエンド！」

京助

LP4000

手札2枚

モンスター／魂を削る死霊（守）

魔法・罠／王家の眠る谷・ネクロバレー

「私のターン、ドロー。私は強欲な壺を発動。」

その声はまったく別人の声。

強欲な壺

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドロースる。

「愚か者。私はハンデスを批判するわけではありませんが、ルールを守らない者はデュエリストではありません。いえ、全てのゲームから批判される存在になりますよ？私はカードを2枚ドロースる。そして白き舞姫を特殊召喚します。」

紅代？

LP3000

白き舞姫

効果モンスター

星4／光属性／魔法使い族／ATK3000／DEF500

このカードは通常召喚できない。

このカードはライフを1000ポイント払うことで特殊召喚できる。

このカードが召喚に成功したとき相手のデッキから

相手の手札の枚数分墓地に送る。

その後、墓地に送った枚数×相手フィールド上のカードを破壊することができる。

「そして白き舞姫の効果で相手の手札分、相手はデッキからカードを墓地に送ります。」

「な、何だ！？手が勝手に2枚のカードを…！？」

白き舞姫が纏っている衣で京助を縛り上げデッキの上からカードを墓地に送る。

「さらに送った分だけ相手のフィールドのカードを破壊。私はフィールド魔法と魂を削る死霊を破壊します。」

カードとモンスターが光り輝き消滅していく。

「そして光の兵隊を通常召喚します。」

光の兵隊

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK1200 / DEF100

このカードはフィールド上に存在するモンスター×2攻撃できる。

「いきます。私の場にはモンスターが光の兵隊を入れて2体。光の兵隊はモンスターの数かける2回攻撃できます。」

「2×2は4…計4回の攻撃！？後攻1キル！？」

「いきます。光の兵隊、いきなさい。愚か者を殺せ。」

4人の騎士達が光を纏った剣で京助を切り裂いた。

「うわあああああああ……！！！！！！！！！！」

京助

LP400

光の渦が地面に現れ京助を飲み込んでいく。

「ぐっ……ギヤアアアアアアアアアア！！！！た、助け……！」

「彼方の存在を消滅させます。決定事項です。カードを侮辱したことで、精霊を侮辱したこと、デュエリストを侮辱したこと自分を恨んでください。」

「ゴホッ……ガハッ！」

京助の姿は渦に飲み込まれ消えていった。

「残念でしたね雄飛京助。」

「……もうすぐだ。目覚めよ、滅王紅代。めつおうこうだい我が使命の為の器よ。」

## 第二十話 紅代に起こりし変化（後書き）

次回は十代にスポットライトを当ててみます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6839v/>

---

遊戯王GX 十代にもし双子の弟がいたら...

2011年10月29日15時11分発行